

菅江真澄資料センター

# 真澄研究

25号

---

菅江真澄『わがころ』再考……………石井正己	1
真澄さんから学ぶアイヌの文化 『蝦夷喧辞辯』にみる「理氏武者」考……………佐々木利和	17
現代語訳《ふでのまにまに》第一巻……………嵯峨彩子	33
第3期内田文庫資料目録……………	96 (1)

---

令和3年3月

秋田県立博物館

# 菅江真澄『わがこころ』再考

東京学芸大学教授 石井正己

## 一 菅江真澄の和歌の再評価

この一〇年ほどの菅江真澄研究の動きの一つに和歌の研究があることは、多くの人が認めるところであろう。個別の論文を脇に置いて、佐伯和歌子『菅江真澄の旅と和歌伝承』（岩田書院、二〇〇九年）、錦仁『なぜ和歌を詠むのか―菅江真澄の旅と地誌―』（笠間書院、二〇一一年）、細川純子『菅江真澄の文芸生活』（おうふう、二〇一四年）が続いた。今では和歌の研究は真澄研究の王道になったと言ってもいいかもしれない。

しかし、ここまで来るのにはずいぶん時間がかかった。その原因に柳田国男の発言があったことは言うまでもない。柳田は昭和三年（一九二八）九月、秋田図書館の菅江真澄翁百年記念祭で「秋田県と菅江真澄」という講演を行った。これは、昭和五年（一九三〇）九月発行の『秋田考古会々誌』第二巻第三号に掲載され、やや時を隔てて、昭和一七年（一九四二）の『菅江真澄』（創元社）に収録された。その中に、こんな一節があった。

最終に尚一つ、思ひ切つた私の批評を申しますと、真澄翁の歌には殆ど一首として名歌がありません。単に凡庸だといふのみで無く、其吟詠の態度にも、文章の方に現はれて居るやうな真率味がありません。当地にも大分短冊などを珍重して居られる人が多いやうですが、手跡までは彼是申さぬとして、其歌が些しでも感服しないのであります。この程度の歌よみならば、あの頃の江戸にも実はあり過ぎる程ありました。強ひて感心するならば即興の敏捷、千首万句口を突いて出るといふ点で、之を要するに唱和の雄でありました。

このようにして、柳田は五〇〇〇首を超える真澄の「歌」を全面的に否定したのである。その評価は「名歌」かどうかという視点であり、別に「今の人を感動せしめるやうな歌」とも述べている。だが、それは「文章」を高く評価するのと対照されていることに注意する必要がある。そこにあるのは、

「文章」に書かれた民俗に関する記述が持つ精細さに比べ、「歌」は「真率味」がないとする見方である。それは、「文章」を評価するために「歌」を批判するものであったと思われる。

だが、引用の末尾では、「強ひて感心するならば」という条件を付けながらも、「唱和の雄」であることを一方では認めていることが目を引く。「生涯之を職業として、あの安定せざる生活の間で、能く是だけの功績を挙げられたことも、所謂歌の徳と解することは出来るのであります」とも続けた。「歌の徳」つまり和歌の力が「安定せざる生活」を支え、「是だけの功績」を挙げたということを確認しているのである。

柳田が「名歌」を評価の基準にしたのは、やはり「今の人」の価値観によるものであって、真澄の和歌を遊覧記の文脈に即して読むことはしていない。この「名歌」という視点は、近代的な和歌認識に拘泥しすぎている嫌いがあるのではないか。冒頭に挙げた著書はこうした柳田の見方に批判的で、そこからの脱却を図ろうとするものであった。実際、近年の真澄研究では民俗学に束縛されない視点で真澄を読むようになってきているので、もはや和歌を無視した議論は成り立たないところまで来ている。

そうした研究動向に配慮しつつ、改めて真澄と和歌の関係を考えるならば、まず特筆すべきは天明三年（一七八三）の

日記『わがこころ』ではないか。日記『伊那の中路』には、八月一三日に、「姨捨山の月見に、おもふどち、いざなひて行てんとてたびだちぬ。此日記は『わがこころ』と名づけて、外にひとまきとしたり」とある。八月一三日から二〇日までの「姨捨山の月見」に関わる「日記」は「わがこころ」として別巻にしたのである。これはやや異例の措置で、このときの記述が膨らんだということもあるが、それだけでなく、この日記を一編の作品とする意図があったにちがいない。

実は、『わがこころ』には、八月一五日に観音堂に着いたとき、「われ、あげまきの昔（若年のころ）、此庵に二夜もりて月見しところなれば、猶むかしのしのび出られて、ところく見ありくに、「秋をば捨ての山桜」と、ながめおき給ひしその梢ども、はつしほちしほにもみぢたり」とある。真澄は少年の頃、この観音堂に二晩籠もって月見をしたことがあったのである。しかし、それがいつのことかは明らかでない。

だが、年長者が口ずさんだ「秋をば捨ての山桜」は、このときの詠歌ではなく、内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記 1』（平凡社、一九六五年）の注記に、『夫木集』巻四の「今よりは秋をば捨の山桜はなと月との有明のころ」（源具親）であるという指摘がある。この歌は、今からは秋を捨

て、春の季節に姨捨山を訪れると山桜が咲いていて、花と有明の月があるのを楽しむことができる、くらしい意味になる。この歌を引いたことからすると、かつて真澄が訪れたのは三月下旬の頃だったことになる。真澄は『わがこころ』で季節を改めて紅葉の美しい姨捨山を訪ねて、中秋の名月を見たのである。

そもそもこの姨捨山は、「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（『古今集』雑上、よみ人知らず）にある歌枕で、月と結び付けられて詠まれた。真澄の『わがこころ』の書名も、この歌に由来する。『わがこころ』では『大和物語』第一五六段の全文を引き、この歌が棄老説話の中で語られ、姨捨山の地名起源譚となる話を述べる。そして、この説話にちなんで、祖母石・姪石・小岱石・甥石があるということとを案内者が教えたことも記している。

この姨捨山は有名な歌枕なので、多くの歌人や俳人がこの地を訪れ、その研究も充実している。西沢茂二郎『姥捨山―故実と文学―』（信濃路、一九七三年）は、棄老説話を中心に考察し、末尾に「姨捨山詩歌」をまとめるが、菅江真澄についての言及はない。矢羽勝幸『姨捨山の文学』（信濃毎日新聞社、一九八八年）は、姨捨山をめぐる俳諧を中心にまとめるだけでなく、文学作品を網羅的に集めた。真澄にも目

が行き届いて、「少年菅江真澄の滞在」と「菅江真澄の訪問」の項目を立てた。後者には、「この頃になると姨捨は完全に観光化されていたようだ。それが真澄にはにがにがしかったのである」という指摘も見られる。

## 二 長く軽視されてきた和歌

これまで『わがこころ』の取り上げ方にはずいぶん偏向があったように思われる。現代語訳では、内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記 1』には歌が九首しかなく、信州大教育学部附属長野中学校創立記念事業編集委員会編『菅江真澄の信濃の旅』（信濃教育会出版部、一九九〇年）に至っては歌は一首もない。しかし、『わがこころ』には一六五首もの歌を数えることができる。その中には、往路と復路で詠んだ直堅の歌が五首、末尾の題詠に洞月・永通・義親・直堅・藍水・備勝・静有・景富の各八首、当特の五首、啓基・富女・勝女の各一首が含まれるものの、真澄の歌は、末尾の題詠の五首を含めて、一〇四首に及ぶのである（注し）。やはり真澄の和歌は軽視されたと言わざるをえず、先に述べた柳田国男の言葉が強い影響を与えていることは言うまでもあるまい。

しかし、『わがこころ』という日記を読み解くには、やはりこれらの歌を無視することができない。姨捨山での詠歌と

末尾の題詠については後述するので、ここでは往路と復路の歌に注目してみたい。その際に、『菅江真澄遊覧記 1』は和歌を軽視したと言いつつも、それでも削除しがたかった歌を残していて、その九首は真澄の歌を考える上で示唆を与えてくれる。①から⑨の番号を付けて、それらの歌を追ってみることにする。

真澄は八月一三日、本洗馬を夜明け前に出発した。ある人が「虫も夜明け前は声が弱るのか」などと言うので、

①夜とともにてる月影を霜と見て虫の音なづむ明くらの空と詠んだ。夜になるのと一緒に照る月の光をまるで置く霜ではないかと思て、虫の鳴き声が弱るの、明け方の空よ、くらしいの意味である。虫の鳴き声が弱るの、明け方の月の光を霜とみたからだろうという推察である。これは秋の早朝に発見した観察であった。「ある人」は同行者であろう。

松本の村井を過ぎ、小川に渡した橋を不二橋といったので、この辺りから富士が見えたのだろうか、どうかと思うが、雲が深かったため、

②はしの名のふじこそ見えねくもる日はそこと心をかけて

渡りぬ

と詠んだ。橋の名は不二橋という名だが、雲がかかって富士山は見えない、しかし、曇る日でもあの辺りかと思いを寄せ、

注意しながらその橋を渡った、という意味である。小さな橋だったが、不二橋という名にひかれて詠んだ歌である。

さらに岡田神社を過ぎ、その関屋を越えるというので、

③夜なくの月のうさぎはとゞめえず御世を守りの関のく  
いぬぎ

と詠んだ。「くいぬぎ」は「釘抜、木柵のこと」(柳田国男校訂『わがころ』真澄遊覧記刊行会、一九二九年)とする。夜ごとに出る月には兎がいるというが、その兎は御世の平和を守る関所の木柵で留めることができない、くらしいの意味だろうか。月の兎が関所を通るといふ伝説があるらしいが、はつきりせず、このままでわかりにくい。

刈谷原で雁が鳴いたが、その列が見えないので、

④声斗ほかそこもしらぬはつかりやはらはで霧の中ゆくに行らん  
と詠んだ。鳴き声だけ聞こえて姿が見えないので、どこにいるともわからない初雁は、心も向けないで霧の中を飛んで行くのだろうか、という意味である。地名の刈谷原を詠み込んだ隠し題の歌であるが、秋になって北から初めてやって来た雁と「刈谷原」という地名をつなげた歌になっている。

一四日、麻績おみの里に休んで、女が機を織っているのを見ながら、

⑤しづはたのをりぬふわざのいとなさやこゝにをうみの里

のわざとて

と詠んだ。倭文機を織り縫う動作が忙しいことだ、ここで麻を裂いてより合わせるという麻績の里の技術ということなので、という意味である。「麻績（麻績）の里」という地名と女が機を織る「麻績み」をつなげた歌である。

猿ヶ馬場峠で雨が降り出して泥田のようになり、やつとのこと下つてきて、

⑥更科（級）の月にこゝろのいそがれてさるがうまばもあしとくぞすぐ

と詠んだ。更級の月を見たいと心がせき立てられて、つらい猿ヶ馬場峠でも足早に過ぎてきた、という意味である。その後「たふれ口すさびて」とあるので、実際には大変な旅路だったが、戯れ歌に興じて、こう詠んだのである。

中原で泊まった真澄は、翌一五日、晴れた空を見て喜びながら宿を出ると、桑原という地名だったので、

⑦草枕かりねの露もおなじくははらはで袖に月やどさなんと詠んだ。草を枕にする旅寝なので、置く露に濡れるが、同じことならば、このまま払わないで濡れた袖に月をとどまらせてほしい、という意味である。この歌も「桑原」という地名を詠み込んだ隠し題の歌になっている。

真澄は姨捨山で月見をした後、善光寺に向かうときに、対

馬の国から来た難川清蔵に会った。この人は幼いときに朝鮮に渡つて言葉や学び、通訳の仕事をしていたが、何か失態があつて漂泊することになったと話した。そこで真澄は、「浅茅山の梢が時雨が降つて色づくのも、うえかた山が色濃く染まるのも、有名な竹敷の浦の入り江の紅葉も、私は行つて見たいが、どうか」と言つて、

⑧たかしきの浦の柗葉もみぢはよる波にちらすなゆめとたちや出いでけん

と詠んだ。あなたは、竹敷の浦のみみぢ葉を寄せる波で散らさないでくれ、決してと思つて、対馬を旅だつたのだろうか、という意味である。『菅江真澄遊覧記 1』と内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第一巻』（未来社、一九七一年）の注記では、『万葉集』の対馬に関する歌が踏まえられていることを指摘する。

一九日、真澄は俳諧に志す香風と村井で会い、本洗馬に帰着した。真澄は宣甫の家に泊まった香風が十府の菅・宮城野の萩という仙台の歌枕にちなんだ植物を見せたので、

⑨色深きこと葉の花も折まぜて萩の錦をみやぎのゝ原と詠んだ。このことは後述するが、この歌は、宮城野の原の色深い萩の花を見せられたが、あなたが詠む句の言葉は趣が深く、織つた錦のようにすばらしく見える、という意味であ

る。この当時は姨捨山の月見に行くのは俳諧を嗜む人が多く、その中には紀州田辺から東北を旅してきた香風のような人もいたのである。

これらは『菅江真澄遊覧記 1』が採択した歌に過ぎないが、真澄が旅の行き来で地名や景物、そして、人に出会いながら歌を通してその状況を再認識したことを確認することができる。柳田国男は「即興の敏捷、千首万句口を突いて出る」としたが、確かにそうしたところも見られる。『わがころ』は短期間の旅であり、多くの人と出会っているが、この旅では「唱和の雄」というほどの関係はできていない。それはこの旅の前後を書いた日記『伊那の中路』とはやや違うように思われる。

### 三 真澄の姨捨山での見聞と詠歌

真澄の姨捨山探訪はどのようなものだったのか、これまで必ずしも明確にされては来なかったように思われる。そこで八月一五日の動きをたどってみたい。

真澄がまず少年のときに訪れた観音堂を訪ねたことはすでに述べた。姨捨山は千曲川の岸を麓にしてそびえ、東に有明山の峰、冠着山、西に一重山があり、更級川が細く流れて八幡村に落ち、そこに雲井の橋が架かっている。千曲川の流れ

は言うまでもなくすばらしい。誰が言い始めたともなく田毎の月というが<sup>(注2)</sup>、名月の頃は稲穂が露に濡れてしなつて水を塞いでいるので、月が映ることはない。この後は『大和物語』を引用して、祖母石・姪石・小岱石・甥石に触れ、麓の八幡宮の神事を見に八幡村に下りる。

八幡村では軒ごとに灯火を懸けていた。谷水が落ちかかる下で、丸裸の優婆塞が「垢離を召せ、垢離の代わり垢離の代わり」と両手に小笹を束ね持つて振る。道端に人形を作つてあるのは、昨夜の花火の名残であつた<sup>(注3)</sup>。物貰いの験者が錫杖を振り鈴を鳴らして、「六根清浄」と唱える。「浅間山の爆発の刷り絵を買つてください」と売り歩く者がいる。里の子供たちが「擬宝珠擬宝珠」と柄杓を持つて呼び歩くのは、疣や癬のある人が流れを汲み上げて橋の擬宝珠を洗うためである。「ない餅を買つて下さい」と藁で作つた粽のようなものを持ち歩く者もいた。「鶏を買つてください」と雌鶏雄鶏を抱えて歩く者もいた。人を押し分けて神社に行くと、放生会という額を燈籠で高く掲げ、神主たちが神楽を奉納していた。神社の後方には弥陀八幡があり、目石を撫でて目をこすると眼病が治るといので、神仏よりも尊んだ。この祭礼に多くの人が集まっていたことが知られる。

真澄は近くの家で休んで、再び姨捨山に向かつて上り、月

見をしている。そのときの様子は次のとおりである。

日もやゝかたぶけば姨捨山に、さのぼりてんとて、田づらの細きいぶせきみちを、おほくの人々、おのがいはまほしきことをのみいひとよみ、むれ至りて、御堂にぬかさげて、萩薄かい分て夕露にぬれて、姨石の上ののぼれば、日のくれかゝりたるに、もゝ斗の人居ならび在て、月のいでなんをねんじて待たるに、沢水の音もしづかに、こゝら鳴虫の声あはれるゆふべなれば、人のこゝるもことにすみ渡りて、なにくれと口のうちにずし、けぶりふきいで、あるは、かしらをふせて箕居し、ものかげはさしのぞきて、からうたやあらん、やまどうたやあらん、よき句やいで給ならんと、しのびやかにかたらひ、かくやいかゞ、こはおかし、其ことよりもこのこゝろばへや増らん、あなおもしろなど、あるはあふぎ、あるはひざの上にぬかさしあて、老ならぬ人も、みずわさしてうそぶぎ、みじかきつかの筆をかたにあげてねぶり、又、猫垣のむしろしいて、さゝへ、かれぬこをひらき蓋とれるは、月見んこともわすれて、此うたげにのみこゝろを入れて月のあはれもおもほえず、そむきく、ひさげとらせたるもあやし。此したつかたのたいらかなる岩のつら

に、香くゆらし、男女集て月を待て、なもあみだぶちと、ねんずすり、ひたぶるにとなへつゝ、月を拝みたいまつれることまめやかに聞えたるは、いかに秀たる言の葉にながめたりとも、此男女の、ひたみちに月をおもふころには、えも、をよぶべうも露あらじ。

姨石上には一〇〇人ほどが居並び、漢詩・和歌・俳諧を詠む者もいれば、酒宴を始める者もいた。一方、下の平らかな岩には男女が集まって、ひたすら月を待つ者もいた。この記述からは文学・宴会・信仰に夢中になる三つの集団があつたことがわかる。どんなに秀でた言葉で詠んだとしても、この男女がひたすら月に願う気持ちには、どうにも及ぶはずも少しもないだろうという感慨は文学批判になるが、このことが深められることはなかつた。

やがて宵になると鏡台山から月が出て、千曲川の流れは白銀を敷いたかのように見えたという。真澄は「捨てられ（し脱）は、かゝる山路ぞかしと、いにしへのうきこともさらにおもはで、月になくさむも、になくたのしとおもふに」と、その情景に『大和物語』を思い出し、捨てられた姨のつらさを思いつつも、月で慰められた幸せを思っている。

二時を過ぎる頃に雲で月が隠れたので、真澄は八幡村に下

りて、大勢の人と昼に休んだ家に入って歌を詠む。「つたなうながめたる歌」として、一九首が並ぶ。さらに、『古今集』ではよみ人知らずだったが、『大和物語』では姨を捨てた男が家に帰って詠んだ「我が心」の歌の三一文字を歌の最初に置いた三一首の月を題材にした歌を朝まで詠む。真澄はこれを、「たゞ、めのまへにありつるさまを、おもふにまかせてかいつくれば」と説明する。これらの歌は題詠ではなく、姨捨山で目の前にあったことだとするのである。この詠歌は、後述する『わがころ』末尾の題詠による詠歌と対比されていることになる。そこにこの里の俳諧の法師が筆と紙を持ってきて、「今晚詠んだ句があれば聞かせてください」と言っ

て記し歩いたことも書いている。だが、こうした詠歌のところは、これまで評価されることはなかった。

#### 四 真澄の姨捨山探訪の検証

この姨捨山探訪はどんな状況だったのだろうか。『わがころ』には姨捨山の図絵が入るので、内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第一巻』から引用する。「袁波須氏夜麻 智久万可泊 やはたむらのかた」とあるが、図絵の中に具体的な指示はない。右の姨石に多くの人が乗り、千曲川は左下、八幡村は右下、左上の鏡台山に月が出た様子を描く。『菅江

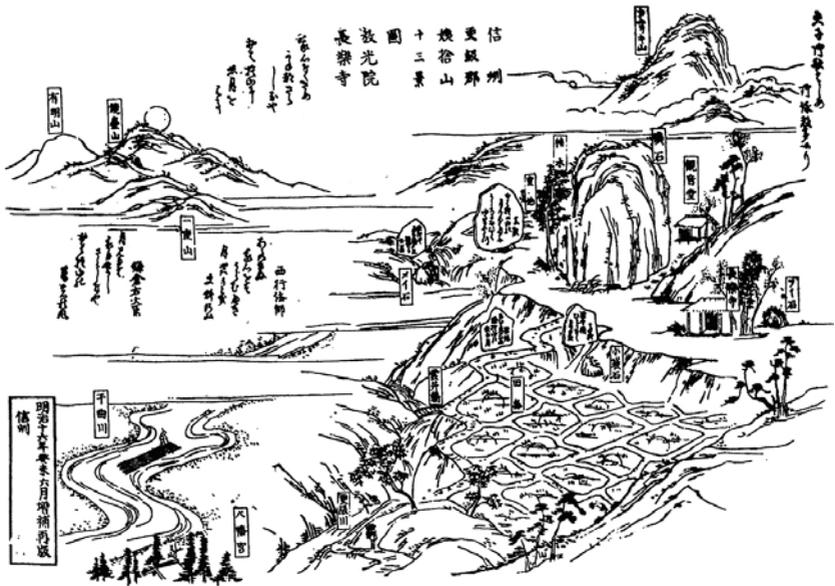
真澄遊覧記 1』の「解説」では、「わがころ」の原本は、文化十三年（一八一六）ごろの清書になる明徳館本であるため、図絵が二枚はいっている。後年の記憶によって描いたらしいとする。姨捨山に行つたときから三三年が経っていた。

さらに『菅江真澄遊覧記 1』には、「そのころ秋田に住んでいた真澄が「木曾路名所図絵」（秋里離島著）をよんで、姨捨山のところの欄外に次のように記入した本が発見されている」とした。そして、「簡単な風景図を墨書きして説明がついている」として、「<sup>甲</sup>鏡台山、<sup>乙</sup>姥捨山、<sup>丙</sup>姥石、此石の上に群集して八月十五日、詩歌連俳の興、例年あり。」<sup>丁</sup>観音堂、<sup>己</sup>八幡村、八幡宮神、八月十四日試染齋夜、はなび、燈籠くらべあり。<sup>戊</sup>筑摩河、古河多し」という言葉を引用する。これは『わがころ』の記述と一致するだけでなく、先の図絵の説明にもなっている。甲から己までの地名は図絵の上部から時計回りにその場所をたどることができる。

真澄の図絵を読み解くには、矢羽勝幸『姨捨山の文学』に収録された何点かの姨捨山の図絵が参考になる。その一点に、天保四年（一八三三）に東都・篤垣真葛が増補再版した「信州更級郡姨捨山十三景図」（文友昇摹の記名）がある。<sup>注4</sup> 矢羽は、この図絵は白翁を白翁と誤記し、月見堂が描かれていないと批判する。矢羽が参考に引いたのは明治

一六年（一八八三）の信州での模刻で、「図は一見真葛再版と同版を思わせるが、半ば透き写しの模写したもので細かい部分を点検すると、別人の筆をもって新たに版を起したことがわかる。左上、鏡山の隣に有明山をかき加え、右端にも「天子御歌はじめ御詠数多あり」と追記している」と指摘する。ここには、これを引用する。

この図絵を左上から時計回りにたどると、「有明山」「鏡台山」「カムリキ山（冠着山）」「桂木」「室池」「メイ石（姪石）」「姨石」「観音堂」「長樂寺」「ヲイ石（甥石）」「小袋石」「田毎」「雲井橋」「更級川」「八幡宮」「千曲川」と書かれている。こ



これらの場所は『わがこころ』の図絵とも対応し、「木曾路名所図絵」の風景図に書かれた言葉よりさらに詳しい。矢羽の批判はあるが、『わがこころ』の記述と図絵を読み解くのに、この図絵は大いに参考になり、これで真澄の言動を十分に検証することができる。

## 五 紀州田辺の香風と『笠やどり』

真澄はその足で、八月一六日に善光寺に参詣する。「まうづる人多く、にぎはへるさまは、昔見しにことかはらず」とあるので、以前善光寺に参詣したことがあったと知られる。おそらく少年のときに姨捨山の観音堂に二晩籠もったとき、その足で善光寺に参詣したのではなからうか。ここでは「ぜむかうじ」という五文字を各句の最初に置いた、「せきあへずむせぶなみだにかきくれぬうき身のつみをしれる心に」と詠んだ。いわゆる折句の歌である。真澄は伝統的な歌枕ではない地名は隠し題にして詠むが、これもそうした系列に属する歌である。

帰途、松本の浅間温泉に泊まった翌一九日、村井の芝生に休んでいると、紀州牟婁郡田辺の里の訓股という人に再会する。この人とは姨捨山で一夜語らって知り合いになっていた。この訓股は香風という俳号を持ち、俳諧に志が深く、そのた

めに今回の中秋の名月に来て、姨捨山で「捨らればかゝる野山やけふの月」という句を詠んだ。この人は田辺の里の長で、連歌師の宗祇の句にちなんて庵を作つて暮らしていた。本洗馬に来て、香風は宣甫の家、真澄は可児永通の家に着いた。訓股は「香風は俳号。坎水園随筆に其句があつて「南紀宗祇庵」とある」、宣甫は「本洗馬の俳人らしいが不詳」とある（「真澄遊覧記信濃の部 地名と人名 校訂本附録」（編纂責任者 胡沢汎） 柳田国男校訂『伊那の中路 わがこころ』真澄遊覧記刊行会、一九二九年）。

その後、宣甫の家に集まり、香風が故郷への土産に持ってきた十府の菅・宮城野の萩などを取り出して見せた。十府の菅・宮城野の萩はともに仙台の歌枕にちなんだ植物である。香風が芭蕉を意識していたのかどうかはわからないが（注）、おそらく紀州田辺から江戸経由で仙台に行き、日本海側へ出て信州を通つて帰る長旅をしていたらしい。真澄が神宮寺から善光寺に向かう途中で話をした雛川清蔵については前述したが、善光寺西街道の往来にはこうした旅の文化人たちがいたのである。

なお、香風については、松山修「『わがこころ』再読：月見行の同行者」（『かなせのさと』第八一号、二〇〇七年一〇月）に考証がある。香風は玉置香風で、天明三年二月から九

月まで奥州へ向けて旅をして、それが『笠やどり』として板行されたことをあげ、可臨が宣甫の俳号であり、「三州の歌人」が真澄であることを指摘したのは重要であった。『笠やどり』には「捨られかかる山辺ぞけふの月」の句を姨石の上で詠んだことを記している。『わがこころ』の「野山や」が初案であろう。

二〇日は香風と別れる日で、真澄は離別の歌を詠んだ。「その夜、姨捨山によみたりける歌の冊子にものかいてと人のいへば、いなびがたくて」とある。ここは『菅江真澄遊覧記1』では省略され、信州大学教育学部附属長野中学校創立記念事業編集委員会編『菅江真澄の信濃の旅』では、「その夜、姨捨山で詠んだ歌の冊子の奥に文章を書いて整理した」とする。しかし、「人のいへば、いなびがたくて」という、誰かの慇懃に応じて次の文章を書いたことがやはり省略されている。この「人」は可児永通の家であれば永通である可能性があるが、真澄が戻ったことを知ってやって来た本洗馬の人である可能性もある。どちらにしても、この「人」は真澄と一緒に姨捨山に行かなかった人であることは間違いない。

この「歌の冊子」は、やがて『わがこころ』にまとまる草稿だった可能性が高く、『伊那の中路』から切り離される契機もここにあったと考えられる。これを「整理」と呼ぶなら、

それは、「ひさかたの」で始まる文章と姨捨山の名月を詠んだ六二首の詠歌の二つからなる。ここでは「ひさかたの」で始まる文章について考える。

これは五音と七音を意識したりズムのある文章で、例えば、「そめわたる木々の葉月、もちのこよひを、手を折くくの空にむかひ、水の面にてる月なみをかぞへて」は、一面に紅葉した葉ではないが、八月の、十五日の今夜を、指を折りつつ、折々の空に向かい、水面に照る月ではないが、月齢を数えてという意味で、掛詞を駆使した美文になっている。そのようにして、天明三年の八月一五日の中秋の名月に姨捨山を訪ねた感慨をまとめている。

続く「おもふかぎりうちむれて、旅衣おもひたちぬるに」は、真澄一行が向かったことをいうのではなく、多くの人がこの日に合わせ、連れ立って月見に出発したことをいうのだろう。真澄は地元信濃の国にいて、「いざいきねと人のさそふにうれしう」とあり、さあ行こうと人が誘うのがうれしくてというので、誰かに誘われて行っただけになる。「人」として考えられるのは、後述するように、熊谷直堅だった可能性が高い。

真澄は姨捨山に登って、厳めしい岩（姨石を指す）の上にある苔の筵に座って見ると、見もしらぬ高嶺（鏡台山を指

す)の辺りに差しし、のぼり、麓を流れる水(千曲川を指す)が白銀を流したように見えた。「なぐさめかねし男のこゝろまでもおもひ出られて、猶いにしへの人にもいふこゝちすれば」は、『大和物語』を思い浮かべたことをいう。人々が歌を詠むと、「われも、かたくななるひとくさをとてしるしぬ」というのは、先に触れたように、実際には八幡村に下つてからの一九首と「我が心」の歌の三十一文字を歌の最初に置いた三十一首を指すのだろう。そして、月に照らされて澄んだ心になり、言葉の道の惑いもなくなつたのは、この名月の真意であろうと結ぶ。

続く六二首の詠歌については次節で述べる。

## 六 姨捨山への同行者と末尾の詠歌

『わがこころ』は別巻立てにした日記であるが、その内容上問題になるのは姨捨山への同行者と末尾の詠歌の関係である。これには諸説があるので、まず検討しておく。

- ① 十三日姨捨山観月行。同伴者直堅。其他不詳。会田一泊。十四日中原一泊。十五日八幡の放生会。観月の後八幡村一泊。十六日善光寺詣、途上対馬の人といふ籬川千歳に逢ふ。善光寺附近に一泊。十七日同じ道を引返して稲荷

山に医師古了を訪ひ、青柳一泊。十八日浅間の湯守小口治庵に宿泊。十九日永通の家に帰る。村井から南紀宗祇庵香風と路づれとなり、香風は宣甫といふ人の家に入る。翌朝之を送る。(胡桃沢勘内「信濃路までの白井秀雄」柳田国男校訂『わがこゝろ』)

- ② 八月十五日の月を有名な更科郡八幡村(更埴市)の姨捨山上で眺めようと、風流な同好者がさそいあわせて、天明三年の八月十三日、本洗馬村を出発した。そして帰途は善光寺に参詣して、浅間温泉にひたり、同八月二十日にまた可児家にもどってくるまでの一週日(一週)の日記を、「伊那の中路」から別冊として、これを「わがこころ」と題した。このときの同行者は、白井秀雄をくわえて次の十三名だったようである。この本の最後にこれらの人たちのよんだ歌が列記されている。

洞月、永通、啓基、富女、義親、直堅、藍水、備勝、勝女、当特、静有、景富、秀雄。(内田武志「解説」内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記 1』)

- ③ 天明三年八月の名月を、更科郡八幡村(更埴市)の姨捨山で眺めようと、風流な同好者数名が誘いあつて、可

児永通家を八月一三日に出立し、一九日に帰着したまでの日記。《いなのかなみち》のなかから、この一週間の部分だけを抜いて別冊としたのである。巻末に掲出された一三名の詠草は、このとき同行した者と限ったものではなく、戻つてからのち、洞月を中心とした歌会の席で詠んだ歌をまとめたのであろう。(内田武志「解題」内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第一巻』)

④ 真澄は、姨捨で天明3年8月の名月を眺めようと、洗馬の人数名と誘い合つて可児永通の家を8月13日出発し、19日に戻りました。12名とは洞月・永通など本洗馬の人が大部分で、当特・景富も含まれています。しかし、このうち何人が姨捨へ同行したかは不明で、洗馬へ戻つてから、洞月を中心にした歌会の書式で書かれていますから、洗馬で歌だけ詠んだ人が半数以上いたはず değildir。よく、真澄は12人の村人と連れ立って姨捨へ行つたとか、村人全員で行つたとか言われていますが、誤りです。(信州大学教育学部附属長野中学校創立記念事業編集委員会編『菅江真澄の信濃の旅』。人物についての説明は省略)

⑤ その真澄の歌に、四首の直堅(ナカミ)の歌が添えられていて、

その他の人の歌は皆無である。このことから考えると、うた人で真澄の月見行に同行した人物は、直堅だけだったのではないかと考えることができる。(松山修「《わがこころ》再読：月見行の同行者」)

問題の一つは、『伊那の中路』に「おもふどち、いざなひて行てんとて」とあり、『わがこころ』に「この秋、更級や姨捨山の月見てんと、おもふどちうちものがたらひて」とあり、この「おもふどち」が誰かということになる。「おもふどち」は「気の合った同士。仲のよい友だち同士」の意味である。『わがこころ』の書き方は微妙で、「この秋、更級や姨捨山の月見てん」は「この秋」とあるので、直前ではなく、秋になる前、おそらく夏にこうした会話が あつたのではないかと。かなり前から「おもふどち」とこう話していたにちがいない。

①は「同伴者直堅。其他不詳」とした。②は「同行者は、白井秀雄をくわえて次の十三名だったようである」としたが、③では「数名が誘いあつて」、「同行した者と限ったものではなく」と曖昧になった。④は「洗馬の人数名と誘い合つて」、「洗馬で歌だけ詠んだ人が半数以上いたはずです」とした。だが、⑤では同行者は直堅だけだったという説である。確かに、『わ

がこころ』の往復に名前が見えるのは熊谷直堅しかいない。ただし、先の『笠やどり』の八月一九日に「姨捨にてわかれし本洗馬村可臨子、歌よみける二人とともに出合」とあり、真澄と直堅は「歌よみける二人」であるが、俳人の可臨も同行していたことになる。しかし、和歌を重んじた『わがこころ』では可臨(宣甫)の姿は見えなかったことになる。

もう一つの問題は『わがこころ』末尾の二三人による六二首の詠歌はいつ詠まれたのかということである。①は記載がなく、②は姨捨山での詠歌と見たようだが、③は「戻つてからのち、洞月を中心とした歌会の席で詠んだ歌」と改めた。④は「洞月を中心にした歌会の書式で書かれていますから、洗馬で歌だけ詠んだ人が半数以上いたはずです」とし、姨捨山と洗馬で詠んだ歌を合わせたと見たらしい。⑤は場を特定していないが、「兼題」「探題」による「歌会」を挙げるので、「歌会」を念頭に考えているようである。

だが、『伊那の中路』にも『わがこころ』にも、歌会が催されたという記述を見つけないことができる。実は、この一三人に入っていないが、同じように歌を詠んだことが三溝政員の残した「政員の日記」(柳田国男校訂『伊那の中路わがこころ』)から知られる。「卯のとし葉月更級へをさめたいまつるとてよみ侍れどその数には加へず」「白井うしのな

をし」として、「十四夜」「山月明」「月出山」「月前風」「月前恋」「寄月祝」「虫」「十五夜の月くもりければ」「同」「十六夜」の歌題で各一首が並ぶ。これらはこのときの詠歌だったが、採用されなかったのである。

『わがこころ』は、最初の歌群は歌題がないが、詠まれた歌からみると「姨捨月」のような歌題であると思われる、その後「月出山」「山月明」「月前風」「月前恋」「寄月祝」が続く。これらの歌題が政員の歌題と共通するのは、両者が別の機会に詠まれたとは考えにくいことを示す。想像をたくましくすることになるが、歌会が催されたのではなく、真澄が一二人に更級の姨捨山に奉納することを前提に歌題を示して求め、集まった歌をこのように整えて奉納したのではなからうか。『わがこころ』に奉納の記述はないが、真澄が訪れた観音堂・八幡宮・神宮寺のどこかであろう。このとき政員も懸命に歌を詠み、師匠の真澄が添削したが、まだ修業中であったためか、採用されなかった。「その数には加へず」というのは、奉納の詠歌に採用されなかったことを意味するにちがいない。

注

1 『菅江真澄和歌 全歌編(第一版)』(秋田県立博物館菅江真澄資料

センター、二〇〇四年）は九七首を数える。直堅の五首を除いたのはよいとしても、往路の「わけゆかん」の一首と末尾の題詠にある秀雄の六首が見落とされている。

2 矢羽勝幸『姨捨山の文学』では、延宝九年（一六八一）の池西言水『東日記』が「田毎の月」を詠んだ俳諧の初見であるというので、新しい俳枕だったことになる。和歌に親しんだ真澄が田毎の月に違和感があったのは、そうしたことに由来するのではないか。

3 「路のかたはらにかたしる作たるは」とあるが、この「かたしる」は、『真澄遊覧記信濃の部 地名と人名 校訂本附録』の「神宮寺」に、「八月十四日の八幡の花火には、昔は此別当と神主とで鳥居を入つた所に、富士の山形と高砂の爺婆の人形を両側に飾つた」とあるのと関係があるかもしれない。

4 矢羽勝幸『姨捨山の文学』には、「真葛の増補したのは碑文のみで、初版の碑面には何も記されていない」とあるが、初版は未見。真澄も単なる「記憶」ではなく、『わがこころ』の図絵の正確さを見ると、こうした図絵を見ていた可能性があるのではないか。

5 芭蕉の『おくのほそ道』には、「宮城野の萩」も「十府の菅菰」も見える。



# 真澄さんから学ぶアイヌの文化

『蝦夷喧辞辯』にみる「理氏武者」考

北海道大学客員教授 佐々木 利 和

いうまでもないことだが『蝦夷喧辞辯』(註)は寛政元(一七八九)年四月二〇日福山(松前)を発ち、太田につく。そして帰路江差を経て六月三〇日に福山に帰るまでの日記である。

この日記中にはアイヌ文化にかかる記述が多々ある。真澄さんのアイヌ文化記述については先学のさまざまな論考がある。いつてみれば、いまさらそれに付け加える何ほどのものもないのであるが、やはり気になる部分も少なくない。ここでは内田武志氏以外の先学の論考に斟酌することなく、真澄さんの見られたアイヌ文化を学んでみようと思う。

## 一 理氏武者

この日記のはじめ、四月一九日「…れいの人々のまどぬにけふもくれて、夜ひとよかたらひ、とりの鳴つるころ、わかれの蓋とりめぐらすをりしも、つぶね、かどのとよりしはぶき来て、文子のおほんもとよりこれまゐりたりとて…」と文子の御方より「かげさらすおもふこゝろのそふぞともしらで

山路をひとりわくらん」との和歌が贈られた。返歌を詠みながら、三月の初めにやはり文子の御方より「遠つ蝦夷人のつとにもてわたりたりし理氏武者てふかだまやうのものを贈せ給ふにそへて」つぎの和歌が贈られる。

きみにけふいざ贈りてむ。木々の枝の花こき入る籠にもなれやと

真澄さんは返して

こぎ入てとく帰りてん。きみがため見ぬ山くまの花のさか

りを

と詠んだ。

どちらも理氏武者を「りてむき」「りてんき」として詠み込んでおり、そして真澄さんによる理氏武者の図が添えられている。このリテンキ(本稿ではこの語を用いる)は「木々の枝の花こき入る籠にもなれや」との歌意にそうような編み籠の形態を真澄さんは写している。

真澄さんの描いた図(図1-3)をよくみると、リテンキは底部、胴回り、口縁部と三様の異なった編み方をしており、

とくに、開口部はしぼって閉じるための赤い括り紐（口紐または提げ緒）を用いている。括り紐は口縁部近くでまとめられ、緒締めであろうか、蜜柑珠（ミカンの皮を剥いた形をした練り珠）があり、紐の端近くには青珠など数個の小珠が付けられている。その小珠の様子から考えてみるにこの括り紐はそんなに太いものではあるまい。となると、このリテンキなるものもそれほど大きいものではなさそうである。かかる編み籠の類にここまで珠を使っている例はほとんど知らない。

真澄さんが「理氏武者てふかだまやうのもの」と記した理由であるが、内田氏は「リテムギという籠のようなもの」とこの部分を訳していられる（註2）。「かだまやうのもの」は「堅間ようなもの」であり、堅間はかたまであり、目を細かく編んだ（ないしは目無しの）籠のことである。内田氏は単純に「籠」とされた。リテンキが堅間ようなものであるのは、真澄さんの胸部の編み方の細かい描写によって知ることができ  
る。

文子の御方のおっしゃられた「遠つ蝦夷人のつとにもてわたりたりし」とあるのを、内田氏は「遠い蝦夷人がみやげにもつてきた渡来物」と読む。この場合、「つと」は「苞」でみやげものこと。ではこれを齎した「遠つ蝦夷人」、すなわち遠いところに住んでいるアイヌの人びとはだれかとい

う問題になる。そこでもう一度真澄さんの図を見てほしい。括り紐（提げ緒）に蜜柑珠や青珠などが使われている。この珠類である。種類（赤、青、白の小珠）、大きさからみておそらくは山靱渡りの珠（樺太珠とも）であろう（緒締めの蜜柑玉はこれがおそらく最も古い描写であろう）。大陸のアムール川河口付近に住む山靱人から樺太アイヌがそれを得、そして樺太アイヌ（あるいはソウヤアイヌ）が編んだリテンキに用いた。ついでに言えば、恐らく木綿と思われる赤い括り紐（提げ緒）自体も大陸から齎されたものと考えていい。

文子の御方の「遠つ蝦夷人」は、遠くの地に住むアイヌと  
いうことだから、西蝦夷でも東蝦夷でも遠く離れた地域に住むアイヌの人びとの事をさしている。となると、ソウヤヤカラフト、東ではネムロやクナシリ、エトロフまた北千島ということなるうか。北千島アイヌの可能性もないではないが、ここでは樺太アイヌないしはソウヤアイヌに比定したいところである。

樺太アイヌからリテンキを手に入れたソウヤアイヌ（あるいはソウヤアイヌの作）によって福山に齎されたとみるのが妥当かもしれない。というのは、一八世紀の後半ころ、ソウヤのおさチヨウケンが福山にウイマムにきており、その時の絵が遺されていることから推定される（図4、チヨウケン

の画像はいくつか伝存する。何れも長く白いヒゲで描かれる。ウイマムとは、アイヌの人々が隣接する諸邦の首長と行う交易の一形態のことである。蝦夷錦（山靱錦、さむだんにしき）を身に着けたチヨウケンは白髻翁として知られ、その長い鬚の幾筋かを松前侯にも献上したという。その傍らの女性が持つ手籠様のもの（リテンキかも？）の中には山靱珠がいつぱいにはいつている。山靱珠は貴重な交易品でもあった。

このリテンキをチヨウケンが齎したかどうかはおくも、ソウヤアイヌが深くかかわっていたとみていいであろう。リテンキを作る素材の美しさ、そしてウイマムの苞として齎された山靱珠を用いた編み籠を、文子の御方の手元に松前侯からくだされたものであろう。それが真澄さんに下賜された。図は下賜されたリテンキをそのままうつしたものであろうし、リテンキという名称自体、文子の御方が使われた名称であることは、その和歌からも容易に理解される。

リテンキの作り方について真澄さんは『しのはぐさ』<sup>〔註3〕</sup>で「此草へ牟呂知具佐　むろちぐさ」の夏刈をもて、奥蝦夷人の婦人（メノコ）ども、かだまのやうなるものを、くさくさのあやをなして編（アミ）なせり、その名を、それらが詞に理弓牟宜（リテンギ）といふ、松前にては是を蝦夷小出（エ

ゾコダス）といふ」とし、そしてムロチについては『えみしのさえき』<sup>〔註4〕</sup>の水屋付近で「室茅へムロチ」（はまにんにく）といふ草もてこまがた作り」と記しているが、ここではムロチを素材としたリテンキにはふれてはいない。ついで『かたみ袋』<sup>〔註5〕</sup>で「ひんかしにあたりたる、あひの、主人（ユトナ）、夏の比、リテンギともたゝテギともいふものを／あみける草にて、笠つくりてかふれとも、かりてのをハなかりけり、かゝることすれハとて／めのこし、ウタレハ笠きさりけり…」（／は改行、以下同じ）とも書く。内田氏は『松前と菅江真澄』真澄採録のアイヌ語「中で「リテンギ　あみ笠」<sup>〔註6〕</sup>としてい

ところで、リテンキである。はじめて、『蝦夷喧辞辯』を手にとった時の違和感とその語であった。「遠つ蝦夷」つまり千島アイヌや樺太アイヌの人びとが作る編み籠は「リテンキ」の名で伝えられており、「リテンキ」なる名称をもつものは現在に伝世していなかった。ために私自身、つまりは真澄さんの聞き違いかな、という思いがあったのである。

しかし寛政九（一七九七）年に栗本丹州（瑞見）が写した国会図書館本『蝦夷草木図説』（小林豊章画、瑞見本）の「ムリ」という草の項に、小林豊章がカラフト島リシュンナイ（クシュンナイの誤か）で写したムリ草の図に添えて、丹州自身の註

記があり、それによるとムリという植物は漢名で篩草しそ草、和名をコウボウ麦というもので「此物初生極テ堅銳／錐頭ノ如シ、跣足ニシテ是ヲ踏ハ足ヲ傷ル、其葉／長シテ後柔韌ニシテ、席ヲ織リ、又、袋ニ造ル、夷語／リテンギト云ルヨシ」とあり、これで造った袋をアイヌ語で「リテンギ」というのであると(註7)。小林豊章は寛政四年に最上徳内らと実際にカラフトに赴き、植物の写生を行っている。

とはいうもののこの註記は丹州のものであって、たとえば豊章の初稿本とされている内閣文庫本『蝦夷草木譜』では「ヘイエキナ／カラフト島西ノ方リシユンナイニテ写／此草ヲ製シ懷中物等入ル袋ニ織リ、或ハフコ／ビクノ類ニ拵ル也」とある。植物名をムリではなくヘイエキナという名称を使っているが図はほぼ同一である。またやはり豊章の自筆とされる函館市中央図書館本の『蝦夷地草木写生図』では同一の図に「ムリ／カラフト島クシユンナイ」と名称と地名を記すだけである。ここでのリテンギは小林豊章自身のことよりも栗本丹州がつけた名称であったろうか。

さらに荒山千恵氏によると木村兼葭堂もリテンギの名称を使っているという(註8)。

そして後述する知里真志保氏の指摘された *tenki* *trien-* *tri* や わらかい・稗ヒ から考えてテンキはリテンギに由来する

という説が大きな存在となる。文字の御方の「りてむき」はこの *trien-tri* や わらかい・稗ヒ の意であり、それが編み籠の名称として伝えられたものであったろう。

## 二 テンキ

ではテンキとはなにか。まずアイヌ語の辞書からみてみよう。

J・バチラーの『アイヌ・英・和辞典』では「Tenki テンキ、籠（藁製ノ）. n.A kind of woven basket made of the leaves of *Elimus mollis*」とある。さらに「Muri ムリ、ハマニク、テンキグサ、*Elimus mollis* Trin. Muri grows on sandy beaches and was formerly used in making bags,hats,and baskets」と記す。『アイヌ・英・和辞典』第四版、岩波書店、一九八一）

知里真志保氏の『分類アイヌ語辞典・植物篇』によると「テンキグサ ハマニクニク *Elimus mollis* Trin.」の項に *muri(mu-rit)* 茎葉（幌別）、*morochi-kina(mo-ro-ci-ki-na)* 茎葉（えとろふ）などのアイヌ語をあげて、その上で「参考」として以下のように記している。「茎を乾燥してへてンキン *tenki* と称する糸や針などを入れる小型の容器を編んだ（幌別、えとろふ）。テンキグサとゆう名称わテンキを編む草の

義であろう」といい、そして「但し、テンキなる語わ、i「手筈」などとゆうような日本語があつてそれがアイヌ語にとりいれたか、ii或いわそれが固有語だとすればこの草をもテンキと云い、それで編んだ容器だからテンキと云つたのである。ten-kvrien-ki「やわらかい・稗一か。これで笠も作つたらしい(真澄遊覧記)」と指摘する。(『分類アイヌ語辞典』植物篇、『知里真志保氏著作集 別巻I、平凡社、一九七六』)

また久保寺逸彦氏の『アイヌ語・日本語辞典稿』によれば、「tenki n 草籠 テンキ草を乾燥して編む、糸、針などの小物入れ(網走)」とある。文中、nとあるのは名詞の意。網走で採録した語である。久保寺氏はテンキ草を乾燥して編んだ草籠であるという。(『アイヌ語・日本語辞典稿』、『久保寺逸彦著作集』4、草風館、二〇二〇)

さらにテンキを『言海』でみると「蝦夷語ナラム」とした上で、「北海道ニ産スル一種ノ草ノ名、茎極メテ細ク麗ハシ、夾袋(カミイシ)、提籠ナド編ミ作ル」とする。

ここでいう「tenki テンキ」はともにアイヌ語とする。つまり、日本語のテンキグサで編んだ籠をアイヌ語でテンキといい、テンキグサはアイヌ語ではムリツとかモロチキナというのである。また河野広道氏は「テンキ草(ハマムギ)

その他の野草を以て手提げを編んだ……」(『東亜民族要誌資料』第二輯、一九四四、帝国学士院)という。

前出の『蝦夷地草木写生図』などの植物名や図の比較検討をおこなった林・水島氏らはムリについて以下のように述べている(註<sup>6</sup>)。

「ムリ」(テンキグサ、クシユンナイ)は、樺太アイヌ名であると考えられる。しかし、宮部らの調査によれば、樺太アイヌ名は「ライムン」、「タベンベ」であるのに対し、北海道アイヌ名は「ムリ」との記載があり(宮部・三宅 一九一五[585])、矛盾しているのは興味深い。宮部の調査が独自に行われ、豊章の成果に影響されずにいることがわかる。「土人(北海道アイヌ)之ヲ以テ蓆ヲ製ス樺太及千島「アイヌ」は袋、帽子、畚、魚、其他器具ヲ編製ス甚タ強シ」とある。(宮部・三宅 一九〇七[67])。

ところでテンキに図を添えて紹介した早い例は松前広長の『松前志』(天明元(一七八一)年序)であろう(註<sup>10</sup>)。それには「テンキノ方俗コレヨコタスト云、テンキハ夷方ノ詞ナリノ是、尋常ノ雑物ニアラス、水草ニテ編タルモノナリ、兵糧ヲ入ヘキ器ナリ、是亦、北韃ノ産ナリ、図左ノゴトシノテンキ(図あり)ノ或云、夷人ノムルチト云ヘル草ハ此

物ヲ制スルモノナリトソ、未詳」とみえる。ここで、ムルチという草で編んだテンキは日本語の方言では「コダス」といい、テンキとはアイヌ語であると。コダスは小出し。

ついで秦檍磨の『蝦夷島奇観』には「テンキ図 モロチにて編たり、大小種々あり、エトロロー島シコタン島の二島に出る、女夷の作る処なり、美工密製、愛玩すへし」(図5)。またモロチについては、「モロチキナ写生／此草、蝦夷地砂浜何処／にも産せり、奥地に至に／したかひ、能生せり、シコタン／島、エトロロー島勝れて長し、／新苗を刈捨、夫より生出たる／葉を中秋に刈り、テンキと／いふ編袋に製せり」という(註1)。松前広長のいうムルチ、秦檍磨のいうモロチ、またモロチキナは同一の語であることは前記の知里辞典の例からも理解されよう。そして秦檍磨が指摘する「美工密製、愛玩すへし」とあるように、美しく細工が密であり、愛玩すべきものがテンキであろう。

つぎに谷文晁の朱印が押捺されている『蝦夷器物屋宇図』のテンキ部である(註2)。文晁、谷元旦に関わるテンキの図をあげておいた(図6〜8)が、すべて編み袋で真澄さんのリテンキの図と共通するところが少なくない。初期に描かれたテンキ図の中では、『蝦夷島奇観』の図がもつとも細かくよく描写されている。

またテンキについては真澄さんも前述の『かたぬ袋』で「ある人あひのゝ糸針いろいろのもの入るテキといひてムルチといふ草にてあミたる帛(ふくろ)のときもいたしてくれぬ、こはカラフト嶋よりいたせるうつハにて、しやもハ是をムルコダスといふものなり」としてムルチという草で編むテキ(テンキ)の存在を記している。また「しやもハ是をムルコダスといふ」とあるのはムルチのコダスということなのか。『しのはぐさ』では「松前にては是を蝦夷小出(エゾコダス)といふ」とある蝦夷小出(註3)と同じものを指していることは疑いなからう。

さらに付記すれば、テンキではないがアイヌの編み物の席(むしろ)について松浦武四郎は『蝦夷訓蒙図彙』(巻の二)のなかで「席 キナ 土人の家皆越是をしけり／キナとは草の惣名なるを、いつの頃よりか席ものをしてキナと惣称する事、如何なる事か、扱、土人此キナを織るに、菰カンナルシ、蒲シイキナ、菁茅ウムサキナ、蓆草(てんきくさ)ムリ、水葱(かや)カトギ、磚子苗(くぐ、はますげ)ク、蔗(まこも)、其余も処々にて有れども、其大略かくのごとし」(秋葉実編『松浦武四郎選集』二、北海道出版企画センター、一九九七による)と記し、蓆草(しそう)を、てんきくさと読ませ、ムリのアイヌ語を当てている。なお、蓆草は『大漢

和辞典』によれば「かうぼうむぎ、はまむぎ。自然穀、禹餘糧」であると。

編み籠としてのテンキについては藪中剛司氏<sup>(註14)</sup>や小杉康氏<sup>(註15)</sup>、斎藤和範氏<sup>(註16)</sup>、荒山千恵氏<sup>(註17)</sup>らの詳細な論考があり、多くはそちらに譲ることとして、伝世するテンキについて簡単に紹介しておきたい。

藪中氏は伝世するテンキを二種に分かつ。一は袋状のもの、今一は容器状のものである<sup>(註18)</sup>。

袋状のものは真澄さんの描いたものの類で、ここでは藪中氏が作図された市立函館博物館の資料(開拓使が占守島で採集したもの。最大高13・8cm、□縁部径15・0cm。黒い部分は鯨のヒゲを使用)を例示させていただいた(図9)。容器状のものは蓋つきに編み上げ技法による美しい工芸品である。このほかには笠とか帽子などのように服飾品として作られたものがある。多くは千島アイヌの手になる優品である。主なものを図版で示した(図10〜15)。

### 結びにかえて

真澄さんのいわれる理氏武者、そしてテギについてみてきた。

『かたぬ袋』で「ひんかしにあたりたる、あひのゝ主人(ヲトナ)、夏の比、リテンギともたゝテギともいふものをあミける草にて、笠つくりてかふれ」と笠について語っているが、その笠については図14で示している。この笠は、ウイーン万国博覧会の参加のため設置された博覧会事務局から内務省博物館(現東京国立博物館)に明治八年に移管されたものである<sup>(註18)</sup>。北海道アイヌが作ったものとされてはいるが、しかし名称やどこで採集したかに関する明確な資料というものは伴っていない<sup>(註19)</sup>。が、真澄さんがリテンキやテンキを編む草で笠を作ったと記す、その笠である。内田氏がいわれるリテンキという編み笠がかかる状態のものであったことをうらづける資料である。管見の限りではあるが、テンキ草製の笠はこの一例だけである。

さて理氏武者と理豆牟宜である。真澄さんはどちらもリテンギと読む。着はキ、ギいずれも読めるが宜はギだけである。真澄さんは名称をリテンギと称した。アイヌ語ではガ行音とカ行音が音韻が共通であるからどちらでも構わない。だが真澄さんのアイヌ語は濁音表記が多いようである。アイヌ語の漢字表記を含めて真澄さんの表記法をきちんと学んでおく必要があろう。

真澄さんは『しのはぐさ』の「牟呂知具佐」の項の最後に

おのれ松前に在りつるとき、文子（アヤコ）の御方より理弓牟直を、春のころ西磯ノ江差に行事あるをりしも給はりける、そのものにそへて

飯（かえ）るさは花こき入れよ贈りてむきみか旅行春のやまふみ

とありしかば、その御使にたぐへて

飯るさは花こき入れておくりてむきみが籠ある花のかだまに

と返し聞え奉りたりしも、はたとせを過ぬ、はや文子のおほんかたも、とし老てかくれ給ひたるよし。

と書いている。文子の御方との和歌にいつ手を入れたのであるうか。

文子の御方の和歌

きみにけふいざ贈りてむ木々の枝の花こき入る籠にもなれやと

を

飯るさは花こき入れよ贈りてむきみか旅行春のやまふみと詠み直し、そして真澄さんの返歌

こぎ入てとく帰りてんきみがため見ぬ山くまの花のさか

をり

飯るさは花こき入れておくりてむきみが籠ある花のかだまに

と、詠み直している。いずれにもりてむき、りてんきが詠み

込まれている。どちらが和歌として優れているかなどはいうまい。しかし二首のうちどちらに共感するかという視点を問われると、第一首の方がいいなと素人目には思う。

真澄さんの記されたアイヌ文化の一端について学んできた。いまさういう必要もないのであるが、真澄さんはアイヌ文化を見たままにとらえているようにみえるが、深い洞察力と他州の文化を知っているその知識に裏付けられた記録である。

真澄さんから学ぶことはまだまだたくさんありますね。

本稿執筆にあたって秋田県立博物館角崎大氏には大変お世話になりました。また、資料の閲覧に際し、北海道立近代美術館の田村允英氏、道立三岸好太郎美術館の五十嵐聡美氏にお世話になりました。感謝申し上げます。

註

- 1 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第二巻、一九七一、未来社。  
以下、『蝦夷喧辞辯』の引用はすべて本書による。
- 2 内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記』2、一九六六、東洋文庫六八、平凡社。以下、現代語訳の引用は本書による。
- 3 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第一〇巻、一九七四、未来社。以下、『しのはぐさ』の引用はすべて本書による。
- 4 『蝦夷喧辞辯』は上下巻に分かれており、上巻の題簽に「蝦夷喧辞辯」、下巻の題簽に「えみしのさへき」とある。当該部分が下巻に記述された内容であることを表す。
- 5 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第一〇巻、一九七四、未来社。以下、『かたぬ袋』の引用はすべて本書による。
- 6 内田武志『松前と菅江真澄』、昭和二四年、北方書院。
- 7 このような記述は土岐新甫『東蝦夷物産誌』（北大、北方資料データベースによる）に、  
「ムリ 瀬海砂地者極て多し、津軽、松前又ムリ／と呼ぶ。葉長数尺、蒜葉に似て強韌、白粉ヲ帯／莖ヲ抽て実を結ぶ、状、麦穂の如し、野麦ならん／夏秋刈て晒、乾し、編て席となす、又、呼てキナ／となす、又、カラフト、エトロフ、クナシリ等にて此草葉を以／アミテ、テンキト云物を作る、其製は精巧にして雅／也、アツケシ／にても造る、其製麁なり」  
とある（／は改行、句読点は引用者）。ここではテンキといい、カラフト、エトロフ、クナシリのは精巧でかつ雅、アツケシのは麁であると記す。
- 8 荒山千恵「ハマニク製の容器「テンキ」―テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告―」『いしかり砂丘の風資料館紀要』第三巻、二〇一三、同館。テンキの実際の制作に関しての報告で文献資料も多く引用している。
- 9 林昇太郎・水島未記・手塚薫「『蝦夷草木図』写本の比較」『北海道開拓記念館紀要』第二九号、同館、二〇〇一。この論考では「蝦夷草木図」の三種類（瑞見本、甫周本、内閣文庫本）と函館図書館本『蝦夷地草木写生図』の図も含めて綿密な比較を行っている。
- 10 松前広長『松前志』天明九年、引用は真田宝物館本。
- 11 秦檣磨『蝦夷島奇観』寛政二年、本書の引用は佐々木・谷澤編『蝦夷島奇観』（雄峰社、一九八二）による。
- 12 谷文晁在印『蝦夷器物屋字図』、北海道立近代美術館蔵。
- 13 蝦夷小出とは『蝦夷語集・元』にいう「シャラ子ブ 籃（木皮の）のこと。sarup サラニフ で編み籠をいう。サラニフに関しては大坂拓「アイヌ民族の編袋―地域差と年代差、及び「土産物」・「伝統工芸品」としての継承―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要』第4号（同館、二〇一九）を参照されたい。
- 14 戴中剛司・右代啓規ほか「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくりⅢ」『北海道開拓記念館研究紀要』第四一号、同館、二

〇一三。

15 小杉康「物質文化からの民族文化誌的再構成の試み―クローラーアイヌを例として―」『国立民族学博物館研究報告』二二（二）、一九九六。

16 斎藤和範「千島アイヌの失われた伝統的技術「テンキ」の博物館講座における復元の試み」『北海道立北方民族研究紀要』二二、二〇一四。

17 荒山千恵氏には註8のほか、「ハマニンニクの利用と「テンキ」―一八世紀後半の絵図・記述を中心にして」『北海道民族学』第二二号、二〇一六がある。荒山氏の二論文はテンキの歴史的研究を含め、すぐれた成果である。本稿も同論文のご教示によるところが多い。

18 『東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇』同館、一九九二。  
東京国立博物館には明治五年に桂園派の歌人で孝明天皇紀の編者でもある松浦辰雄氏から寄贈されたオロツコの笠がある。またウイーン万国博覧会の出品物として収集されたものなかに「方言ムリチノ葉弁花〈岩内中浜産、土人此草ヲ以テテンキヲ造ル、即カリヤス〉」「テンキ又ランキ〈千島州振別郡合茂井村メノコホッタハ作〉」「テンキ細工笠 一点」とある(三浦泰之「ウイーン万国博覧会と開拓使・北海道」『北海道開拓記念館研究紀要』二九、二〇〇一・三、同館)。  
これによると千島アイヌの女性ホッタハの作ったテンキおよび作者不明のテンキの笠がある。あるいはテンキ笠は千島アイヌ作の可能

性が考えられる。

#### 補記

二ページで紹介した『松前志』のテンキ図については、インターネット(国立公文書館デジタルアーカイブ)で閲覧可能である。国立公文書館蔵本二種類のうち、「松前志7」(『松前志 九十止』)で確認できる。

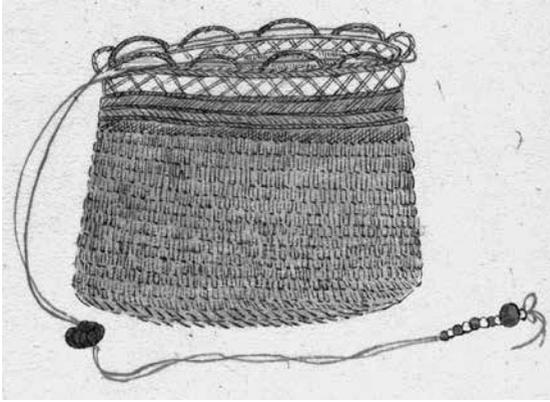


図1 リテンキ全図  
(秋田県立博物館蔵写本)

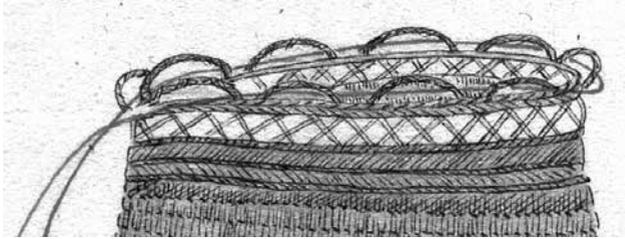


図2 リテンキ口縁部

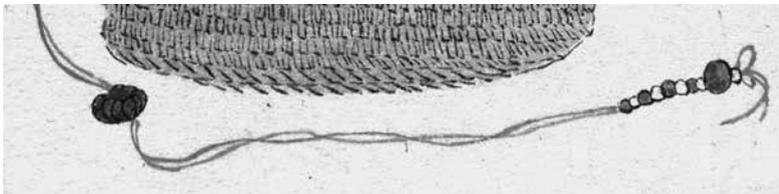


図3 リテンキ底部と括り紐（提げ緒）

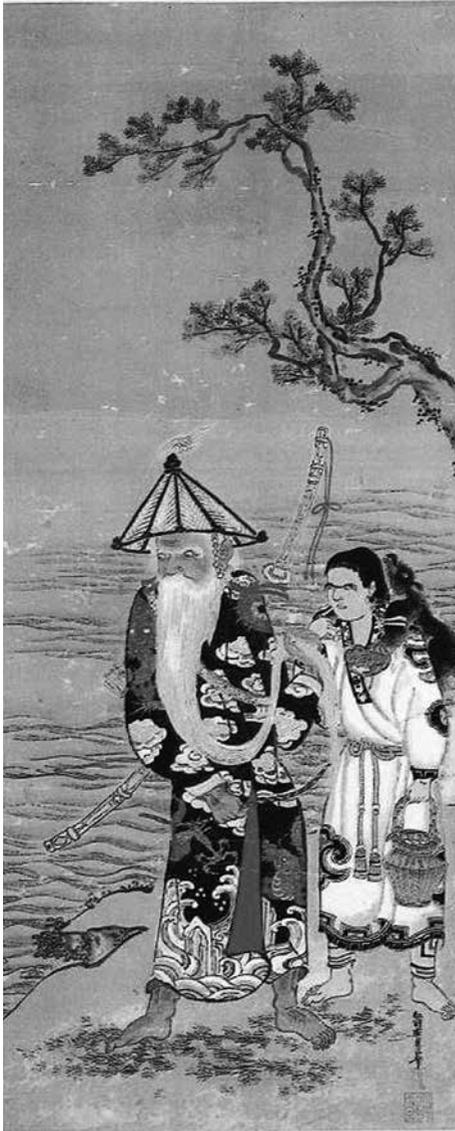


図4 小玉貞良筆『アイヌ盛装図』(アイヌ民族文化財団)

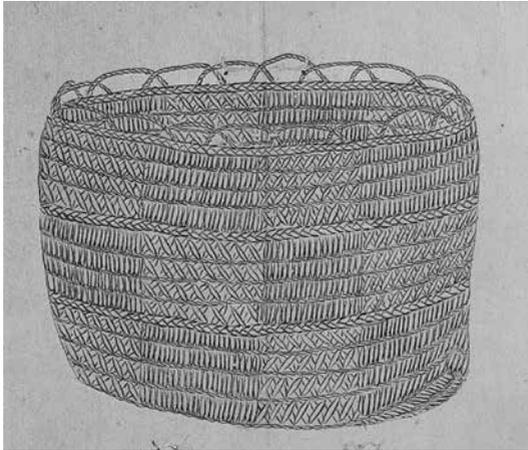


図5  
秦檜磨『蝦夷島奇観』「テンキ」(『蝦夷島奇観』雄峰社より)

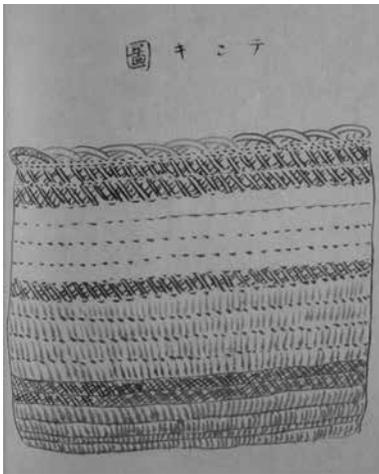


図6  
谷元旦『蝦夷紀行附図』(早稲田大学図書館デジタル)

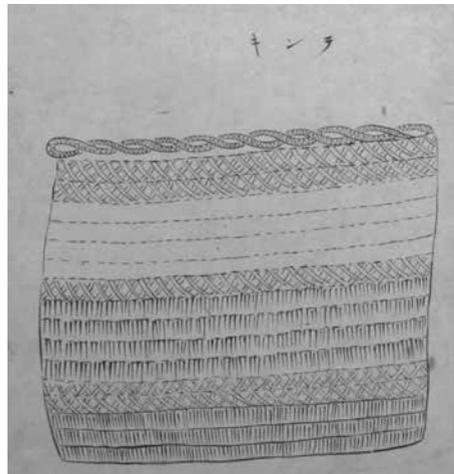


図7  
谷元旦『蝦夷紀行図 下』(函館市中央図書館デジタル)

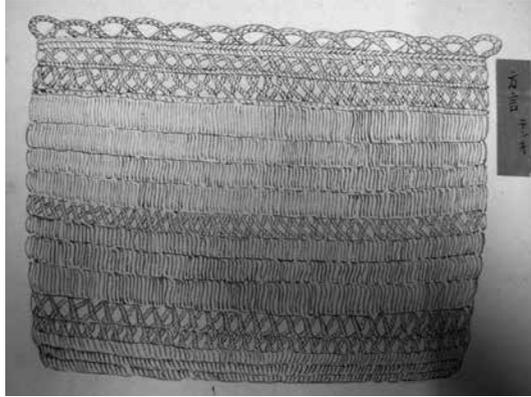


図8  
谷文晁印『蝦夷器物屋宇図』「方言テンキ」(北海道立近代美術館蔵)

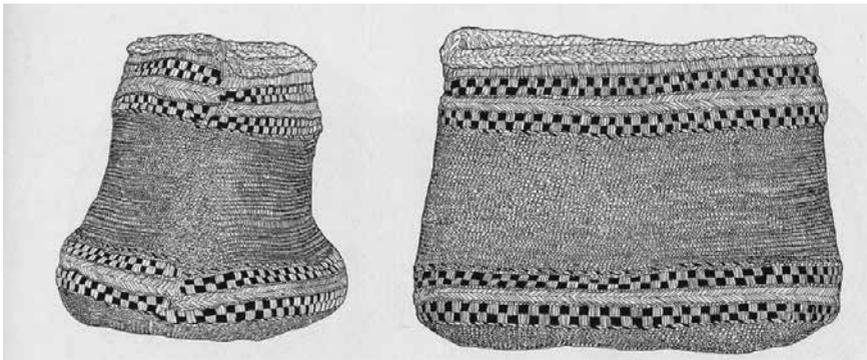


図9  
藪中剛司氏作図(右代・藪中ほか「北方四島の先史文化研究と博物館交流の基礎づくりⅢ」『北海道開拓記念館紀要』第41号)

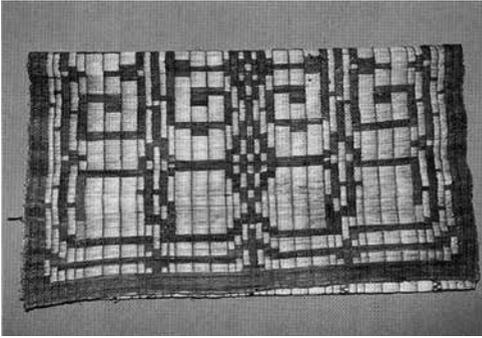


図10  
 テンキ草製小物入れ  
 サハラリンで採集 長40.0cm、巾70.5cm  
 (『ロシア科学アカデミー人類学博物館所蔵アイヌ民族資料目録』からの複写)

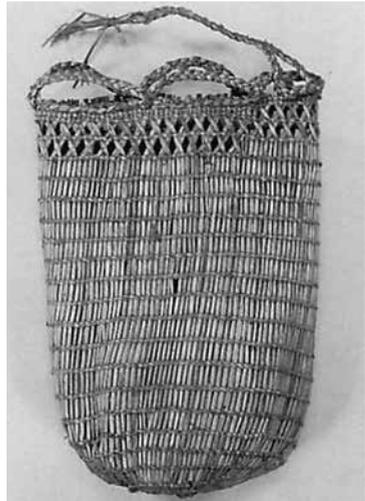


図11  
 テンキ製畚 高18.5cm、口径13.5cm  
 (『東京国立博物館図版目録』アイヌ民族資料篇)

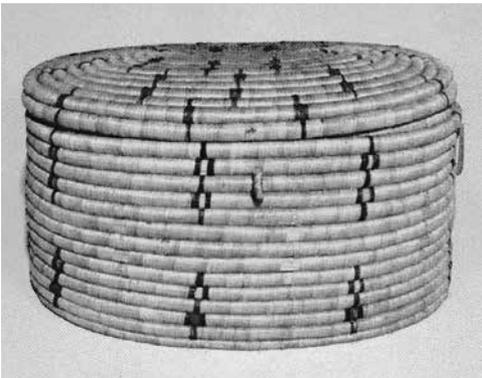


図12  
 テンキ草製編み籠  
 千島で採集、長径38.5、短径31.2、高20.8cm  
 (『ロシア科学アカデミー人類学博物館所蔵アイヌ民族資料目録』からの複写)



図13  
テンキ草製蓋つき小物入れ 総高18、長径32、短径14cm  
（『アイヌの工芸』展図録、東京国立博物館、1993から複写）

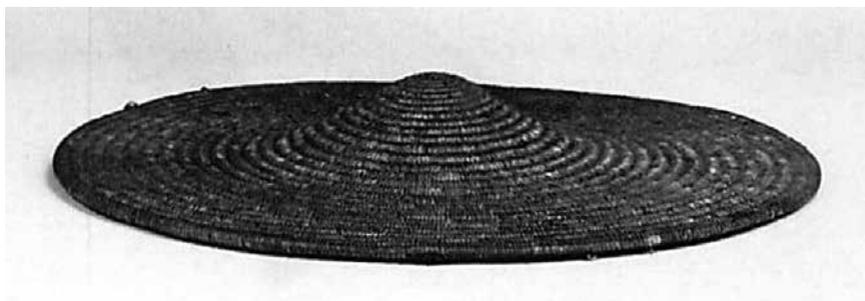


図14  
テンキ草製笠 径40.5、最大高5.0cm  
（『東京国立博物館図版目録』アイヌ民族資料篇）

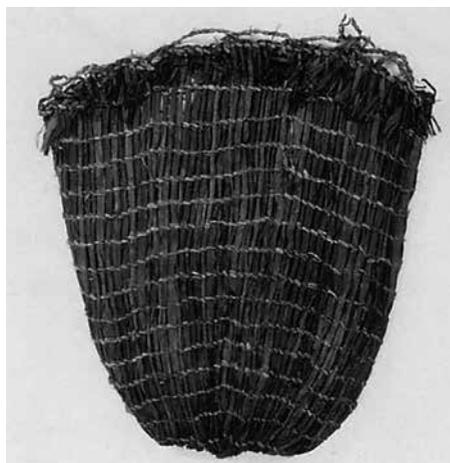


図15  
蝦夷小出し（サラニップ） 幅38、高29cm  
（『東京国立博物館図版目録』アイヌ民族資料篇）

# 現代語訳《ふでのまにまに》第一巻

嵯峨彩子

菅江真澄の随筆《ふでのまにまに》第一巻の現代語訳を収録する。真澄の随筆の現代語訳としては、本誌前号に収録の《しのはぐさ》にひきつづくものである。

《ふでのまにまに》は全九巻の考証随筆である。文化八年（一八一二）の秋から長年にわたって執筆され、晩年に清書されたと考えられている。自筆本は第八巻（岡崎市美術博物館蔵）をのぞき未発見である。写本が何度か作られており、過去に刊行された翻刻はこれらの写本を底本としている。

全九巻で取り上げられたテーマは幅広く、その記事数は二百九十項目にもおよぶ。第一巻は三十一項目からなり、その内容は祭りや漁労、採鉱などの習俗や、土地や動植物、器物などの名前の由来にまつわるものが多い。

ところで、大著となった《ふでのまにまに》、その記念すべき第一巻冒頭のテーマが久保田のかまくら祭りであることは興味深い。なぜなら、当時全国的にはほぼ無名だったと思われるこの祭りが、文化三年（一八〇六）、京都の著名な国学者、伴蒿蹊ばんこうせきの随筆の中に登場し、なおかつそこに引用され

た紀行文が津村涼庵つむじりやうあんによるものであったことと、関連付けて考えてみることでできそうだからである。

伴蒿蹊の随筆は、《ふでのまにまに》第一巻における引用数の多さから、まさに第一巻執筆当時、真澄の座右に置かれ、さかんに読まれていたと考えられる。また、江戸の人で秋田藩御用達、国学者でもあった津村涼庵の著作は、真澄も第二巻以降で何度も引用している。したがって、京都と江戸の国学者が、そろって久保田のかまくら祭りを自著に取り上げていたことを、おそらく真澄も知っていただろう。

久保田のかまくら祭りは、当時文化の中心であった京都・江戸にあっても、日本文化の古層を辺境に求める知識人たちの興味をそそる素材であった。ならば同じテーマでも地の利に恵まれた自分にこそ、世に問うべきものが書けるのではないか。そうした思惑が真澄にあり、このテーマを第一巻の冒頭に据えさせたとするならば、この随筆で真澄の目指したところも、おのずとみえてくるように思われるのである。

（秋田県立博物館非常勤職員）

ア 書名には《》を、原文の割註には「」を、和歌や俳句などの解釈部分にはへんを、訳註には（ ）を用いた。

イ 検索の便のため、全三十一の章段に記事番号を付し、【】内に示した。また、原文との照合がしやすいよう、章のタイトルのみ原文のままとした。

ウ 原文における人名、地名など固有名詞の表記で、現在の表記と異なるものがあっても、解釈上誤解の生じない限りにおいて、原文の表記をそのまま用いた。

エ ふりがなは原文にあるものと訳者によるものを区別せず、ひらがなに統一して付している。

オ 文献の引用部分もすべて現代語訳し、引用部分が長い場合は、真澄による文章との区別がしやすいように、点線でごく切った上で、引用部分全体を二字下げとした。

カ 現代語訳にあたっては、未来社刊『菅江真澄全集』第十巻所収の翻刻を底本とした。また、校正のため、大館市立図書館ウェブサイト「菅江真澄著作集」画像データ、日本常民文化研究所刊『菅江真澄未刊文献集』第二巻を参考にした。

(序文)

ふでのまにまに

この書は、見た事聞いた事の多くを筆にまかせてすらすらと書き進めたので、『ふでのまにまに』と名づけた。また、別の書に記した事もいくつか思い出すままに書き添えたので、重複する箇所もとても多い。筑波山の和歌<sup>①</sup>の句ではないが、人里近い山、木の茂った山と、いよいよ山深く、幾重にも生い茂る雑草に閉ざされた家屋のような有様で、人様がご覧になるならば、さぞむさくるしくみえるにちがいない。

文化八年の秋

菅江のますみ誌す

榎屋<sup>木のや</sup> (2) ふでのまにまに 一の巻 菅江真澄誌す

一の巻の章段

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 【1】 久保田のかまくら  | 【2】 をみなねぎ     |
| 【3】 はたゝがみ     | 【4】 まてのしろを    |
| 【5】 もりひ       | 【6】 雄鹿のをぬばな   |
| 【7】 しきのゆゑよし   | 【8】 あき田のものがたり |
| 【9】 しりべちの物語   | 【10】 をたまきぐさ   |
| 【11】 ちねくり     | 【12】 しはゆばり    |
| 【13】 まつかげのすゞり | 【14】 てこな      |

【15】 せむずまざい 【16】 浪岡のかみわざ

【17】 なみのふりしきさかた

【18】 ですのよこなまり 【19】 さばのはついいひ

【20】 おいさみをのむそみかくだ

【21】 ふくひきのもちひ 【22】 かめの鳴く夕ぐれ

【23】 星の葉艸しのぶぐさ 【24】 水ひく河のくもで

【25】 くずばなくずのを 【26】 そでのうら

【27】 似たる名どころ 【28】 いとこや

【29】 たまよろひ 【30】 をへら

【31】 うすだたみ

### 【1】 久保田のかまくら祭り

正月十四日の夜、雪をかき集めて積み重ね、板戸などにおしあてて囲みを作る。その様子は、三間(約五・五<sup>尺</sup>)四方、あるいは四間(約七・三<sup>尺</sup>)四方ほどの、雪の屏風を引き渡したかのようである。その中に空俵を二百三百、あるいは五百七百積み重ねる。そこに注連縄を引きのぼし、御神酒のしこんぶ、鏡餅などの飾りをして、鎌倉大明神の旗指物<sup>(3)</sup>、あるいは左義長<sup>(4)</sup>の旗を立てるのもある。

次第に日もすつかり暮れば、空俵の底に縄を付けて、それを三尺(約〇・九<sup>尺</sup>)ほどの木の枝の先端に結んで持ち、

荒々しい男達がそれに清火<sup>(5)</sup>をかけて、振り回して舞う。男子は生まれてから十五歳まで行うという。木貝<sup>(6)</sup>を吹き鳴らし「ヤ、ホラ、ヤ、ホラ」と囃すと、火は空を焦がして燃える。これを見ようと、老いも若きも道をふさいで、城下の内町の行き来はしばらく止まってしまふ。

まったくもってほかの国では見聞きしない習慣である。左義長、みそどんと、あるいはどんとあくるといい、また信濃などで幸神笑<sup>(7)</sup>といって、門松を集めて焼きはらう行事などがあつて、いささか似ているが、この秋田の久保田のかまくら祭りには少しも比べられそうにない。

かまくらの火も消し終わって、その家々の祝辞がにぎやかになつて明ける。左義長の囃しに貝を吹くのは、京都で唱門師<sup>(8)</sup>が金鼓<sup>(9)</sup>を鳴らすようなものだ。唱門師は京都の郊外のある村にいるという。

《古事記伝》<sup>(6)</sup> 十二、竈の神のくだりに、次のようにある。

竈云々。多くの人に炊事の方法をお教えになつた功績のある神である。さて《統紀》<sup>(10)</sup> 天平三年正月、神祇官<sup>(1)</sup>の奏書に「庭火御竈<sup>(12)</sup>の四季の祭祀は永く常例の祭祀とする」とある。大膳職式<sup>(13)</sup>に御膳神八座、高部神一座、竈の神四座、穴蔵の神四座とあげて、「それ

それぞれのお供えの品を載せ、右の四つの祭の春の材料は前の条項に従い、秋もまたこれに準える云々」という記述がみられる。竈神はこのように宮中でもお祭りになり、また古くから庶民までのおのおのお祭りしたことはこの記事からもわかるだろう。《江家次第》(14) 正月元旦四方拝(15) のくだりには、庶民の儀式に竈神をも拝むという記述がある、云々。

ここにいうかまくらは竈座かまぐらなどで、これも庭竈の意味だろうか。また、鎌倉というのも、その名はあちこちで田畑の名にもあり、陸奥の福岡にとても近い似鳥村のあたりの山の名にも鎌倉というのがある。元々はみな竈座の意味だったのだろうか。

## 【2】をみなねぎ(女禰宜)

秋田久保田城下の大八幡社にお仕えするのは、代々、鶴子の神という女禰宜ねぎ(16)である。これは古い時代に鎌倉鶴岡の神主の娘、鶴女が八幡神の御姿を描いた巻物を携え、竹堂公(17)と申し上げる殿を慕い奉って、常陸の国に来たのがはじまりという。女禰宜がいる事については、《貞観府》(18)に「禰宜を並べ置く社は女を禰宜とする」という記述がある。また

宇佐八幡に昔、女禰宜がいたことを、谷川土清たにかわとじずが(19)もすでに述べている。

## 【3】はたゝがみ

非常に音が激しくおそろしい雷を、はたた神という。秋田で冬の頃、ハタハタを獲る時に男鹿や八森の沖に雷がとどろくのを魚集めといって、漁民が喜んで網を張って待つと、必ず魚が群がって来る。それを鱚雷はたはなみということから呼びはじめたのだろうか。

このハタハタは遠い蝦夷地にもいるという。この秋田を主な生息域とし、みちのくの深浦、鱈ヶ沢などといった津軽路にもいる。

ハタハタは鱈はたはた広、または波多々芸魚はたたきの意だろうか。

《古事記伝》十一「三十六丁」波多々芸母はたたきのくだりに、次のようにある。

波多々芸母は「波の字、諸本に婆はとある。今は真福寺本による。この語は下にある二つも同じ」鱈揚はたたきもである。中世の物語の書物などに袖の波多はたまた波多はた袖そでなどがあって、袖の端の方をいう。魚の鱈はた「鱈はたの字は背の上のたてがみであると註があるが、波多という名は本来左右のひ

れをいうのだろう」また俗語で物の周辺をはたというの  
も同じ意味である、云々。

また、はたはた<sup>(20)</sup>という虫がいる。羽音が激しいのでそ  
うよぶのだろうか。

#### 【4】#1のついでを

秋田の天王村から湖水（八郎潟）を渡るために、古い時代、  
雄潟の橋といつて三百間（約五五〇<sup>尺</sup>）の橋があつた。遠江  
国の浜名の橋<sup>(21)</sup>にも少しも劣らなかつたであろうが、その  
橋が絶えて久しく、現在は船で渡るので、船越とその村の名  
をよぶ。

この船越浦は、冬になればシラウオ漁をするといつて、  
間手網<sup>まてあみ</sup>というものを張り、十月の丑の日、左右杭<sup>まてぐい</sup>を四本湖中  
に打つと、その張つた網の網口からシラウオが入る。網の後  
に布の袋をつけて、その袋の中にシラウオがたまれば、後の  
布袋の口を解いて小舟の中にシラウオを入れる。この浦で歌  
う舟歌では「船越の左右<sup>まて</sup>の「多く」という意味もあるのだろう  
か」シラウオがいる時は、必ず男鹿にもハタハタがいるのは  
間違いない」と歌う。いかにもそのとおりだという。

《倭名抄》<sup>(22)</sup>に、志摩国英虞郡<sup>あじ</sup>にも船越<sup>ふなこえ</sup>という場所がある

と書いている。また陸奥の志田郡松山の郷に舟越村がある。  
同じ名前も多い。

《倭訓栞》<sup>(23)</sup>の二巻には、次のように書いている。

あまのまてがた。海人<sup>あま</sup>の左右の手形であろう。左右の手  
を広げて海に潜る姿をいうのだろうか。また竹蟬<sup>たけまてがた</sup>潟の意  
味ともいう。竹蟬という貝は、深く砂の中に入る。それ  
を取るために、潮の引いた後の砂を鋤でもってひとへら  
返せば、穴がある。その穴に塩を入れて、砂上に浮き上  
がったのを、まてぐしというもので刺して取る。取り損  
なうと、どんなに深く掘つても二度と出て来ない。だか  
ら目を離さないでじつと見ていなければならぬため  
「絶え間ないので」とも詠んだのだろう。柿本人麻呂の  
歌に「潮が引けば海士<sup>あま</sup>のまてぐしはひまもない。私が思  
うことを知るひともいない」とある。

あまのまくかた。《後撰和歌集》<sup>(24)</sup>の歌にはまてかた、  
まくかたの両説がある。顕昭<sup>けんしやう</sup><sup>(25)</sup>はこの説について、「藻  
塩を焼く海人のまくかた」とよみ、斎宮女御の「待つ潟  
に海士の掻き集める藻塩草」という歌を根拠とした。潮  
を待つ潟の意味である。

（底本の誤りを修正した箇所傍点を付した）

出羽、陸奥の方言で、手厚く行う事を「諸手<sup>ま</sup>」という。船越の左右網<sup>まてあみ</sup>、左右杭<sup>まてぐし</sup>はどの説にも該当しない。これらの歌の解釈でも説明できない。左右網、左右形、左右杭、まくがたは、その国その国で異なるものなのだろうか。

## 〔5〕母礼火（もれ火）

琴の湖（八郎瀉）〔近江の琵琶湖にならつて琴の湖という。湖の形もやや琴の形に似ている。また近江の鮒を源五郎<sup>26</sup>、秋田の鮒を八郎<sup>27</sup>という〕では、七月十五、十六日のころ、筑紫八代の不知火<sup>しらぬい</sup>のように、湖上に怪火が出現する。夜が更けるといよいよ多くなる。浦人は「もりび」とも「もれび」とも呼ぶ。「<sup>28</sup>霊火<sup>もうれいび</sup>」という意味でそのようにいう。

また、雨の夜、八郎瀉のほとりを行くと、藁に燐火がつくことがある。そのときに藁を振るうとますます火が大きくなる。土を蹴つても火が出る事がある。これをみのむしともいう。見慣れない人は大変怖がつて叫び、念仏などを唱えて、走つて村に入れば火も消えゆくという。燐火は埋み火を合わせれば消えるという。越後の弥彦山あたりに、このみのむしがとても多いという。

《倭訓栞》に、次のように書いてある。

のび云々。燐火というのも意味は同じである。北海のたこ火、湖水のしる火、東寺繩手の宗元火、伊勢阿濃の五体火などがこれである。悪路主<sup>あくろお</sup>の火というのも同じである。青鷲、朱鷲などの羽根の光も火のように見えるようだ。これは樹上にいる、云々。

河内の姨が火、越中のふみり火、三河の魂魄野などはみな同じである。私は、八郎瀉から火が飛び上がり、また水に下つて、何度となくそうやって水上に消えたのを見た。また、松前の馬坂の北谷へ、蹴鞠ほどの大きさの火が落ちたのを見た。世間で狐火とよんでいるものも、とても不思議である。近くで見れば耳が見える事がある。出羽の雄勝郡松岡の狐火は五月四日の夜、松岡の白山社の齋宮に出現し、夜が更けるととても多くなる。同じ出羽の秋田郡北比内大館に近い辛沢の狐火が出るのは、九月二十九日の夜である。この夜は、辛沢の稲荷がその官位につく夜であるという。どこにでもあるものである。

《江戸砂子温故名跡誌》<sup>28</sup>には次のように書いてある。

王子の稲荷社は金輪寺の二三町わき、金輪寺村にあり、

当社は関東八カ国の稲荷の統領であると言ひ伝えられている。毎年十二月晦日の夜、八カ国の狐がここに集まり、狐火をとます。この火にしたがつて、田畑のよしあしをその地元の住民が占う事があるという。へ狐火に、王子の田畑のよしあしを知ろうとここに来る、金輪寺である。年ごとに時刻は同じでなく、わずかな時間である。日が暮れてまもなくであったり、夜明け前であったりして、遠方から見に行つても、見られずにむなしく帰るものが多い。一夜ずつととどまるつもりであれば、たしかに見ることが出来る。

この狐火を、秋田で「きつね松明」とよぶところがある。

### 【6】 雄鹿の牡猪鼻（男鹿のおいはな）

秋田郡脇本のおいほなに生岬という岬がある。猪の鼻に似ていて、海に突き出た高い岬で、ひじょうに険しいところである。その字を生猪鼻、雄猪鼻などのようにも書く。

男鹿は元々《日本書紀》斉明紀に出てくる恩荷(29)からきており、恩荷は蝦夷の名である。それを男鹿、雄鹿、小鹿などど近頃は書いているが、古い時代の仮名遣いはまったく違っていた。雄猪鼻、雄瀉(雄形とも書く。今の八郎瀉のこ

とで、琴の海ともいうが、その渡りをいう)など、雄という字が多い。また雄形を岡田とも書いている。

岡田の渡りに三百間(約五五〇呎)の橋があつた事を、「まてのしらうお」のくだりにも載せた。この橋は、浜名の橋にも劣らなかつたという。遠江国にある式内社の御神に浜名郡猪鼻湖の神社がある。雄猪鼻によく似た神の御名である。明応の地震で壊れて、今切という村になり、遠江も国の名のみとなった(30)。

岡田の橋も地震で揺れ、崩れて、昔の渡りを舟で行き来するので、今は船越の渡りと呼ぶ。だから雄形の渡りとて、岡田の橋のことであると知る人はまつたくない。

### 【7】 しきのゆゑよし

《日本書紀》神代の巻「いざなぎのみこと、かぐつちのみことをお斬りになる」のくだりに、次のようにある。

いざなぎのみことが、かぐつちのみことを斬つて、五つに分断された。これらはおのおの五つの山の神となつた。一つ目はつまり頭であり、大山祇となつた。二つ目はつまり胴体であり、中山祇となつた。三つ目はつまり手であり、麓山祇となつた。四つ目はつまり腰であり、

正勝山祇まさかやまつみとなった。五つ目はつまり足であり、離山祇しぎやまつみとなった、云々。

そもそも鉱山ごとに金山彦の御神を山々にお祀りすべきところを、どこもかしこもその山々に山の神だけをもつぱら祀っている。なぜかという、頭は大山祇、胴体は中山祇、手は麓山祇、腰は正勝山祇、足は離山祇となった。金銀鉄銅鉛、みな山の頂にあるものではなく、いずれも鉱物は山脚にのみ産する。それで鉱山の坑道をシキといい、シキはみな山の麓にある。だから離山祇命を祀るべきなのだという。

シキ坑に坑門を構えるとき、埋札うずみふだ、逆札さかさふだというものがあり、その逆札に稲荷、金山彦、地主神などを記して、坑道の中に山の神を秘め、お祀りするという。

### 【8】あきたのものがたり

古い時代から、鰐田、鮑田、秋田などの表記がみられる。

《倭訓栞》の「あいだ」のくだりに、次のようにある。

出羽国秋田を「あいだ」というのは、韻が共通しているためである。《日本書紀》には「鰐田」という文字で表している。《倭名抄》では鰐を「あぎ」とも読んでいる。

美作郡の地名の英多あいだは漢字の発音である。秋田城介は出羽介であり、秋田城を守護する。姓の城もここから出たという、云々。

秋田は人の名にも姓にも多い。《竹取物語》には、次のようにある。

齋部いんべの秋田を招いて、名前をつけさせた。秋田は「なよ竹のかぐや姫」と名をつけた、云々。

《著聞集》(31) 九巻には、次のようにある。

強盗が入ったが、貞綱は酒に酔って白拍子の玉寿と寝所を共にしていた。思いもよらないところで寝所にうち入ってきたので、貞綱は太刀を抜いて打ち払い、玉寿を引き立て、裏庭にしりぞぎ、檜垣から隣へ移って、自分もともに逃げた。その事が世の中に伝わって、強盗から逃げたのがみつともないなどと噂になったのを、貞綱が耳にして「これから先も、強盗のために命を失うつもりはない。しかし、主君の一大事には、何度でも命を惜しまないつもりだ」といった通りに、秋田左衛門尉義盛

(32) の合戦の時、昼は紅の幌をかけて黒い馬に乗り、夜は白い幌をかけて葦毛の馬に乗り、真つ先に敵陣に攻め入った。まことに一騎当千の様子であった。日頃の言葉通りで、立派であった。ついに組み合う相手がいなかった。自害した。

秋田は姓にも名にも多い。

## 【9】シリベツの名どころ

「後方羊蹄しつへしを政庁とするように」という記述が《日本書紀》齊明紀にある。それを松前のシリベツが嶽（尻別岳）のことであると、人がもつぱらいつているが、シリベツ山とは津軽の岩木山だろう。また、後方うしろかたという村がある。

さらに、青森の茶屋町の端から西南に入ると、義経公の片脛巾はまき（33）を祀つて荒脚あしはまき卷明神と申し上げる、大きな旨菟まいちぢの林がある。そこに草刈りの少年がいて、たずねてもいないのに「ここはシリベツの林です」といった。不思議な事だと思つて、問い返してもう一度たずねようとすると、ちょうど草刈りの少年の仲間がやつてきて「何の事をお話したのか」というと「ただ、シリベツの林はここですと、旅の人にお知らせしたのだ」といつて、去つていった。

町に帰つて人々に語つたが、「私もシリベツを知っている」という人が誰もいないところに、青菜を売りに来た女性が出て「あの旅の人は、さつきシリベツの林にいた人のようだ」と語つたので、そのとき、青森にシリベツの古い名所があるを知つた。

シリは崎の意味であり、ベツは川で、川の崎というアイヌ語なので、あちこちにシリベツの名はあるのであろう。だから、ここにその時代のアイヌ語が残っているということは、齊明紀の後方羊蹄はこの青森の川崎しつべつの林なのであつて、ここに古い時代、政庁が置かれたのだろう。数年来、この事をたずねあぐねていたのを、今回思いがけなく聞くことができて、本當にうれしかった。

《閑田耕筆かんでんこうひつ》（34）一卷天地部に、次のような記述がある。

大和国秋篠の外山の里と詠まれた場所がどこなのか、今は知られていない。しかし同じ国の並松（法隆寺門前をいう）の人、藤川周斎はひじょうに和歌で有名だったが、少年時代からこれをたずねてやまなかつた。ある時、またそのあたりを過ぎようとしたところ、一人の老農夫が鋤に頬杖をついて、声をあげて歌を吟じ、へ秋篠の外山の里は時雨が降っているだろう。生駒山に雲がかかつて

いる」と高らかに唱った。周斎は不思議に感じ、見かけによらず風流な男だと思つて近寄り「どういつた方ですか。私はその外山の里を知りたいと思ひながらずいぶんたちます。どうか教えて下さい」といった。すると、農夫はよろこんで「私もまたこうしてたずねていらつしやる方を長らく待つていました。私は物を知らない賤しい身分の者ですが、若い時に仕えた方がこの事をよく知つていて、『私が死んだら知る人もいなくなるだろう。惜しいことだ。お前は心ある人を待つて、この事を伝えなさい』と熱心に教えて下さつたので、長い間、ふさわしい人さえ見ればこの歌を唱つて試してきましたが、幸いな事におたずねくださる方に会つて、主の願いを今果たしました。その外山の里を今は中山とよびます。しばらくの間、この里の役人に外山氏の人がいましたが、これに憚つて、中山と呼び方を変えたのです。あつてはならないことで古い名所を失つたのだとおっしゃつていました」と語つたという。

思うに、貝原翁の《大和路の記》<sup>(35)</sup>には「外山は秋篠の西である。名木の楓がある」と記されている。だとすれば呼び方が改められたのは元禄の中頃以降のことだろうか。さて、賞賛すべきは、この農夫が主の遺命を忘れず、

数十年心にかけていつもこの歌を唱え、たずねてくる人  
を待つていたことである。その主がどんな人だったのか、  
知りたいものである。私がそこに遊びにでかけ、中山と  
たずねると、西大寺の西一村を中に隔てて、十四五町ば  
かりあるという。また、伏見山をたずねても、まつたく  
知つてゐる人がいなかったが、かろうじて一人、興福院  
村という上の小山を伏見山とよぶと教えてくれた。小山  
はすなわち岡である。だとすれば、その興福院村はつま  
り伏見の里ということであろうか。ついでの話をする、  
この興福院というのは尼寺で、別名弘文院ともいうが、  
元はここにあつたのが、寛永年間に添上郡に遷されたとい  
うことで、その名前が奈良の興福寺に似ていて紛らわ  
しいので、ここに記す、云々。

私がシリベツをたずねて辿りついたときの愉快な気持ち  
は、周斎翁が秋篠の外山の里にたずねあたられたときもきつ  
とこうだったので、と思われるようなものだった。

藤川翁には竜門の滝の秀歌がある。また、坂本に白玉梅と  
いう名木がある。その梅の盛りに歌つたへ世の中には春の光  
が曇りなく満ち、花も色鮮やかに咲いている。この花の白玉  
という名に香りがただよっているのだろう」といふ歌が知ら

れている。この歌を聞いてしまった後に、白玉梅の歌を詠める人はいないという。

### 【10】をたままきと

この草の漢名を糶斗菜と書くともいう。花は樺色<sup>かばいいろ</sup>(36)に咲いて、どこの野山にも多い草である。これを方言で風鈴草とよぶところもある。

出羽秋田の寺内山に、昔この草が多かったのだろう。おだまきの道という名のある場所がある。もしくは、古木や枯れ木などをおだまきというから、どちらが由来だろうか。

また、この草の仲間で、松前小島が原産の草を、小島草という。これも今はもっぱらおだまきとよぶ。私は天明の末頃、松前からこの草の種をあちこちに贈ったが、ほうぼうの国や里に満ちて、今は野の外れにも生えているところがある。この草を元和のはじめに京都に差し上げたところ、後水尾院から「ああ、珍しい」と愛でられ、そのあまり、碧玉草という御名前をいただいたよしを、松前の人たちが聞き伝えて、今も語っている。

この草は、葉が萌葱色、花は世間でいう瑠璃紺で、花は逆さに釣ったようである。松前以外でこの草を小島草とよぶ人はまったくおらず、おだまきとだけいつている。風鈴おだま

きを、山おだまきという。山おだまきと碧玉草(小島草)とを並べて植えれば、山おだまきは花も姿も見劣りする。格式のあるいでたちをした人と、身分の賤しい者が、色々着物を着て並んでいるようなものである。

### 【11】ちねぐり

小さいもぐらのようなものを地鼠<sup>じね</sup>といい、また野良鼠もじねという。じねはじねずみの省略したいい方だという。

谷川士清は次のように書いている。

じねぐり。墓目<sup>ひきめ</sup>(37)の異名である。じねという鼠は葦の根を食べ、その声が矢の鳴る音に似ているためにそう呼ぶと、《三議一統》<sup>さんぎいつてう</sup>(38)の記述にある。ひみずという鼠をじねぐりという。

じねぐりは土回<sup>じめぐり</sup>の意からきているのではないだろうか。

### 【12】しはゆばり

小便をすることを「しばる」という人がいる。《倭訓栞》に「しはゆばり。《倭名抄》に淋病の読みとして書いてある。屢尿<sup>しはゆばり</sup>(頻尿)の意味である。淋瀝<sup>りんれき</sup>(39)をしたてゆばりという。したて

はしたたりである」と書いている。「しぼる」「すぼる」は「しばゆばり」からきているのであろう。

### 【13】まつかげのすざり

秋田郡小又地域に温泉がある。その近くに白糸の滝といつて風情のある場所がある。さらにその近くに硯台というところがある。その辺りから花紋石（木の葉石）が採れる。石は色が黒くて硬く、それを切つて硯にする。木の葉がないものも、薄墨、摺墨用の硯石の材料となる。甲斐が嶺<sup>か</sup>（<sup>ね</sup>40）の黒石よりも硬く、墨をすりづらいが、極上の墨はすぐにすれてしまう。硯台のほか、滝の上からも摺墨、薄墨用の硯材、花紋石、斑石などが採れる。世の中に木の葉石で硯となるものはまれであるけれども、この小又石には試金石となる木の葉石がある。昔、ここから南部へ行き来した古い道があり、松陰というところがあるので、古い時代の松陰の硯は、ここから採れたのだらう。

《倭訓栞》に次のように書いている。

松陰の硯は、言い伝えによると、平重盛が黄金を宋の朝廷に贈った時に得たものである。重衡がこれを受け継いで、法然から受戒した時に布施とした。大永七年正月、

知恩院から参内し、貴人にこの硯をお目につけた旨の記述が《御湯殿記》<sup>(41)</sup>にみられる。大和当麻寺にもあり、鎌倉光明寺にもある。紫色である。ともに元氣精英の篆字<sup>てんじ</sup>があるともいう、云々。

この硯は名高いもののため、あちこちに根拠のない話があり、宝物弘道にとても多いものである。

いつのころだろうか、元旦に春日山で鹿が鳴いたことがあった。どんなわけだろうと、御祈祷などさまざまご命令があつて、人々に歌を詠むようお命じになつた。そのころ、京都の在番だつた南部十二代大膳大夫重信公が紫宸殿の南階段にいて、《春霞を秋の霧と間違えて、うっかり鹿は鳴いたのだらう》と詠んだ。この歌の褒美として松陰の硯を授けられたという<sup>(42)</sup>。それ以降、松陰の硯は南部家の重宝である。それが今、別の場所にあるべきものだろうか。その硯をこの小又の松陰のあたりからとつて献上し、「どんなところにあつたのか」とのおたずねに、「松陰からとれました」と申し上げ、その名がよかつたので、松陰という名で評判になつたものだらう。中国から贈られた硯であれば、相応な漢名もあるにちがいないのに、それならばなぜ松陰といつているのだらう。南部から差し上げた硯の松陰を、ふたたび南部へお返し

になったものだろうという人がいた。推測の話だが、もっともらしく感じられる。

#### 【14】てこな

蝶を「かわひらこ」と呼ぶのは、古い言い方である。「べらこ」というところがある。また、「かつかえ」というところがある。みな「かわひらこ」から転じてできた言葉だろうか。津軽、あるいは毛馬内、花輪などで「てこな」という。

「てこな」は人の名前にもある。《万葉集》山部赤人の歌に「葛飾の真間の入江にうちなびいて、美しい藻を刈っていたであろう、てこな」が思われる」という歌がある。下総国葛飾郡にてこな明神という神がいらつしやる。昔、ある乙女がいて、藻を刈り、水を汲む、身分の低い少女だったが、顔かたちが上品で優美な様子は、宮廷に仕える女性にもひけをとらないほどだった。そのため、見る人がみな想いをかけるのを、この少女が思い煩って、この世に自分がいなければと、葛飾の真間の入江に身を投げたという。人々があわれに思つて墓を築き、今は神としてお祀り申し上げているという。「てこな」は元々蝶の名で、そこから人の名につけたのだろうか。

#### 【15】千寿万歳

「せんずまざい」と読むという。

《年浪草》<sup>としなみぐさ</sup> (43) 春のくだりに次のようにある。

千寿万歳。歴史の記録によると、大和国窪田、箸尾両村の千寿万歳両座の太夫が官署の庭に来て、鼓舞を行った。そもそも千寿万歳は窪田、箸尾の両村から出ている。二村は奈良の西南にあり、互いに隔たること三里ばかり、ここに両流があり、つまり窪田、箸尾がこれである。窪田太夫、箸尾太夫は左部、右部に准じ、これを称した、云々。千寿万歳。正月五日、宮中の木造初め<sup>うつくりはじ</sup> (44) のこの日、千寿万歳ならびに猿舞が東の御庭に来た、云々。これは季吟<sup>きぎん</sup> (45) が「千寿は猿回しである」とも、また「千寿万歳は万歳楽であつて、踏歌<sup>とうか</sup>の節会<sup>せちえ</sup> (46) の楽曲である」ともいった。おおよそ京の都で猿を舞う者は六人いて、大和では俗に狙公<sup>そしう</sup>を猿回しという。このほかは勝手に猿を使うことができない。また伏見には六人いる。千梅著の《篋纏輪》<sup>わくかぜわ</sup> (47) で「猿回しは常におり、宮中にやってきて舞い、情趣がないので無季<sup>むせき</sup> (48) である」というのは間違いである。〔前の猿回しの項の下に見える〕

万歳。これも千寿万歳であり、千寿を省略していうの

だろうか。《岷江入楚》<sup>(49)</sup>には次のようにある。「正月十四日十五日、都の風流な男が、月の興にのつてあちこちで歌ったり舞ったりしたので、のちの時代に千秋万歳といつて、それなりに興趣があるものとして催すことがあるのは、わずかにその名残である、云々」。千寿万歳は大和の外にもあるのだろうか。《御湯殿記》には、次のようにある。「元龜三年正月五日、北畠の千寿万歳が三人参つた、云々」。北畠は《指南抄》<sup>(50)</sup>に「一条から北その間三町である」と書いている。だから都のうちにもあるのだろうか。今万歳と称するのは、烏帽子、素袍<sup>すあう</sup>⑤を身につけ、鼓を打ち、早歌を唱うものである。また、三河国に一派がある。ある説に、大江定基<sup>おおえさだもと</sup>⑤は博学ですぐれた才能があり、仏道にも疎くない人で、正月の祝いにもめでたいことが充ち満ちているといつて、自分の知行所の百姓に教え、仏法東漸<sup>ぶつぽうとうぜん</sup>⑤の歌を歌わせ、春のはじめから俗事を忘れる仲立ちとしたという。今の世に広まった三河万歳がこれである、云々。

大江定基卿は三河守で、赤坂の力寿というものを恋人とし、力寿が死んでのちに出家して、中国に渡つて寂照上人<sup>じやくしやう</sup>といつた。世間で鳥追い<sup>(54)</sup>というものを正月に唄うが、これもこ

の大江定基の御作であるという。

三河万歳は別所村<sup>べつしよ</sup>というところから出て、鶴太夫、亀太夫という通り名がある。才藏<sup>さいざう</sup>という相方がいて、これは奴万歳<sup>やつばんざい</sup>である。才藏は別名幸若<sup>さいわか</sup>ともいう若い従者である。有名な幸若も幸若<sup>さいわか</sup>の類で、流派は同じではないがよく似ている。

また秋田万歳は早歌もしくさも異なる。秋田万歳の開祖も三河国から常陸国に来て、その家は今秋田の久保田にあつて代々針生清太夫という一派である。烏帽子に松竹鶴龜の紋<sup>もん</sup>がある水干<sup>すいかん</sup>⑤を着て、才藏は広袖厚綿入れを着て、浅黄の直平頭巾<sup>ちかひらびん</sup>⑤といういでたちである。古来から家に伝わる十二段の曲があり、表六番、家建万歳、経文万歳、神力万歳、峰入万歳、御国万歳、双六万歳、裏万歳、扇万歳、お江戸万歳、門跡万歳、吉原万歳、さくら万歳、名寄万歳などがあるが、代々長い間子々孫々に伝えられ、変化していつて、三河の流儀とは大いに異なつたが、そうはいうものの、昔の名残はある。

また、猿舞があり、それを猿子<sup>さるこ</sup>という。松岡武太夫、三須田左太夫がこの二家である。そもそも猿狎<sup>さるぢやう</sup>の家は金砂<sup>かなま</sup>(秋田市)の東清寺の門脇に住んで、この寺の神の祭りなどに猿狎の舞があつたが、今は履見<sup>かみみ</sup>⑤の集落にうつつて、そこに混じつて住んでいる。猿狎は猿樂であつて「さるがく」の音が

変化してそういうのだろうか。過去の雅な言葉がここに残ったものなのだろうか。

### 【16】なみをかのかみわざ（浪岡の神事）

陸奥津軽の浪岡八幡宮の縁起は、高野山の僧が編纂したもので、花山少将忠長卿<sup>(58)</sup>が賞賛して、正保（一六四四～四八）の頃、清書されたものである。「花山院少将忠長卿は松前左遷、帰京の時は津軽を通り、黒石の郷にお泊まりになった。松前で四月の中頃、梅の盛りをごろんになって、へ都で語ったならば、人は偽りだというだろう。卯月（陰暦四月）に梅の盛りだというのは」と歌に詠まれた」。

この八幡宮の神事は八月十五日である。待宵の舞樂試演の夜、刀や脇差しをおのおの手に持って、これを交換したい、これを交換なさいと呼ぶと、誰ともなく交換する。これを夜宮の刀替（なががえ）という。神の御心に叶う人は、必ずこの夜名刀を得るといふ。《俳諧新季奇》<sup>(59)</sup>という本の七月のくだりに、「宝劍の市（備中足守）、刀脇差しを市で販売する。例年一振りずつ名劍が出るという」とある。筑紫太宰府に鸞替（うさかえ）<sup>(60)</sup>という神事があって、黄金の鸞を得ることがあると人がいつていた。りっぱな神事にも多いものである。

この浪岡の郷に安倍貞任<sup>(61)</sup>の末子の高星（たかほし）の古城がある。

さらに塚があり、その子の名のついた月星殿（つきほしどの）という古跡がある。また、岩木川に井戸淵という場所がある。宝暦のはじめであろう、長雨のころ、川岸が崩れ落ちて井桁のようなものが二つ出てきた。その中には炭がととも多く、大きな笏（しやく）が二本あった。ここに埋葬された人は時代を経て骨なども溶けたのだろうか。今稲荷神社の近くにある井戸淵という場所は、高星月星殿を埋葬した棺が水底に落ちて、井桁の形をしているのでそうよぶのである。

また、時頼入道<sup>(62)</sup>の愛妾だった韓糸姫（からいと）がここに流されて、その菩提寺（この寺は今弘前の禅寺構というところに遷された、万象寺という名で現存する）の跡がある。五郎姫六郎姫の祭りというものがある。安倍氏の姫だろうか。また、金光上人<sup>(63)</sup>の塚がある。

いわれの多いところで、私は《浪岡物語》<sup>(64)</sup>という一巻を書いた事がある。「あさぎはかま」というくだりに、「浪岡の源常林の銀杏の木「このあたりに強清水桂林という鍛冶がいて、槍を主にうっている。今は浪岡槍といって笹葉形、袋打などがある」、また「浅黄袴に色小袖、つまを探してとぼとぼ」という地唄が残っている。いわれのあることだといふ。もつと書きたいことはあるが、省く。

【17】なぬふりしきさかた（大地が揺れた象潟）

《閑田耕筆》二巻人物の条に、次のようにある。

人の寿命ははかり知ることができないものである。  
橘南谿の《東遊記》<sup>(65)</sup>に、越後糸魚川の近く、下名立  
というところの津波の話を書いて、命あるものがこ  
とごとくみな亡くなった中で、一人木の根に引っかかっ  
ていた女性がいて、息を吹き返し、被災時の一部始終を  
語った旨が書かれている。また、寛政四年四月一日夜、  
島原津波の時も、溺死者の中でわずかに息があるもの  
に薬を用いたものの、みな救うことができなかったが、  
四五歳の子もがただ一人生き残っていたので、三三三村  
の肝煎の家で育てたという。また、今から百年前になる  
だろうか、難波津波の時は、同国富田普門寺の竜溪和尚  
が人からの依頼で逗留しており、人が皆走って逃げる中、  
和尚は「時である」といって、参禅の僧十人とともに死  
を選んだ。年齢は八十余りであった。しかしその十人の  
中でただ一人だけは息があるようにみえたので、薬を使  
うと蘇生し、和尚の教えなどを語ったという。これも同  
様の例である。和尚も富田にいたならば災いに遭うこと  
もなかっただろうに、ここにいらしたということとは不慮

の死をとげる運命であったのだろう。

いにしへの富士山噴火の時の地震こそ知らないが、伊豆大  
島、薩摩の桜島、信濃の浅間山も噴火した。その浅間山の麓  
の住人であるが、噴火の際、訴訟があったため江戸にいた者  
が、ただ一人存命している。《閑田耕筆》の話と同様である。  
文化元年、六月八日の夜亥の刻（九時半から十一時頃）、鳥  
海山が噴火して大地が揺れ、象潟は埋もれ、文化七年八月  
二十七日、男鹿の地震で生鼻崎が崩れた時も、不思議に命が  
助かった人もあった。

【18】ですのよこなまり

秋田地方では、錢袋も錢箱もみな「じょうず」といい、ま  
た、村落の政務に関係する、田文や水帳<sup>(66)</sup>などを入れた箱  
などを鎖で閉ざした重い調度も「じょうず」という。鎖司な  
どと書く。《倭訓栞》に「です。錢司の読みである。山城国  
相楽郡の里である。貞観年間、銭を鑄造する役所があったと  
ころである」と書いている。

思うに、「じょうず」は「です」が訛って変化したもので  
はないだろうか。このことについては《統紀》二十八巻に  
「高野天皇（称徳天皇のことをこう申し上げる）の御代、神

護景雲元年冬十月云々。十一月、錢貨を偽造した者、王清磨ら四十人に錢鑄部という姓を与え、出羽国に流した」とある。錢司でずは、その古い時代などから言い伝えられてきて、そのうち発音が変化して伝わったのだろう。

また、どこの者ともわからない人々だが、鳥銃や火繩銃など(67)の鑄造技術がある者が陸奥と出羽の境の深山に集まり、密鑄銭を作ったので、追放されたり捕縛されたりしたことがあつたのも、鑄銭部のなごりであろう。

### 【19】やばのはつひ (散飯の初飯)

禅宗僧侶が食事をする時は、まず散飯さばというものを取り分ける作法がある。一般に僧侶はみなすることである。アイヌが酒を飲む時、まずあらゆる神に酒を手向けた後で飲み、唱い、騒ぐのが古い時代の風習である。散飯は初啖さきはめの意味だろうか。《万葉集》に、「うりはめば」「くりはめば」などと詠まれている。「食む」というのは古い言葉である。

《倭訓栞》には次のように書いている。

さば。《禁秘抄》(68)に「さばを取り、箸を立て、給仕の者は御箸を取り、折つて出す」と書いている。《左経記》(69)に散飯をよんでいる。また、「さんば」ともいう。

度会氏わたらい(70)の説では「豊受大神宮御饌殿の中に散飯の壺がある。小箱を置いて朝夕御供への散飯を入れる」という。天皇には御取初おとりぞめと称するともいう。飲食の祖神を祀る。御飯のさばは天兒あまがつ(71)のかわらけ(素焼の器)に取りうつすという。また、散花と書くのは、御飯の上の龜足きそく(72)を取りのぞくからであるともいう。《論語》郷党篇に「君主に侍つて陪食する時は、君主が食前のお供えを祭る間に、まず毒見のために食べ始める」とあり、注に「祭は、はじめに飲食をした祖先への感謝として祭ることを意味する」とある。一説に、「生飯」と書いて宋音で「さば」という。これは仏教徒の儀礼である。《仏祖統記》(73)に「仏が広野の鬼神鬼子等のために供え物を施し、多くの僧侶が出生すいせん(74)の食を継承したのがこの由来である」と書いている。「鬼とり」というのは、ここから出た言葉であるという。《枕草子》に「カラスが齋ときのさばを喰う」のを「さわがしいもの」の中に入れている。

とても古い習慣なのだろう。

【20】おいさみをのむそみかくだ(おいさみを飲む修験者)

山伏のような者が五六人、杉林を見て「おいさみがある」といい、みな入って酒を飲んでた。羽黒参りであろう。羽黒山、月山、湯殿山を巡拝する修行者は、飯を「やわら」、汁を「おはしり」、飯の湯を「こくうぞう」、火を「おたすけ」、酒を「おいさみ」という。これを羽黒の忌み言葉という。大峰入(75)の時に酒を「胡麻酢」、また五鬼助(76)の酒を「藪潜り」という。

【21】ふくひきのもちひ(福引の餅)

出羽や陸奥などでは、その日についた餅を火であぶって食べる事はけつしてしない。なぜかという、人を火葬して遺骨を拾う時に、二人一組で桑(わら)を引手が切つて火に打ち入れる習わしがあるので、その日ついた餅をあぶり餅とはしないのである。《塩囊鈔》(77)三巻の年始賞餅のくだりに、「二人向かい合い、餅を引つぱりあつて分けるのを福引といいならわしているのも、いわれのあることではないか。また、宮中で餅の名を福生菓という」とある。生まれ故郷の習わしでも福引というのを忌み嫌う。信濃国牛伏寺の正月の御供え餅を福出(ふで)という。また、出羽でもそういう。

【22】かめの鳴く夕ぐれ

三河国の渋川というところで、田植えの時、夕方不思議な声かして「鳴いているのはどんな鳥だろう」というと、歌い連れ立って帰ってきた田植え女がそれを聞いて「亀が鳴いているんですよ」と教えてくれた。「本当に亀が鳴いているんですか」と尋ねると、「泥亀が水から首をもたげて鳴いているんですよ」という。なるほど、それが「すっぽんすぽん」と鳴く声から「すっぽん」という名前がついたのだろう。《新撰六帖》(78)に、〈対岸の遠くの田中の夕闇に、なんだろうと聞くと、亀が鳴いているのである〉という歌がある。今はじめてこの歌の意味がわかった。泥亀を詠んだ歌なのである。

また《閑田耕筆》物の部には次のようにある。

亀の看経(79)というのが世に知られている。私はまさにそれを聞いた。本当に程よい調子の、硬い鐘を打つような音で、はじめは雨だれ拍子で、次第に早く、俗にいう責念仏(80)のようになる。また、すっぽんを「すっぽん」とよぶのも、その鳴く声のためである。これは遠くで「すっぽんすっぽん」と鳴く。みな夜になって聞く。

本当にそのとおりである。ますます歌の意味も確かである。また、泥に頭をつっこみながら鳴くという。三河、尾張の方言ですっぽんを鼈かめというのは、泥突どろつきの意味だろうか。

### 【23】星の葉ぐさ、しのぶぐさ

《閑田耕筆》物の部の巻に、次のように書いてある。

また同じ人の話「村井古巖の話をしてる」に、「忍草(81)の形は今川了俊の《言塵集》(82)に図が出てる。これは賀茂真淵の説と同じように、風蘭の形で裏に星があるものである。忍摺り(83)の狩衣というのは、小さな水玉のような形を摺って、その忍草の裏の星になぞらえたものだろうか。そう考えるのは、《鷹経弁疑論》(84)に『鷹の尾にし(85)の斑(86)』というものがあ、これは水玉の小さいものだとあるからで、このことから推し測ればわかる」という。

千賀の塩釜の藤塚式部知章(87)の《しのぶ考》という書があるという。それについては知らないが、忍草の屋遊金星草などという漢名は一般にみな知っているが、これをどうして忍草というのか、誰もまだわからない。それを考えると、しのぶ

は星の葉ぐさの呼び名の変化したものではないか。あるいは、星生草(88)が略された言葉であろうと思われる。

### 【24】水行川のくもで

前の章段と同じ書の同じ巻に、次のように書いてある。

《伊勢物語》(89)八橋の段に、「水の流れを塞せぎ止めた川が蜘蛛手なので「現在の本には「水行みずいく」とある。真名本に「水塞みずせく」とあるものが正しいという」とあるが、賀茂氏の解釈では「蜘蛛の手が開くように左右に支流を作って田に水を入れるために使う。だから橋を八つ渡している」という。その図も載せている云々。

これは蜘蛛手のことについてもつばら論じているように受け取れる。私は尾張で「水行く川の」と書いた巻物を解いて屏風に貼り付けてあるのを見た。これは水を引くということを「水いく」と書き誤って、それをまた文字で「水行川」と書いたものを板本としたものだろうか。それで「水行く川」の説がとても多い。

川の本流から用水を数多く引いて田面に水を落とす。その川に小さな橋を八つばかり並べて掛けたものが、出羽や陸奥

などにとりわけ多い。それを堰という。「水引く」というのは現在もっぱらいつていることである。中国の書にも「清流に勢いの激しい早瀬があり、左右に光や色がうつりあう。引いて流觴曲水<sup>(87)</sup>をなす」と書いている。これも水を引くということをいつている。

同じく《閑田耕筆》の同じくだりに次のようにある。

今、燈台の蜘蛛手というものは、十文字を斜めにしたものである。これも古くからいうとのこと。同じく村井古庵の考察には次のようにある。

「初瀬寺の縁起に、ろの字を上下に置いて歌を詠んだ者に娘を与えるという人があった。その娘を思い慕って観世音にお祈り申し上げたところ、夢のお告げをいただいて詠んだ歌として、へろくろ（滑車）を引く、互い違いの綱が行き帰りする蜘蛛手を見ると、思いにふけるこの頃である」とあるのも、先に述べた十文字が斜めであることをいつているのだろう。また《平家物語》の大納言成親卿を閉じこめたところに小松殿が訪れたくだりに『くもでに結んだ中に閉じこめて』とある。これは材木を交差させて囲ったものなので同様である」。畑橋州にもまた説があり、次のようにいつている。

「くもでは組む手の意味である。また、雲をくもというのも、曇るという意味で、曇るは籠ることである。意味は別だが、言葉の前例はこういったものだ」。なるほど、面白い考察で、古庵の典拠と照らし合わせるとういだろう。

私が考えるに、くもではへあちこちに行き交いながら生える谷の梢をくもでにして、まだ散っていない花を踏むような木曾の懸け橋である<sup>(88)</sup>とも歌われている。

## 〔25〕くずばな、くずのうを（葛花、葛の魚）

大和国の吉野葛といつて、葛粉が有名なものは、古い時代、国栖人<sup>(89)</sup>の家で作つて献上したので、その草をくず、くずの葉、くずかずらともいうからだろうか。また「吉野三尺<sup>(90)</sup>」といつて、初秋の頃の鮎を国栖<sup>すず</sup>の魚とよぶという。また《日東魚譜》<sup>(91)</sup>の鮎のくだりに、「国栖の魚 吉野の方言、云々」と書いている。どこでも鮎としか思つていない人が多いが、それは川沙魚<sup>はせ</sup>という魚である。この魚は、出羽国秋田の八郎瀉でとても多く獲れる魚である。方言では「ぐず」という。それは国栖が訛つてそうよばれるようになったのだからか。

## 【26】 せりのい

袖の浦は、出羽国由利郡吹浦の呼び名であるという。また、陸奥に衣川がある。その流れの末に落ちる海を袖の湊、また袖の渡りという。また同じ国、石巻の住吉神社の入り江の渡りのことも、袖の渡りという。出羽国福浦を袖の浦というのは、息長帯比売命（おきなびたひひめのみこと）のいわれがあつて、そうよぶ。また、象潟では袖掛の松などという名前も聞く。この袖の浦のいわれをもつて、秋田の土崎湊を御裳（おも）になぞらえて裳裾の浦とし、御裳浦（おものうら）とした。また御物川の湊なので面の川などとも書いている。

寒風山も元は坡欠山（はまかけ）といつていたが、風流な人々が寒風（さむかぜ）（伊勢の地名と同じ）山として俳諧や漢詩を作り、和歌に詠んだので、その名が雅に聞こえるようになったのである。また、元亀、天正の頃は、どこでも連歌が流行つて、秋田城介実季公（93）の世に、人々はもつぱら和歌や連歌を好んで風流なことに打ち込み、寒風山も男鹿の浦山なので妻恋山（つまこい）と名づけ、また、男鹿の琴川の末が流れ入る八郎潟を琴の海とした。それは近江国の琵琶湖にこじつけたものだが、湖の形は琴に似ている。武蔵の晚得翁（ばんとくおきな）が「淡海にて五郎よく聞け時鳥」という句を作つたが、「近江は源五郎鮎、出羽は八郎鮎」と

いうことわざに思い当たつたのだろう。

また、袖という名のある場所は世の中にとっても多い。秋田の山賤（やまがら）（95）たちは、外（そと）ということをもつぱら「そで」という。出羽陸奥とも、山里などに外山（そとやま）、外崎（そとさき）、外沢（そとさわ）という地名がととも多い。袖の浦も袖の渡りも袖の湊も、元は外（そと）から来た言葉なのだろう。遠い筑紫国にも袖といふところがある。菅原道真公が左遷の際乗船された船も筑紫国博多に到着し、道真公は袖の湊でお降りになつたという。この袖の湊も外（そと）の意味があるのだろうか。

## 【27】 似たる名ごころ

出羽の銅山を阿仁という。中国の金山に銅仁といふところがある。それは《天工開物》（てんこうかいぶつ）（96）に記載がある。また、出羽の八郎潟の近くに雄琴川（男鹿の琴の意味である。今は琴川という）がある。近江の琵琶湖のあたりに雄琴山（志賀郡に雄琴神社がある。《江源武鑑》（かうげんぶかん）（97）に詳しく載つている）といふ山がある。互いによく似ている。

## 【28】 うつりや

陸奥の南部、田名部の里のあたりで、親しく仲の良い人たちはもつぱら、互いに「いとこや」「いとこよ」と呼びあう。

半分戯れのように聞こえるが、それはとりわけ古風な言葉である。

《古事記伝》十一卷「三十九丁」に、次のようにある。

「伊刀古夜<sup>いとこよ</sup>」は妹の枕詞であると理解できる。「いとこ」と人を愛情深く親しげに呼ぶ名で、「愛おしい子」という意味である。「古の字は子の仮名に用いる。この記述が例である」。《万葉集》十六「二十九丁」に「いとこなせの君（親愛なるあなたよ）じつとしていて、さてどこかへ行く」といつては、云々」とある。

なるほど、「いとこ」とここでいっているということは、本当に古い言葉なのだと思うれる。

### 【29】たまよろひ

私はまだ子どもの頃、やさかにの曲玉<sup>まがたま</sup>（98）というものが多く掘り出される場所があると聞いた。そこで、富士山を見に行った折に、帰りは甲斐が嶺を見ようとその国に行き着き、小河原の加賀美信濃守源光章の翁を訪ねて、この曲玉のことを尋ねた。すると「その昔、玉よろひといって、死に装束に糸でつないで玉をかけたことがある。土中で死体が土となっ

て、かけて飾り整えた玉だけが残ったものである。古い書にも書いてある」といわれた。もつともな道理であろう。多くは古墳の中から出るものである。

《名物六帖》<sup>めいぶつろくしゅう</sup>（99）器財箋三卷葬祭祀のくだりに、次のようにある。

たまのこもたまのよろひ、  
珠襦玉柙。《漢書》<sup>（100）</sup>董賢伝に次のようにある。

「東園の棺桶、珠襦玉柙<sup>（101）</sup>を賢に与え、不足なものはひとつもなかった。註・顔師古がいうには、珠襦は珠で糸を作り、よろいのようにこれを連ねて縫うために、黄金を糸とする。腰より下は、玉を柙として足にいたるまで同様に縫うために、黄金を糸とする」

思うに、《日本書紀》孝徳天皇二年、詔の文書に「私はこの墳丘を開墾できない土地に造って、天皇の代が次々と代わった後には、その場所を知られないようにしたい。死者の口に珠玉をふくます習慣をやめよ。珠襦玉柙を施すな。それら諸々は愚俗な人間のすることである」という。

日本では昔、身分の高い人を葬るのに、珠襦玉柙を用いた。それから長く時が流れている。百余年前、丹州（丹波国、または丹後国）のある山村で古墳を掘り起こした

ところ、石で造った棺の外わくが出てきた。中に立派な体格の男性の遺体があり、全身に玉衣を思わせるよろいをまとったような姿がなお保たれていた。人は珠を取って腰佩の庄口（102）とした。私はその一粒を見て取った。細い筆の管のような形だった。長さは一寸にみたく、深緑色で、縄を通す孔がある。思うに、いにしえ、身分の高い人の庇蓋（103）は珠襦であった。また思うに、霍光伝に次のようにある。

「大后が昌邑王を廃され、珠襦を着て盛装し、武がとばりの中に座った。侍る者数百人。皆武器を持って、天子の護衛兵や武士が階段の下に侍立し、戟をずらりと並べた。註・晋灼がいうには、珠を貫き、衣服の形にした、今の革製の衣服のようなものである」

おそらく珠襦は元々、葬具専用ではなかった。身分の高い人がこれを盛装とし、不慮の場合に備えたことにより、こうして葬ったのである、云々。

珠襦玉柙は葬礼の飾り付けだけではないに違いない。かの丹波国から掘り出された深緑色の玉は、『万葉集』に「竹玉（104）をたくさん貫き垂らし」と詠まれている。それを竹玉というのが正式なのであろう。今も竹を切って管にして、縄で

貫いて、神事に用いている。古い時代でも管玉（105）は豊富にはなかったのだらう。それで仮に竹玉を貫いて太刀にも装束にもおかけになった。昔の様子を思い浮かべることができるともいえる。真玉（106）、竹玉、勾玉、さまざま玉があつたのだらう。

遠江国新居（古名は浜名）から八町行くと中の合村がある。そこに飛神社社があり、この社に勾玉を飛神としてお祀り申し上げている。あちこちから納められたものが四五升ほどもあるだろうという。

私が子どもの時、秋葉参り（107）のついでに飛神社社にお参りした。神主の渡辺なにがしという人が、紙包みを二つ、社から取り出して見せてくれた。これは飛神と申し上げるもので、飛行をなさる。祭りの日にこれを数えると多い年がある。また、とても少なくなっていくことがある。そんなわけです。飛神と申し上げるといふ。蚕の幼虫のような曲がった形をしたもの、また、茄子や瓢箪の形をしたものが多い。前述した緑色の管玉はまれである。その中にとっても大きいものがある。それを大御前（おおみまへ）と申し上げて、神主によると、この御神はけつしてあちこち飛び回られることはないという。勾玉というものであることはまったく知らないのか、それとも知っていたのか、それは聞かなかつた。

これを考えるに、『金葉集』（108）だったか、「石に寄せる恋」

という題で六条の詠んだ歌がある。へ逢うことがなくなってしまう、飛ぶ石神のようなつれなきに、私の心さえ動いてしまふよ。違う土地にも飛石神社があるのだろうか。あるいは、この飛神社の飛神のことをいつたのだろうか。

私が昔飛神社で見たのは  大体この図のような形だった。その色はさまざまに見えた。私が持っていたのも、他の人が持っていたのも、江戸で出版された本に載せてあるのを見ただけでも、しっかりと見ておらずに細がわからないので、ここには記さない。

### 【30】をへら

出羽国や陸奥国で、客を招いて料理をふるまい、食事が進むにおよんでそれらを食べ尽くし、料理が不足してしまうことを「おへら」という。また「へらかづく」ともいい、「へらまい」ともいう。食事のへらの意だろうか。今、俗にいうしゃもじのことで、飯匙いりがい <sup>(10)</sup>の方言である。

《倭訓栞》には、次のようにある。

おへら。《万葉集》に小集樂 <sup>(11)</sup> が詠まれている。顕照の説では、田舎者が外で集まって遊ぶことをいう。世俗の言葉で、ものを褒める様子が大げさでいやな感じであ

ることを「おへらいか」などというのは、この遊びをいうことからきたのだろうか。

また、その付近で人を空着めすることを「もへらかす」といい、「もへを背負わせる」などというのは、「おへらい」の類だろう。

### 【31】うすだたみ

阿仁、比内のあたりで、薄縁うすべりの裏に稲わらで編んだむしろを付けたものを薄畳うすだたみ。なから畳、半畳はんだたみなどといい、普通の畳を厚畳ともつばらいう。

《倭訓栞》の薄畳のくだりには、次のようにある。

大嘗会式 <sup>(12)</sup>に薄畳が載っている。また、うすべりという。薄縁の意味である。《三議一統》に記載がある。古い時代の畳はこれであろう。《韓非子》 <sup>(13)</sup>に「禹王は真孤まこもの敷物をつくり、縁を赤くした」とあるので、これが縁に飾りをつけたはじまりであろうという。涼畳というのもこれである。

ここに薄畳が載っているのは、とても古い言葉だからだろう。

- (1) 筑波山の和歌 新古今和歌集「筑波山端山茂山繁けれど思ひいるにはさはらざりけり」筑波山は人里近い山木の茂った山と山が多いが、心に思いを抱きながら分け入るのに障害となることはない(源重之)。
- (2) 帷屋 序文執筆当時、真澄が居住していた久保田の家屋を称した屋号。
- (3) 旗指物 鎧の後胴の受筒に差し込む棹につけた小旗。
- (4) 左義長 正月に行われる火祭の行事。
- (5) 清火 不浄を清めるため、火打ち石で打ち出す火。
- (6) 木貝 かまくら行事で用いる木製の法螺貝。
- (7) 唱門師 人家の門に立って金鼓を打ち、ささらをすつて経文を唱え、物請いをした芸能者。
- (8) 金鼓 金属製の打楽器。
- (9) 古事記伝 《古事記》の注釈書。本居宣長著。
- (10) 統紀 《統日本紀》。《日本書紀》につぐ官撰国史。
- (11) 神祇官 律令制で神祇の祭祀を司る官庁。
- (12) 庭火御竈 天皇の平常の食事に用いる竈の神。
- (13) 大膳職式 律令制で、天皇の食事など宮中用の食料関連業務を担当した役所の施行細則。
- (14) 江家次第 平安後期の有職故実書。大江匡房著。
- (15) 四方拜 元旦に行われる宮中行事。天地四方を拜して年災をはらい、豊作を祈る儀式。
- (16) 禰宜 昔の神職の一つ。神主の下、祝の上の位。
- (17) 竹堂公 佐竹氏第十二代当主佐竹義人。室町時代の武将、大名。
- (18) 貞観府 貞観年代に定められた施行細則。
- (19) 谷川土清 江戸後期の国語辞書《倭訓栞》の編者。
- (20) はたはた バッタの異称。
- (21) 浜名の橋 浜名湖から遠州灘に注ぐ浜名川にかかっていた橋。歌枕。明応七年(一四九八)、地震のため浜名湖が海つづきになり、橋はなくなった。
- (22) 倭名抄 《和名類聚抄》の略。平安時代の漢和辞書。
- (23) 倭訓栞 註(19) 参照。
- (24) 後撰和歌集 平安中期の、二番目の勅撰和歌集。
- (25) 顕昭 平安末・鎌倉初期の歌人、歌学者。
- (26) 源五郎 源五郎鮎。琵琶湖原産の大形のフナ。
- (27) 不知火 九州の八代海や有明海に夜半点々とみられる怪火。
- (28) 江戸砂子温故名跡誌 江戸後期の絵入り地誌。菊岡沾涼著。

- (29) 恩荷 飛鳥時代の蝦夷の首長。阿倍比羅夫の遠征によりあきた阿田(秋田)・淳代めしろ(能代)の蝦夷が降伏させられたとき、朝廷につかえることをちかひ、淳代・津軽二郡の郡領にさだめられたという。「おんが」ともよむ。
- (30) 遠江も国の名のみと： 遠江という名称は「遠い淡海(湖)」に由来する。註(21) 参照。
- (31) 著聞集 《古今著聞集》の略。鎌倉中期の説話集。
- (32) 秋田左衛門尉義盛 正しくは和田左衛門尉義盛。和田義盛は鎌倉前期の武将。「秋田」の表記があるために眞澄が引用した部分であったが、参考にした本に誤りがあったか、眞澄が誤認したと思われる。
- (33) 脛巾 旅行・外出時にすねに巻きつけ、紐で結んで、脚を保護し動きやすくしたものの。
- (34) 閑田耕筆 伴蒿ばんこう撰著。江戸後期の随筆集。
- (35) 大和路の記 貝原益軒かいげん著の《大和廻りの記》か。
- (36) 樺色 赤みを帯びた黄色。
- (37) 墓目 鏑矢の一種。笠懸かさかけ・犬追物などに用いた。射る物に傷をつけないよう、鏑をつけていない。
- (38) 三議一統 武家の有職故実書。室町時代に小笠原長秀らによって編纂された。
- (39) 淋瀝 尿が出にくくなったり、排尿痛が起きたりする病気。
- (40) 甲斐が嶺 甲斐国(山梨県)の高山。富士山または赤石山脈の支脈をいう。
- (41) 御湯殿記 《御湯殿上日記》。清涼殿の御湯殿の上の間に奉仕する代々の女官がつけた仮名書きの日記。
- (42) この歌の褒美として： 南部家に伝わる硯の由来としては諸説あるが、時の天皇に歌を誉められ、硯を賜ったとされるエピソードについては、いずれも十二代南部政行が賜ったものであり、硯の名前も「松陰」ではなく「松風」である。
- (43) 年浪草 《華実年浪草》の略。江戸後期の季寄せ(歳時記の簡略なもの)。鶴川鹿文著。
- (44) 木造初め 新年に大工が初めて仕事をする日の儀式。
- (45) 季吟 北村季吟。江戸前期の古典学者、俳人、歌人。
- (46) 踏歌の節会 天皇が紫宸殿で踏歌を御覧になり、この間、五位以上の者を召して宴を賜った宮中の年中行事。
- (47) 篋せう纏ま輪 江戸後期に書かれた俳諧辞書。千梅著。
- (48) 無季 俳句で季語を含まないこと。
- (49) 岷江人楚 慶長三年に成立した《源氏物語》の注釈書。中院なかのいん通勝とくしょう著。
- (50) 指南抄 室町後期の連歌師、宗祇そうぎの著した連歌指南書。

- (51) 素袍 ひたれ 直垂の一種。布地は麻を用い、胸紐、菊綴じ（縫合せ目に綴じつけた飾り）には革を使う。
- (52) 大江定基 平安中期の僧、寂照の俗名。文章博士もじじょうはかせとなったが、三河守のときに任国で妻を亡くし、出家。入宋し、杭州で没した。
- (53) 仏法東漸 仏教がインドから中国、朝鮮半島、日本としだいに東方に伝わったこと。
- (54) 鳥追い 農村行事の一つ。正月十四日の晩と十五日の朝との二回、害鳥を追い払う歌をうたい、若者らがささら、槌、杓子、棒などを打って家々を回る。
- (55) 水干 かりぎぬ 狩衣の一種。胸や袖の縫い目に菊綴じをつけ、裾を袴の中に入れて着る。
- (56) 直平頭巾 目だけを出して、顔をかくす頭巾。
- (57) 屠児 古代・中世、鷹や獵犬などのえさにするため、牛、馬などの屠殺をおこなう人、また、牛、馬を屠殺して、その皮や肉を売る人をいった。
- (58) 花山少将忠長卿 江戸時代前期の公家、花山院忠長。宮中で起こった廷臣と女官の密通事件（猪熊事件）により、蝦夷地へと配流される。松前に京文化が伝わる契機を作ったとされる。
- (59) 俳諧新季寄 江戸後期の俳諧書。菅沼奇淵編。
- (60) 覺替 参詣人が木製の覺を替え合う神事。前年の凶をうそにしてその年の吉に取り替える意という。
- (61) 安倍貞任 平安後期の武將。父頼時とともに朝廷にそむき、源頼義、義家の追討を受け、敗死。
- (62) 時頼入道 北条時頼。鎌倉幕府第五代執権。出家後、諸国を回り民政を視察したという伝説がある。
- (63) 金光上人 鎌倉時代前期の僧。浄土宗祖法然の門弟の一人で、東北に専修念仏せんじゆねんぶつを伝えた。
- (64) 浪岡物語 津軽の浪岡の故事を記したとみられる真澄の著作。未発見。
- (65) 東遊記 江戸後期の紀行。橘南谿著。
- (66) 田文や水帳 田地の面積およびその領有関係などを明細に記載した田籍簿。
- (67) 鳥銃や火繩銃など 全集の翻刻には「たんこやたねこそうなど」とある。語義不詳のため、写本の画像を参考にして解釈を検討したが、判明せず。ここでは仮に「団子火矢（鳥銃）、種子島（火繩銃）など」という読みをあげておく。
- (68) 禁秘抄 鎌倉時代の有職故実書。順徳天皇著。宮中の行事・故実・制度などを漢文で解説した。
- (69) 左経記 平安時代中期の貴族・源経頼の日記。

- (70) 度会氏 伊勢神宮外宮(豊受大神宮)の祠官の家。
- (71) 天児 幼児のそばに置き、凶事を移し負わせる形代かたしろの役をさせる人形。厄除け・魔除けとして使われた。平安時代に神事の祓に用いられたのがはじまりとされる。
- (72) 亀足 金箔、銀箔を紙に貼りつけて作り、食物の上にそえる飾りの花。
- (73) 仏祖統記 中国の南宋の僧志磐が撰した仏教史書。
- (74) 出生 生飯きば。食事の時、器から食物の少量を他の衆生のためにとりわけて施すこと。
- (75) 大峰入 修験者が大峰に入つて修行すること。大峰は奈良県吉野郡十津川の東の山脈で、修験道の根本霊場。
- (76) 五鬼助 役行者えんのぎょうじやに従つていた鬼の子孫といわれる。大峰山で修行する人々のための宿坊を営む。
- (77) 瑤囊抄 《塵添瑤囊抄》。室町時代末期に編纂された百科事典。
- (78) 新撰六帖 鎌倉時代中期の類題和歌集。
- (79) 看経 読経。
- (80) 責念仏 鉦かねを鳴らしながら高い声で急調子に繰り返す念仏。念仏の終わり頃に行う。
- (81) 忍草 シノブ、ノキシノブなどのシダ植物。
- (82) 言塵集 南北朝時代の武将・歌人、今川了俊著の歌学書。
- (83) 忍摺り 忍草の葉を布帛に摺りつけて染めたもの。
- (84) 鷹狩弁疑論 戦国時代の公卿、持明院基春著。鷹狩りの由緒や技術を書き記したもの。
- (85) しのぶの斑 忍摺りのようなまだら模様。
- (86) 伊勢物語 平安時代の歌物語。作者不明。
- (87) 流觴曲水 折れ曲がっている水の流れに杯を浮かべ、その杯が自分の前に流れてこないうちに詩を作ること。を競う風流の遊び。
- (88) あちこちに行き交いながら… 鎌倉後期の私撰和歌集《夫木和歌集》にある歌。
- (89) 国栖人 古代、大和の吉野川上流の山地にあつたという村落の住民。宮中の節会に参り、贄を献じ、笛を吹き、口鼓を打つて風俗歌を奏した。
- (90) 皿尺 一尺の大きな皿に載せるほどの丈という意か。
- (91) 日東魚譜 神田玄泉著。江戸後期の魚譜。日本で最初の魚類専門の図譜といわれる。
- (92) 息長帯比売命 神功皇后の名。
- (93) 秋田城介実季公 織豊・江戸時代前期の武将・大名。秋田(安東)実季さねすえ。天正の末ごろ出羽の秋田など三郡を領した。
- (94) 武蔵の晩得翁 佐藤晩得。江戸中期から後期の俳人。

秋田藩の江戸留守居役。

- (95) 山賤 山仕事を生業とする身分の低い人。
- (96) 天工開物 中国の産業技術書。明の宋応星著。
- (97) 江源武鑑 佐々木氏郷著とされる、近江守護六角氏の末期四代の雑史。現在では偽文書と評価されている。
- (98) やさかにの曲玉 大きな曲玉。一説に、多くの曲玉を一つの長い緒で貫き連ねたもの。
- (99) 名物六帖 江戸時代中期の百科事典風の編纂物。
- (100) 漢書 中国の歴史書。正史の一つ。
- (101) 珠襦玉柙 玉衣(王侯の遺体を覆う葬服)の上衣を珠襦、腰以下を玉柙と称した。
- (102) 腰佩の圧口 腰佩は腰部に装着した装身具。圧口はその帯留の意か。
- (103) 庇蓋 天蓋のことか。天蓋は仏具の名。棺などの上にかざす絹がさ。
- (104) 竹玉 細い竹を輪切りにして、緒を通したもの。神事に用いる。
- (105) 管玉 細い竹管状の玉。多数連ねて装身具とする。
- (106) 真玉 玉の美称。
- (107) 秋葉参り 静岡県浜松市にある秋葉神社への参詣。秋葉神社は火伏せの信仰と火祭りで有名。
- (108) 金葉集 《金葉和歌集》。平安後期の第五勅撰和歌集。
- (109) 飯匙 飯を器物に移し盛るための道具。しゃもじ。
- (110) 小集楽 ここでは「おへら」の読みとして例示されているが、現在は「おずめ」と読まれている。男女が橋のたもとに集まって行つた宴楽。万葉集の例は「あそび」と読む説もある。
- (111) 大嘗会式 大嘗祭の施行細則。大嘗祭は天皇が即位後最初に皇祖および天地すべての神々に新穀を供え、これを食べる儀式。
- (112) 韓非子 中国、戦国時代末の韓非を中心とする法家の著作を収めたもの。

通番	備考（「」内は文面の要約）
482	須藤春代「春のだいち」が生まれた経緯、盲教育の問題点に触れている。再掲『宮本常一著作集8』（未来社）61頁。
483	「日本の子供達」を別送した。貴兄のことも触れた。
484	「人間発掘（平凡社『人間の記録双書』のことか？）のSさんの原稿はよいが、世間に公表されるのはどうか。本当に読んでくれるのはいいが、ジャーナリズムは必ず穿鑿する。自分には感傷癖があるから、気の毒なことから目を背けてきたが、貴兄の実践力には感心する。お言葉の通り、原稿は返送する」
485	
486	「校長先生が特別扱いすると、他の生徒が不満を言っている。実行委員（何の？）を引き受けられないし、入会も見合わせたい」（詩集出版が重荷になっている）。「いろいろやることによって勉強の時間が取れない」（東京に進学するのは、レベルが違いすぎて不安だ）
487	
488	「君が静かにこの不遇の少女の暗く乱れた心を次々と解きほぐしていく過程は、固く閉ざされた常民の心の中からさまざまな心意現象を引き出す民俗採集家の素晴らしい技術を見るようだ」
489	「気の毒な人たちに対して、制度や設備を整えるような事ばかりでなく、片隅の見落とされてきた世界に光が当たるように専心されている内田さんに尊敬の念を抱いている」
490	盲人教育への関心から再び菅江真澄に取り組む心境が書かれている。付箋に「歩けない自分が方言や民俗調査をする資格があるかと自問し自信を失ったが、柳田先生の真澄観を更にきわめるべく、仰臥のままで真澄研究を進める決意をした」とある。
491	①～⑤を包む別紙に「東洋文庫『菅江真澄遊覧記』、当初の事情」とある。内容はF12-4-1-①にあり。
492	「昭和38年12月5日、酒井（平凡社）真澄出版二付、加藤一男（城南高校）共二」
493	内容はF12-4-1-③にあり。
494	「宮本常一と会った際、内田が今までの著作のみで終わったならば、重大な仕事を残したことになる。若い世代の人が興味を持って、私どもの仕事に携わる機会を作らないといけないと言っていた」
495	「東洋文庫が望む口語訳、文章の取捨について、ようやく見当がついた。宮本常一からの協力も快諾されたので、是非、東洋文庫に菅江真澄遊覧記を入れてほしい」
496	M兄＝宮本常一に宛てた型式を採りながら、須藤春代に詩を書かせて、出版を急いだ理由を書いている。
497	ペン書き自筆原稿が主。
498	ペン書き自筆原稿
499	ペン書き自筆原稿
500	「真澄や兼葭堂の図書を多く蔵している」として後藤捷一、医学史研究として中野操を紹介。
501	表紙に「内田武志様 東北にはこんな習俗がありますか。御教示下さい」。
502	沢田四郎作の各論考。沢田四郎作・小林梁「秋田県山本郡鶴形村谷地年中行事」（昭和19年、南満州の陸軍病院に入院した鶴形村出身小林忠之助からの聞き書きを、同室の小林梁が筆記したもの）。
503	内田武志への贈呈本。軍医として出征後、満州・シベリア抑留・帰国までの随筆。当地の民俗事項の記述もある。
504	渋沢敬三は昭和38年10月25日逝去。
505	「近畿民俗」第35号（昭和39年8月15日、渋沢敬三追悼号）を紹介。
506	久留勝署名コラム（当時大阪大学外科学教授、のち国立がんセンター総長）
507	
508	昭和38年に故渋沢敬三が朝日文化賞を受賞したのを記念して、胸像を贈った。その報告（昭和40年10月25日付）。
509	巻頭に、民具保存状態・アチックミュージアム全景写真・足半・同レントゲン写真あり。
510	
512	「渋沢敬三追悼号のこと」相談役会で追悼号を出すことが決まった。
511	内田武志による文章はない。164（通算）頁にアチック同人の写真がある。
513	
514	内田武志への贈呈本。

F		・ 枝番 通番		(資料形態)	資料名
19	2	1	①	482	(書写原稿) 宮本常一『日本の子供達・日本人の生活全集9』(岩崎書店)の45～47頁
19	2	1	②	483	(書簡なし、書写原稿) 宮本常一ハガキ、昭和32年8月8日付【F10-1-1-②に実物がある】
19	2	1	③	484	(書簡、書写原稿) 宮本常一書簡武志宛、昭和32年10月13日付
19	2	1	④	485	(書写原稿69枚) 内田ハチ「わたしどもの在り方」(『みちびき』第12・13合併号掲載、昭和33年1月)
19	3	1	①	486	(書写原稿) 須藤春代書簡4通…昭和30年2月19日・3月18日・3月末・9月14日
19	3	1	②	487	(書簡) 上記須藤春代書簡の実物(代筆)
19	4	1	①	488	(書写原稿) 磯貝勇「内田武志兄に」(『みちびき』第6号「春のだいち」特集号掲載、昭和30年6月)
19	4	1	②	489	(書写原稿) 宮本常一「内田さんに」(『みちびき』第6号「春のだいち」特集号掲載、昭和30年6月)
19	5	1		490	(伝記原稿8枚)「二人の師の終焉とわたくしの覚悟」
19	6	1	①	491	(書簡なし、書写原稿) 福岡多恵書簡内田ハチ宛、昭和57年2月18日付【F12-4-1-①に実物あり】
19	6	1	②	492	(書写原稿) 内田武志日記メモ、昭和38年12月5日
19	6	1	③	493	(書簡なし、書写原稿) 酒井春郎ハガキ、昭和38年12月11日消印【F12-4-1-③に実物あり】
19	6	1	④	494	(▲書簡書写原稿) 酒井春郎宛内田ハチ書簡、昭和39年2月3日付
19	6	1	⑤	495	(▲書簡書写原稿) 酒井春郎宛内田武志書簡、昭和39年2月5日付
19	7	1		496	(清書原稿) 内田武志「随想 ある日の手紙」(『みちびき』第4・5合併号掲載、昭和29年11月1日)
19	8	1		497	(未定稿)「我が国の身障者の問題」未分類の1
19	8	2		498	(未定稿)「我が国の身障者の問題」未分類の2
19	8	3		499	(未定稿)「我が国の身障者の問題」未分類の3
20	1	1		500	(書簡) 沢田四郎作ハガキ、昭和39年10月31日付【F13-1-3に後藤捷一からの書簡あり】
20	1	2	①	501	(別刷) 沢田四郎作「山花の葉まきとそれから」(『東京大学医学部小児科教室同窓会誌第14号』)
20	1	2	②	502	(雑誌)「近畿民俗」第27号、昭和36年2月25日
20	1	2	③	503	(書籍) 沢田四郎作『異国より帰って』(五倍子随筆第11号)、昭和24年11月11日発行
20	2	1	①	504	(別刷) 宮本馨太郎「渋沢先生の生涯と博物館」(『博物館研究』1964年(昭和39年)9月号)
20	2	1	②	505	(新聞切抜)「季節風 渋沢敬三さんの面目」(朝日新聞、昭和39年8月26日)
20	2	1	③	506	(新聞切抜)「きのうきょう 祭魚洞忌」(昭和39年産経新聞か)
20	2	2	①	507	(冊子) 笹村草家人「渋沢先生の像について」
20	2	2	②	508	(送付状) 上記渋沢敬三胸像製作についての冊子送付状
20	2	3		509	(冊子) アチックミュージアムノート第7『民具蒐集調査要目』(昭和11年6月30日発行、非売品)
20				510	(雑誌) 北隆館『文化史研究』第1輯、昭和22年9月15日、渋沢敬三「延喜式内の資料」収録
20				512	(雑誌)「民間伝承」No265、昭和39年8月号
20				511	(雑誌)「民間伝承」No266「渋沢敬三先生追悼特輯号」、昭和39年10月号
20				513	(雑誌)「近畿民俗」第35号、昭和39年8月15日…内容は渋沢敬三追悼号
20				514	(書籍) 近畿民俗学会「渋沢敬三先生」、昭和39年8月15日…上記雑誌にある渋沢敬三追悼の文章のみ抽出

通番	備考（「」内は文面の要約）
449	
450	栗田茂治「秋田の中世史（一）」、小林新「秋田地方の植物方言覚書」、発起人「奈良環之助・土合竹次郎・佐々木素雲・半田市太郎・柳谷直比古・内田武志」、第1回（前年12月）・第2回（1月）例会の報告。印刷は阿部騰写堂。
451	「山神ノ祭文」、「秋田蘭画を語る」（奈良磐松を囲んだ座談会・第2回例会）騰写版8頁。
452	秋田蘭画の所蔵者について伝える。「秋田文化」第2号に座談会「秋田蘭画を語る」を読んだの連絡。騰写版4頁。
453	奈良環之助「秋田城介実季公領地分限牒の村について」、内田武志「真澄雑筆」…項目「みつからぬ書、おがたのさと、父の名」。騰写版8頁。
454	北條忠雄「鶴鶴瑣談」、栗田茂治「秋田の中世史（二）」。騰写版が不評のために活字にしたとする。「現在会員数94名。大阪の沢田四郎作からは、鶴形村年中行事稿（60枚）が届いている」。活字10頁。
455	武藤鉄城「ヒスイ製品の原石問題」、船木勝男「大湯町巨石遺跡概観」、川越重昌「重要美術指定となった昭和町の観音堂の建築をみる」、半田市太郎「小川源兵衛〈御忠信書〉について」。活字38頁。
456	
457	
458	
459	
460	既知のものとは別種である。縦四つ折。【現在3種】
461	静岡県女子師範学校用紙【個人ごとにとままりがあるため、順番を崩さないこと】。静岡県男子師範学校のものか、1名分が混じる。
462	
463	用紙3枚は、裏に書かれた習俗報告のまとまり。
464	「立派な方言集の完成を祈っている」
465	春笠山は静岡県周智郡春野町（現、浜松市天竜区春野町）にある修験の山で、大光寺は地元では「お犬様」と呼ばれる。
466	
467	
468	
469	山住神社、三峯神社、御嶽山茶講、春笠山、（不明）、熊野三社
470	包紙のメモ書きに「(4) 会誌への寄稿」、「ヤメル 年譜（学界雑誌、著書）に載せる」とある。「民俗学」等への寄稿について概要を述べる。
471	原稿のメモ書きに「昭和7年5月の「静岡民友新聞」「星に関する県下の方言と俗信」の原稿とみる」とある。
472	タイトルは「(3) 実地採集から調査紙採集へ」で、原稿のメモ書きに鉛筆書きで「ヤメル 資料大事」とある。星の和名調査について等、具体的な事例を書いている。
473	「めぐみ」は昭和28年3月30日発行。
474	「春のだいち」は昭和29年11月5日刊行。
475	人間の記録双書・熊谷鉄太郎著「薄明の記憶—盲人教師の半生—」の紹介（16頁、盲人に関する優良図書）がある。
476	日本盲人福祉研究会が、伝統的な三療業（はり・きゅう・あんま）以外への就職拡大をめざして提言をまとめた。
477	「[盲人が感（カン）が良い] などという概括的なとらえ方が、盲人をハリ・アンマになるように方向づける。熊谷鉄太郎氏がさえもそうである」
478	
479	
480	
481	

F				枝番	通番	(資料形態)	資料名
18	3	1		449	(メモ書き)	《筆のまにまに》における引用書掲出 (B 5 ノート両面4枚、ハチの筆跡)	
18	4	1	①	450	(冊子)	「秋田文化」第1号、昭和23年2月1日発行 (1・2月合併号)、謄写版、編集兼発行人内田武志	
18	4	1	②	451	(冊子)	「秋田文化」第2号、昭和23年3月1日発行、謄写版、編集兼発行人内田武志	
18	4	1	③	452	(書簡)	武藤鉄城ハガキ、昭和22年12月23日付	
18	4	1	④	453	(冊子)	「秋田文化」第3号、昭和23年4月1日発行、謄写版、編集兼発行人内田武志、内田武志「真澄雑筆」	
18	4	1	⑤	454	(冊子)	「秋田文化」第4号、昭和23年6月20日発行、活字版、発行所秋田文化史研究会内田武志	
18	4	1	⑥	455	(冊子)	「秋田文化」第2巻第1号 (第5号)、昭和24年11月7日発行、冊子、編集兼発行人内田武志	
18	4	2	①	456	(冊子)	「秋田文化」第1号、昭和23年2月1日発行 (1・2月合併号)、謄写版、編集兼発行人内田武志	
18	4	2	②	457	(冊子)	「秋田文化」第2号、昭和23年3月1日発行、謄写版、編集兼発行人内田武志	
18	4	2	③	458	(冊子)	「秋田文化」第3号、昭和23年4月1日発行、謄写版、編集兼発行人内田武志、内田武志「真澄雑筆」	
18	4	2	④	459	(冊子)	「秋田文化」第4号、昭和23年6月20日発行、活字版、発行所秋田文化史研究会内田武志	
18	4	3		460	(チラシ)	菅江真澄研究会の趣旨 (謄写版、B 4 判表ウラに)	
18	5	1		461	(調査票)	静岡県お犬様習俗・地の神様調査の回答 (静岡県女子師範学校の生徒17名ほど)	
18	5	2	①	462	(調査票)	習俗調査票・謄写版 (書き込みあり) …お犬様習俗、地の神様、言い伝え	
18	5	2	②	463	(調査票)	習俗調査報告3枚、「静岡県女子師範学校」用紙	
18	5	2	③	464	(書簡、写真3枚)	中村協平書簡、昭和7年12月17日付、地の神関係写真	
18	5	2	④	465	(用紙)	御祈祷料受納書、昭和9年5月7日、春塾山執事、内田武志殿	
18	5	2	⑤	466	(書写用紙)	『周智郡誌』の抜粋・春塾山大光寺に関して (1枚)	
18	5	2	⑥	467	(書写用紙)	『周智郡誌』の抜粋・迷信其他に関して (1枚)	
18	5	2	⑦	468	(メモ書き)	お犬様関係の聞き書き、小さなメモ3枚	
18	5	3		469	(御札6枚)	犬・狼などの御札 (5枚)、熊野三社 (1枚)	
18	5	4		470	(伝記原稿3枚)	「会誌への寄稿」	
18	5	5		471	(原稿…400字詰他筆8枚)	「静岡県星の方言と俗信」	
18	5	6		472	(伝記原稿14枚、写真8枚)	「実地採集から調査紙採集へ」、大倉海岸漁村民俗探訪写真 (茶封筒入)	
19	1	1		473	(書写原稿)	内田武志「あとがき」(須藤春代詩集『めぐみ』)	
19	1	2		474	(書写原稿)	洪沢敬三「春代さんの心眼をひらいた内田君」(須藤春代詩集『春のだいち』)	
19	1	3	①	475	(冊子)	日本盲人福祉委員会「ニュースレター」、1960年 (昭和35年) 12月、【下記F19-1-4とF19-1-5の原稿が挟まっていた】	
19	1	3	②	476	(新聞切抜)	朝日新聞編集委員署名記事「盲人の就職」、1983年 (昭和58年) 8月22日	
19	1	4	①	477	(原稿10枚)	内田武志自筆 (ボールペン・ペン書き)、熊谷鉄太郎所感 (みちびき11号掲載) について	
19	1	4	②	478	(書きかけ原稿8枚)	内田武志自筆 (ボールペン・ペン書き)、盲人教育について、上記原稿の続きのよう	
19	1	5	①	479	(書写原稿)	文部省「盲ろう教育八十年史」【第五節鍼灸按摩術の教育】	
19	1	5	②	480	(書写原稿)	文部省「盲ろう教育八十年史」【第一章盲聾教育の胎動 第一節明治以前の盲聾教育】	
19	1	5	③	481	(書写原稿)	家永三郎「日本文化史」岩波新書	

通番	備考（「」内は文面の要約）
416	
417	【F-4-2-7にもあり】。『日本民俗誌大系』第11巻未刊資料Ⅱに収載された。
418	
419	「静岡女子師範学校の生徒を使つての間接的採集である。地神（屋敷神）信仰の研究の手がかり、問題点をしぼる手引きが得られる」。稲荷神との関係を指摘した内田武志の考察を評価している。
420	
421	
422	『日本民俗誌大系』全12巻の第10回配本・第12巻未刊資料（関東・東北）の発行時のもの。
423	堀内彦男・英子夫妻は、野尻抱影の遺稿・遺品を継承。大佛次郎記念館（横浜市港の見える丘公園）、会期1984.2.7～2.19の特別展。
424	こしの長浜（新潟県）、秋田のかりね（山形県）、小野のふるさと（秋田県）、そとが浜風（青森県）、けふのせば布、かすむ駒形（岩手県）、月の松島（宮城県）、真野のかやほら（福島県）を紹介。
425	
426	封筒メモ書きに「最後の書簡 必要」とある。「防波堤となつてくれていた渋沢敬三の逝去後、自分は仕事に追われてまとまったものを残していないが、内田君はあなたの協力を得て一筋の仕事を成し遂げた。逝去を聞いたのは11日だったが、体がポロポロのために入院しており、ようやく筆を執る気力が出たので手紙を書いている」
427	ハチ宛執筆依頼項目には「真澄遊覧記、20行」とある。武志宛の執筆依頼項目はなし。
428	項目「菅江真澄」の中に「菅江真澄遊覧記」を入れている。署名は、内田武志。
429	秋田大百科原稿用紙2枚。ハチの原稿に武志が加筆。
430	
431	
432	
433	北海道大百科原稿用紙2枚（成文に近い）、同紙3枚
434	岩崎美術社原稿用紙1枚
435	北海道大百科原稿用紙2枚
436	岩崎美術社原稿用紙1枚、北海道大百科原稿用紙2枚
437	北海道大百科原稿用紙2枚
438	執筆要項・原稿用紙を同封とある。「昭和54年5月原稿送」のメモ書きあり。
439	
440	全集別巻一での論がまとめられ、参考文献として記されている。熱田神宮神官粟田知周（ともかね）、河村秀根、丹羽嘉言、植田義方、臼太夫の家柄などが出てくる。
441	原稿としてのまとまりがある。包紙のメモ書きに「真澄資料蒐集が終わり、①妹ハチの上京、②柳田国男書簡、③図絵写真撮影、④原稿写真などを日本常民研究所に届ける。柳田に写真集4冊呈上す、⑤須藤春代さんの訪れ、⑥渋沢先生の来訪、⑦『菅江真澄未刊文献集』の刊行」とある。
442	未刊文献集は岡書院で組版をつくった。校正の依頼。
443	「続秋田のかりねという写本はなく、ハチの聞き違いである。年譜に同じ書名が出ていたのを不審に思っただけだ」
444	
445	
446	
447	
448	

F ・・・ 枝番 通番 (資料形態) 資料名				
17	1	2	②	416 (書簡) 鹿角市講演依頼文書、内田ハチ宛、昭和50年8月15日付、鹿角市社会教育課柳沢兌衛、鹿角市関係者名刺4枚
17	2	1	①	417 (雑誌切抜) 内田武志「地の神様」(「旅と伝説」昭和9年4月)
17	2	1	②	418 (コピー) 内田武志「地の神様」(「日本民俗誌大系」第11巻未刊資料Ⅱ)
17	2	1	③	419 (コピー)『日本民俗誌大系』第11巻未刊資料Ⅱ 解題 (内田武志「地の神様」に触れる)
17	2	1	④	420 (コピー)『日本民俗誌大系』第11巻未刊資料Ⅱ 著者略歴 (内田武志あり)
17	2	2	①	421 (冊子)『日本民俗誌大系』第11巻未刊資料Ⅱ 月報 (昭和51年6月)
17	2	2	②	422 (パンフレット) 角川書店新刊案内 (1976年5月)
17	3	1		423 (印刷書簡) 堀内彦男書簡、昭和59年2月29日付 (武志宛だが死去後)、大佛次郎記念会「特別展 野尻抱影大佛次郎兄弟展」パンフレット入り
17	4	1		424 (雑誌) 東北電力「家庭と電気」1978 (昭和53年) 5月号、内田武志 (菅江真澄研究所)「特集 菅江真澄みちのくの旅」収録
17	4	2		425 (冊子) 秋田県立博物館「菅江真澄と秋田」百五十年記念遺墨資料展目録、内田ハチ「菅江真澄の故郷と学問について」(昭和50年7月19日講演)
17	5	1		426 (書簡) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和55年12月27日付、武志死去に対するお悔やみ状
17	6	1	①	427 (印刷書簡、封筒なし) 秋田魁新報社「秋田大百科事典」執筆依頼、内田武志宛と内田ハチ宛、昭和55年1月付
17	6	1	②	428 (コピー) 秋田魁新報社「秋田大百科事典」のうち内田武志「菅江真澄、菅江真澄遊覧記」、発行は昭和56年9月1日
17	6	1	③	429 (原稿) 秋田魁新報社「秋田大百科事典」「菅江真澄遊覧記」
17	6	2	①	430 (印刷書簡、封筒なし) 北海道新聞社「北海道大百科事典」執筆依頼、昭和55年1月付、発行は昭和56年8月20日
17	6	2	②	431 (書簡) 北海道新聞社出版局ハガキ、原稿受領の連絡、昭和55年4月7日受領
17	6	2	③	432 (メモ書き2枚) 武志のメモ書き
17	6	3	①	433 (原稿) 北海道新聞社「北海道大百科事典」「菅江真澄」2種
17	6	3	②	434 (原稿) 北海道新聞社「北海道大百科事典」「えみしのさへき」
17	6	3	③	435 (原稿) 北海道新聞社「北海道大百科事典」「ひろめかり」
17	6	3	④	436 (原稿) 北海道新聞社「北海道大百科事典」「えぞのてぶり」
17	6	3	⑤	437 (原稿) 北海道新聞社「北海道大百科事典」「かたゐぶくる」(武志の校正が交じる)
17	7	1	①	438 (書簡、封筒なし) 岩波書店文学大辞典編集部田中得一書簡、昭和53年12月19日付、原稿執筆承諾のお礼
17	7	1	②	439 (書簡) 岩波書店文学大辞典編集部田中得一書簡、昭和54年5月25日付、原稿受領
17	7	1	③	440 (原稿コピー) 岩波書店文学大辞典「菅江真澄」、文学大辞典原稿用紙9枚
18	1	1	①	441 (伝記原稿66枚) 昭和23年から菅江真澄未刊文献集刊行まで【②～⑦は原稿に組み合わせられている】
18	1	1	②	442 (書簡、書写原稿) 岡書院ハガキ内田ハチ宛、昭和28年7月10日付
18	1	1	③	443 (書簡、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和23年9月14日付
18	1	1	④	444 (書簡、書写原稿) 柳田国男書簡内田ハチ宛、昭和29年2月16日付 【F9-1-3-①にも書写原稿あり】
18	1	1	⑤	445 (書簡、書写原稿) 柳田国男書簡内田ハチ宛、昭和29年2月20日付 (速達) 【F9-1-3-②にも書写原稿あり】
18	1	1	⑥	446 (パンフレット) 菅江真澄未刊文献集第1集の出版案内 【F9-1-1にもあり】
18	1	1	⑦	447 (書簡、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和29年12月6日付、菅江真澄未刊文献集二への所見 【F9-1-3-③にも書写原稿あり】
18	2	1		448 (書写原稿) 洪沢敬三「仰臥四十年の所産」(「菅江真澄未刊文献集一」序文)

通番	備考（「」内は文面の要約）
385	
386	「註は私個人の能力を超えるため、組織づくりが必要だ。出典の註に限るつもりで佐藤健一郎に頼んだ。菅江真澄を国文学者として中央に出したい。佐藤君は中世文学が専攻で、資料に関する考えがはっきりしている。組織や方法ではなく、人の問題とすれば、佐藤健一郎に辞めてもらうしかない」
387	「佐藤健一郎が出してきた第二巻の註は、註をなるべく簡潔にするという当初の編集方針から逸脱している。これは研究発表に類するもので、全集にはそぐわない。第二巻の註の大部分を削除したところ、佐藤氏に抗議された。校正刷に「註は宮本常一及び佐藤健一郎が担当した」と加筆したのは、どのような意図からであろうか。真澄を国文学に収めるには狭い」
388	
389	内田武志「真澄の贈り物」…植田義方への贈り物、旅の記事・写本…東北大学附属図書館の地誌写本、長沢詠子「三河の菅江真澄」、弘前市松野武雄「通信」、内田ハチ「白井秀超について」、鷲谷良一「真澄未発見本の探索余録」、弘前市土屋雅夫「通信」、長谷部哲郎「悪い出の人々」、井坂教「通信」。全集既刊第1巻～第3巻。菅江真澄研究所報告としては最終号となった。
390	今村義孝（秋田大学教授）、長沢詠子（愛知県岩倉市住）、森山泰太郎（青森県立青森北高校長）、内田ハチ（秋田大学助教授）
391	
392	「静岡県伝説昔話集」（昭和9年、谷嶋屋書店）を著書に入れている。静岡県方言集（昭和8年）から平凡社東洋文庫全5巻（昭和43年）まで。
393	「養子縁組おめでどう。常民文化研究所を5年間タダで置いてくれた学校に、もう2年間お礼奉公することになるだろう。アチックに関する本が三書房から出る予定である。早川孝太郎の全集などを出してあげたい。日本常民文化研究所が、まもなく旧渋沢邸の跡地一角にできるアパートに移る」
394	【F15-4-5-①に関連】。関敬吾は民俗学者で、専門は口承文芸・昔話研究。
395	「『静岡県昔話集』は『静岡県伝説昔話集』の中から伝説をいくつか選んで原稿をまとめた。また、『编者ノート』のコピーを別送にする。他の昔話集に合わせてほしい」（内田専用箋3枚）（ハチによる武志資料の収集）。【『编者ノート』はF16-2-1】
396	「編者である『静岡県伝説昔話集』を『全国昔話資料集成』に掲載させてほしい。候補には上がっていたが、どこに問い合わせたらいいかわからずに見送られていた。伝説の部分をどうするかは、改めて相談したい。『鹿角昔話集』についても考えたい」
397	「编者ノート」の書いてもらいたい内容を示す。「長沢様を通じて受け取った清書原稿を一旦返す」
398	「『静岡県昔話集』の原稿を返却する。刊行できなかったことを残念に思う」（ハチによる武志資料の収集）
399	
400	宮本馨太郎・胡桃沢勘司ら4人秋田来訪。7月3日午前内田武志宅、7月4日午後吉田三郎宅。
401	
402	江坂禪弥（考古学、慶応大学教授）の「脇本の埋没家屋…真澄の目に止まっていたことは興味深い」に傍線。他に、竹内利美（東北大学名誉教授）、臼田甚五郎（國學院大学教授）、内田武志。
403	封筒メモ書きに「重要」とある。書簡本文の終わり方は武志・ハチ宛。地誌篇第五巻解題の執筆に対する編集者としての意見。「今回の解題の書き方には問題がある。真澄研究全集であってはならず、編者や誌づけする人の主観的真澄像を語ってはいけない。この書き方では、別巻に予定している資料篇が消滅してしまう。引用文を推量を交えながらつなぎ合わせて論じたのは、資料とは言い難い」
404	
405	
406	
407	病状とその対処の経験を詳細に書いている。「このような会報は、病者の生活体験を聞いて、それを毎日の生活に取り入れ、少しでもよい暮らし方をする手がかりとする必要がある」
408	【F15-4-4、F15-4-5に関連】民俗学との出会い、投稿、鹿角方言集の出版までの経緯、静岡県昔話集の調査方法をまとめている。200字詰65枚。伝記原稿にもなっている。「はじめに、①鹿角の昔話、②静岡県の方言民俗調査と昔話調査、③静岡県昔話集その後」
409	
410	
411	本文原稿は、刊行本（内田文庫第1期にあり）とした。
412	
413	
414	
415	

F . . 枝番 通番 (資料形態) 資料名				
15	2	4	385	(写真8枚) 西谷未来社社長を迎えて、於秋田ニューグランドホテル、昭和46年4月8日、23人出席
15	3	1	① 386	(書簡) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和46年8月12日付、封筒メモ書き「佐藤健一郎氏に註をたのむ理由」
15	3	1	② 387	(▲書簡コピー) 宮本常一宛内田武志書簡、昭和46年8月18日付、上記書簡への返答、宮本常一が佐藤健一郎に訳註を頼んだ事への抗議
15	3	1	③ 388	(▲書簡下書き) 宮本常一宛内田武志書簡、昭和46年8月18日のメモ書き(簡条書き)
15	4	1	① 389	(冊子) 菅江真澄研究所報告No.4 (昭和47年7月20日発行)
15	4	1	② 390	(冊子) 菅江真澄全集月報3 (昭和47年7月)
15	4	2	① 391	(履歴書) 内田武志履歴書(3種…うち2種は自筆)、本籍地・著作など【※公開注意】
15	4	2	② 392	(ノート用紙2枚) 内田武志著書目録
15	4	3	393	(書簡) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和47年1月30日付
15	4	4	① 394	(書簡) 関敬吾書簡、昭和49年4月2日消印(速達)
15	4	4	② 395	(▲書簡) 関敬吾宛内田武志書簡、昭和50年9月5日付(速達)
15	4	5	① 396	(書簡) 田村信夫(岩崎美術社)書簡、昭和49年4月20日付
15	4	5	② 397	(書簡) 田村信夫書簡、昭和50年6月19日付
15	4	5	③ 398	(書簡) 田村信夫書簡内田ハチ宛、昭和56年9月10日付、静岡県昔話集原稿返却(刊行ならず)
15	5	1	399	(戸籍) 内田ハチ戸籍抄本【※非公開】
15	5	2	① 400	(書簡) 立教大学宮本研究室書簡内田武志・ハチ宛、昭和48年6月27日付
15	5	2	② 401	(書簡) 立教大学宮本研究室書簡、(礼状) 昭和48年7月13日付、(写真送付状) 昭和48年7月17日付
15	5	3	402	(冊子) 菅江真澄全集月報5(第9巻)(昭和48年7月)
16	1	1	403	(書簡) 小箕俊介(未来社)書簡、昭和50年7月3日付(速達)
16	1	2	① 404	(書簡) 竹内敦夫(国書刊行会)書簡、出版契約書(鹿角方言集)、昭和50年2月20日付(速達)
16	1	2	② 405	(用紙)「鹿角方言集」国書刊行会からの印税支払い明細、昭和50年分
16	1	2	③ 406	(パンフレット) 国書刊行会出版図書案内一地域民俗・方言
16	1	3	407	(原稿19枚…150字詰・自筆) 内田武志「思うこと」、昭和50年1月2日65歳、(未発表) 血友病会誌への投稿
16	2	1	408	(清書原稿コピー)…内容は伝記原稿になっている 静岡県昔話集・編者ノート(岩崎美術社から刊行予定だったが刊行ならず、未発表)
16	2	2	409	(自筆原稿コピー) 上記と同じ
16	2	3	410	(原稿…用紙10枚・自筆) 上記の例言など
16	2	4	411	(原稿…用紙・自筆) 上記の本文補遺
17	1	1	① 412	(別刷) 内田ハチ「菅江真澄と鹿角」(『上津野』第1号)、昭和50年8月23日講演
17	1	1	② 413	(書簡)『上津野』第1号掲載依頼、内田ハチ宛、昭和50年12月2日付、鹿角市文化財保護協会似鳥清
17	1	1	③ 414	(書簡、封筒なし)『上津野』第1号送り状、内田ハチ宛、昭和51年2月22日付、鹿角市社会教育課柳沢允衛
17	1	2	① 415	(冊子) 鹿角市文化財保護協会会員名簿(設立時)

通番	備考（「」内は文面の要約）
353	伊澤慶治に「筆のまにまに」原稿の所在を確認した返事か？ 近いうちに深澤家を訪ねるとしている。封筒メモ書き（電話での内容を後でメモしたものでしょう）に、「昭和34年、『小野寺盛衰記』を深澤家で見せてもらったときに原稿を見た。天理図書館に真澄の（原＝消去）本があり驚いた」とある。
354	「母は10年前に他界。伊澤慶治を通じて依頼のあった『菅江真澄原稿』については見つからなかった。多市の逝去後、母がひとりで守ってきたので、後の代に引き継ぎ守ってもらいたい」
355	「真澄の全集、今秋刊行」[病身でありながら真澄を追跡している内田氏の努力に、民俗学者宮本常一氏は以前から手紙で激励し、今回も出版社を捜して、全集の名で未来社から出すことに決めた。いわば菅江真澄研究の集大成である]「約三千五百枚のフィルムを作成する予定である」
356	裏に「昭和45年7月 辻兵吉郎」とあり。
357	東洋文庫の反響。「原文を読みたいという読者からの希望は、随筆集ではなく日記だったようだが、それでも考古学者などから反響があった。全集のための啓蒙書を出し、全集の刊行が間もなく始まる」
358	他に、吉田三郎「民具の消滅と残存―秋田県男鹿地方における―」、宮本常一（武蔵野美術大学教授）「民具文献紹介」。
359	日本常民文化研究所は、1972年には港区三田のマンション、1982年に神奈川大学に移る。
360	
361	
362	
363	「注文のあった『アイヌ語辞典』（人間篇、動物篇）を送る」。祭泉洞用箋。
364	「吉田三郎、渡辺小勝にも原稿執筆を依頼している」
365	上記執筆についての連絡
366	図版について、内田武志から写真掲載にしてほしいとの希望があったことへの返事。「冊子の体裁上写真掲載は難しいため、図版トレースをした。頁が取れる『民具論集』4冊に執筆をお願いできないか」
367	授与通知・贈呈式要項・受賞者一覧。贈呈式は、昭和46年1月18日仙台ホテル。受賞件名「菅江真澄の業績を中心とする東北庶民文化の研究」民俗学者内田武志。財団法人河北文化事業団。
368	
369	河北文化賞受賞について。
370	記念誌に内田武志の簡単な紹介がある。それにまで訂正を入れているのは、ハチの厳密さであろう。
371	
372	儀礼的な通知
373	全集編纂者の一人にお願いしていた。『菅江真澄』一冊を携えての秋田への帰郷、未刊文献集出版までの経緯、自筆本が辻家に入るまでのこと。奈良環之助逝去は、昭和45年11月16日。全集月報1執筆は、他に、桜田勝徳（白梅学園教授）、田村岩雄（塩尻市文化財調査委員）、河岡武春（常民文化研究所員）。
374	
375	「奈良環之助氏追悼記」があり、内容は全集月報1に類似するが、別の記事もある。河北文化賞受賞報告。鷺谷良一「円満寺に真澄の草稿を求めて」など。
376	リングを贈ったお礼。
377	他に、杉浦明平（作家）、姫田忠義（シナリオライター）、田村善次郎（武蔵野美術大学講師）。
378	
379	菅江真澄研究所の発足を祝う。「学校を辞めて仕事に専念したいが、手を広げすぎている。菅江真澄全集だけは完成させたいものだ」
380	河北文化賞受賞後、ハチ上京の際の面会を問い合わせた事への返事。「河北文化賞には竹内利美の推薦もあったようだ。全集の校正刷りを見て、よい本ができそうだ。佐藤健一郎も都合がつくだろう」。祭泉洞書屋用紙。
381	「自分の担当分（奥の冬ごもり）まで終えて、あとは佐藤健一郎に回した。歴史図書から新秋田叢書が出るようだが、菅江真澄は全国的に売れることだろう。中道等の旧蔵書については、他に聞いてみる」
382	「真澄によるアイヌ語ルビの混乱に関しては、アイヌ語について正確な知識を得られない現在、それを正すことはできない。真澄の記述のままにするのが、全集としての正しい態度ではないかと思う」
383	「宮本常一の手助けとして、註に関する資料を調べる係との立場を認識している。註の内容や書き方については、宮本常一との統一性を直接取ってもらいたい。その上でどのように改変されても異存はない」
384	菅江真澄研究所報告送付のお礼。「全集の完成お祈り申します」

F					・	・	・	枝番	通番	(資料形態)	資料名
14	4	4	②	353	(書簡)	伊澤慶治 (彦栄堂、横手市)	書簡、昭和44年8月1日付				
14	4	4	③	354	(書簡)	深沢トミ (深澤多市養女)	ハガキ、昭和44年8月31日付				
14	5	1	①	355	(新聞切抜)	全集に向けての写真撮影始まる (秋田魁新報、昭和45年7月19日)					
14	5	1	②	356	(写真3枚)	辻家での写真撮影風景 (内田ハチ、編集者小賀俊介、カメラマン矢田金一郎)					
14	5	2		357	(冊子切抜)	内田武志「真澄遊覧記その後」(広報あきた、昭和45年3月)					
14	5	3	①	358	(冊子)	内田武志(菅江真澄研究所)「菅江真澄の描いた民具」(『民具マンスリー』3巻7号、昭和45年10月1日)					
14	5	3	②	359	(書簡、封筒なし)	日本常民文化研究所 (武蔵野美術大学内) 潮田代筆、写真返却と民具マンスリー校正の連絡					
14	5	3	③	360	(用紙)	民具マンスリー購読料振込 (郵便振替証、昭和49年4月22日)					
14	5	3	④	361	(書簡、封筒なし)	日本常民文化研究所 (武蔵野美術大学内) 潮田鉄雄、民具マンスリー送付添え状 (昭和45年10月5日)					
14	5	3	⑤	362	(原稿)	民具マンスリー「菅江真澄の描いた民具」(400字詰11枚、他筆による清書原稿)					
14	5	4	①	363	(書簡)	河岡武春 (日本常民文化研究所) 書簡、昭和40年11月29日付					
14	5	4	②	364	(書簡)	河岡武春書簡、昭和45年8月13日付、『民具マンスリー』執筆依頼					
14	5	4	③	365	(書簡)	河岡武春ハガキ、昭和45年8月19日付、上記原稿の分量と図版処理についての連絡					
14	5	4	④	366	(書簡)	河岡武春ハガキ、昭和45年9月11日消印、図版処理についての連絡					
15	1	1	①	367	(印刷書簡)	第20回河北文化賞授与通知、昭和46年1月2日付 (消印は昭和45年12月31日、速達)					
15	1	1	②	368	(写真5枚)	河北文化賞贈呈式、昭和46年1月18日 (昭和45年度として)、送付票 (昭和46年1月23日付)					
15	1	1	③	369	(電報)	お祝い電報、昭和46年1月5日、秋田県知事小畑勇二郎					
15	1	2	①	370	(冊子)	河北文化賞、昭和45年度 (内田武志受賞)					
15	1	2	②	371	(冊子)	河北文化賞、昭和46年度					
15	1	3		372	(印刷書簡)	河北新報社役員改選通知 (昭和46年1月)					
15	2	1	①	373	(冊子)	菅江真澄全集月報1 (昭和46年3月)、内田武志「奈良環之助氏を悼む」掲載					
15	2	1	②	374	(パンフレット)	菅江真澄全集内容見本 (A5判)、予約注文書、予約申込書 (全十一巻別巻二の予定)					
15	2	1	③	375	(冊子)	菅江真澄研究所報告No.3 (昭和46年2月10日発行)、内田武志「奈良環之助氏追悼記」掲載					
15	2	1	④	376	(書簡)	宮本常一妻ハガキ、昭和46年12月26日消印					
15	2	2	①	377	(冊子)	菅江真澄全集月報2 (昭和46年11月)、内田武志「真澄の未発見本目録(一)」掲載					
15	2	2	②	378	(原稿…薄紙23枚)	内田武志「真澄の未発見本目録(一)」(全集月報2掲載)原稿					
15	2	3	①	379	(書簡)	宮本常一ハガキ、昭和45年7月4日消印					
15	2	3	②	380	(書簡)	宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和46年1月7日付 (速達)					
15	2	3	③	381	(書簡)	宮本常一書簡、昭和46年5月8日付					
15	2	3	④	382	(書簡)	佐藤健一郎書簡内田ハチ宛、昭和46年5月31日消印					
15	2	3	⑤	383	(書簡)	佐藤健一郎書簡内田ハチ宛、昭和46年6月20日付 (速達)					
15	2	3	⑥	384	(書簡)	佐藤健一郎ハガキ内田武志・ハチ宛、昭和47年7月25日消印					

通番	備考（「」内は文面の要約）
320	内田ハチによる新聞チラシ裏を使ったメモ書きだが、詳細であるため資料扱いとする。
321	内田ハチによる新聞チラシ裏を使ったメモ書きだが、詳細であるため資料扱いとする。
322	四折になって保管されている。
323	「郷土史の研究と菅江真澄の探究」として、内田武（筆名武志）・内田ハチ（兄妹）で受章。
324	
325	
326	「日本庶民生活史料集成第三巻 探検・紀行・地誌 東国篇」の収録作品の選択・解題・補註の執筆依頼。「编者である宮本常一・竹内利実・森義兵衛からの推薦。底本は秋田叢書・同別集とするが、必要があれば原本と校合する」
327	「日本庶民生活史料集成第1巻を別便で送る。頁数が多くなるため、秋田と津軽の日記を一編ずつ落としてはどうかと考えている。秋田叢書はコピー量が多いため、少し待ってほしい」
328	秋田叢書《雪の道奥雪の出羽路》のコピー同送。封筒に編集部との取り取りが書かれているが、⑥と重複する。
329	「森田、沢口、モウー人」とある。ハチ上京時（10月6日～10日【日付は⑥のメモ書きから】）のものか。
330	掲載候補を列挙。13の書名を挙げる中で、10に絞っている。
331	執筆依頼（8月18日）から校了（12月19日）まで時系列にまとめている。内田ハチによるメモ書きだが、詳細であるため資料扱いとする。
332	東洋文庫菅江真澄遊覧記第5巻贈呈の礼状。「定本柳田国男集の索引づくりを進めている。真澄の地名の読み方には苦労しているので助かった。大兄の手で定本全集を出してほしい。」
333	「ハチが上京するので、全集についての相談に乗ってほしい」。①の返信として、全集編纂の希望を伝えたいらしい。
334	「上記②については都合が悪い。全集については、平凡社に話をしてみたい」
335	「奈良環之助を訪ねた折に秋田に行こうと思ったが、奈良さんも都合が悪く、秋田行きは断念した。平凡社の池田敏雄に話をしたが、大事業になるため容易には動けないとのことだった。説得してみたい」
336	「未来社の松本編集長に話をしたところ、会議に諮ってみるとのことだった。小さな出版社が、東洋文庫でようやく知られ始めた一旅行者のわかりにくい文章を出版するのは不安があるだろう」
337	「未来社社長西谷氏と会い、具体的な話をした」。具体的で詳細な計画を伝えている。武志による全集案の編集委員「内田武志・宮本常一・奈良環之助・内田ハチ」とある。
338	平凡社を推薦した大藤時彦に、未来社に決まったことを知らせている。「全集は未来社からの出版で話がほぼまとまり、12月20日に西谷社長らが来社して顔合わせをおこなった。東洋文庫菅江真澄随筆集は10月にハチが上京する際に原稿を提出したが多すぎるので三分の一以上削除するように言われた」
339	「上記のことについては了解した。後悔のない全集となるよう、宮本君から出版社に話をしてもらいたい」
340	「今年5月6月は血尿がひどかった。静養中の7月真澄命日に140年祭がおこなわれて、刊行物を出した。昭和2年の柳田の講演も載せた。柳田文庫にも収めてほしい。未来社から啓蒙書である「菅江真澄の旅と日記」を出してから（校正中、全集に取りかかる予定である）」
341	内田武志の伝記をまとめるため、ハチから大藤時彦に対して手紙の返送依頼があった。
342	「忙しくて時間が取れず、真澄の旅が羨ましい。春休みにもなるので、3月中には全集第1巻の執筆を終えたいと思っている」
343	原題「雄渾のさと」。五城目町谷地中・佐藤久兵衛家の掛軸を初めて見て、「菅江真澄」を初めて名乗ったときのものではないかとの推測から、八部湯周辺の日記（をがたのさと、浦の梅園、花の真版路）の探求に向かったこと。
344	
345	「父が語るように、『浦の梅園』（写本かどうかはわからない）の焼失が惜しまれる。真澄が宿った市野集落も20年4月に焼け、ゆかりの家も代替わりしているから、資料があっても捨てられた可能性がある」
346	
347	《水の面影》（『菅江真澄随筆集』所収）の記述にある「鶴ヶ池」についての質問。鏡池信仰との関係。
348	「鏡ヶ池・秋田市寺内大畑鶴ヶ池」として、《水の面影》の一節を引き、内田武志からの教示を書く。
349	「註に手直してももらっても構わない。註の誤記については、気にせずに進めてほしい。東京にいては註が付けにくい」など、註釈執筆の苦労を書いている。
350	「読んでくれる人が周りにもいる。原文は無理でも、訳文は読んでくれるジャーナリストがいるから、話題になることがある」
351	「柳田国男『菅江真澄』を読んで以来、真澄の文章を読みたいと思っていた。最近、ガイドブック代わりに東北旅行をした。岡崎市の乙川近くに住んでいる」
352	封筒メモ書きに、「三一書房の件（消去線）」「谷川健一申出に対する意見」とある。現代語訳を他社から出したいとの申出か？ 著作権の関係で難しいと伝えている。書簡はカーボン紙による複写。

F						枝番	通番	(資料形態)	資料名
13	3	1	④	320	(用紙)	昭和41年年譜資料、東洋文庫本第2・3巻発刊までの遣り取り (内田・内田ハチ・福岡多恵)			
13	4	1	①	321	(用紙)	昭和42年年譜資料、東洋文庫本第4・5巻発刊までの遣り取り (内田・内田ハチ・福岡多恵)			
13	4	1	②	322	(表彰状)	秋田県文化功労章 (昭和42年11月3日)			
13	4	1	③	323	(冊子)	「昭和42年 文化功労者表彰式次第冊子」2冊			
13	4	1	④	324	(写真1枚)	秋田県文化功労章受章記念祝賀会			
13	4	1	⑤	325	(冊子)	上記の祝賀会芳名録			
14	1	1	①	326	(書簡、封筒なし)	日本庶民生活史料集成編集部 (三一書房)・森田東郎書簡、昭和43年8月18日【日付は⑥のメモ書きから】			
14	1	1	②	327	(書簡、封筒なし)	沢口信夫 (三一書房) 書簡、昭和43年9月4日付			
14	1	1	③	328	(書簡)	沢口信夫書簡、昭和43年9月25日付			
14	1	1	④	329	(メモ書き)	日本庶民生活史料集成編集部との打合せ内容			
14	1	1	⑤	330	(メモ書き)	日本庶民生活史料集成 (三一書房) 掲載書名メモ書き (内田武志自筆)、武志用薄紙筆紙			
14	1	1	⑥	331	(メモ書き)	定形外封筒 (薄茶色) (日本庶民生活史料集成編集部との遣り取り)			
14	2	1	①	332	(書簡)	大藤時彦書簡、昭和43年7月13日付			
14	2	1	②	333	(▲書簡)	大藤時彦宛内田武志書簡、昭和43年9月6日付 (速達)			
14	2	1	③	334	(書簡)	大藤時彦書簡、昭和43年9月10日付 (速達)			
14	2	1	④	335	(書簡)	大藤時彦書簡内田ハチ宛、昭和43年10月27日付			
14	2	1	⑤	336	(書簡)	宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和43年11月5日付			
14	2	1	⑥	337	(書簡)	宮本常一書簡、昭和43年11月17日付、武志による全集案同封			
14	2	1	⑦	338	(▲書簡)	大藤時彦宛内田武志書簡、昭和43年12月27日付 (速達)			
14	2	1	⑧	339	(書簡)	大藤時彦書簡、昭和43年12月30日付			
14	2	2	①	340	(▲書簡)	大藤時彦宛内田武志書簡、昭和44年12月6日付			
14	2	2	②	341	(書簡)	大藤時彦書簡内田ハチ宛、昭和57年3月6日消印、大藤時彦から内田武志書簡の返送			
14	2	3		342	(書簡)	宮本常一書簡、昭和45年3月4日付、4月21日消印			
14	3	1		343	(原稿11枚)	昭和43年1月1日魁掲載「私の初夢」下書き原稿			
14	3	2		344	(原稿)	昭和43年1月1日魁掲載「私の初夢」下書き原稿 (まともが無い状態の原稿)			
14	3	3		345	(△書簡)	鷺谷良一宛米古道彦 (八郎潟町真言宗常福院住職) 書簡、昭和43年8月18日消印			
14	4	1		346	(書写原稿)	内田武志著作の発行年など奥付 (東洋文庫6冊、三一書房・日本庶民生活史料集成)			
14	4	2	①	347	(書簡)	大場磐雄 (考古学、國學院大学教授) 書簡、昭和44年11月18日付 (速達)			
14	4	2	②	348	(書写原稿)	『神道考古学講座』第五巻祭祀遺跡特説 (責任編集大場磐雄)、「鏡ヶ池」部分			
14	4	3	①	349	(書簡)	宮本常一書簡、昭和41年2月3日付、封筒メモ書きに「東洋文庫 第一巻刊行後」			
14	4	3	②	350	(書簡)	宮本常一書簡、昭和41年7月2日付、封筒メモ書きに「東洋文庫 第二巻刊行後」			
14	4	3	③	351	(書簡)	長沢詠子書簡、昭和41年2月16日付、封筒メモ書きに「最初のてがみ 東洋文庫を読んで」			
14	4	4	①	352	(書簡)	福岡多恵 (平凡社) 書簡内田ハチ宛、昭和44年6月20日付 (速達)			

通番	備考（「」内は文面の要約）
287	内田ハチ「なぜ絵本をつくるか」「私は知りたい」、内田武志「アンマ優先論一質問」「弱視」。書写原稿…内田武志「アンマ優先論一質問」「弱視」
288	包紙に「『内田武志人間記録』内田武志—小学校のころ—」とある。
289	頁番号として〔16～17〕〔37、37a～46〕とある。
290	内田武志によるメモ書き。
291	内田武志によるメモ書き。【F12-2-4のためのメモ書き】
292	テープの吹き込み原稿
293	
294	加藤ヨウは同年4月8日に死去、55歳。宛先住所：秋田市手形山崎町9-24
295	【F12-2-2と関連…重複する部分がある】【メモ書きは、F12-2-4】
296	
297	婉の生き方が自身の生き方に重なる部分があると、著者の大原富枝が語っている。（内田武志が感じ取っていたことと同じ）
298	
299	東洋文庫現代語訳出版までの経緯。菅江真澄遊覧記については、宮本常一の推薦を受けて、谷川健一（当時は平凡社勤務）が提案する。大藤時彦からも推薦（了解）を得る。
300	写真や新聞切り抜き等送付の礼状。「全集完成を武志に見せたかった。これで基礎ががっちり組み上がったから、ハチ先生や後学の方が研究を進めていただきたい」
301	東洋文庫出版に先立って面会したことへの礼状。「真澄遊覧記の口語訳について、編集部で十分に検討したい。【F12-4-1-①】…昭和38年に東洋文庫編集部成立、10月より刊行開始、編集長酒井春郎。この時は「菅江真澄遊覧記」全2巻とあるのみ。昭和39年10月の進行会議資料に、「菅江真澄遊覧記、内田武志・宮本常一編、担当福岡」とある。
302	太陽創刊号への原稿不掲載を伝える。
303	
304	
305	(1) 1枚 (2) 2枚 (3) 9枚 (4) 7枚 (5) 9枚
306	「秋田叢書第一期全15巻の刊行が終わった。中でも秋田風土記に注目した」「あらかじめ村々の末端役人に書きあげさせて、真澄翁自身が实地検分のうえ訂正加筆したと思われる真澄地誌ほどには多方面にわたっていないけれども…」
307	水野清一は京都大学人文研究所（東洋考古学、京都大学教授）【F1-3-3-②9頁にある】。「パキスタンへ調査に出かけるので、依頼の件は帰国まで待つて欲しい」
308	内田武志が石の鑑定を依頼したことへの返事。渋沢敬三を介して面識があった。
309	札幌出張に向かう青函連絡船からのハガキ。「帰路、7月6日朝に訪ねたい」
310	当時、愛知県立東山工業高等学校の校長。「真澄研究の再燃もこの上ないニュースです」とある。「旅伝」3-1を送る。
311	脇本の埋没家屋調査のために来秋の際、菅江真澄の著作について教えを受けたことへの礼状。宛先住所：秋田市手形山崎4-4
312	木村兼葎堂に関する問合せへの返事（兼葎堂日記、兼葎堂小伝）。本草学については京大名誉教授上野益三を紹介。後藤捷一は、徳島・三木文庫の設立に尽力。封筒は三木文庫。
313	
314	
315	東洋文庫菅江真澄遊覧記第1巻送付の礼状。
316	内田ハチによる新聞チラシ裏を使ったメモ書きだが、詳細であるため資料扱いとする。
317	
318	《十曲湖》が県外にある経緯と、国立国会図書館に《百白之図》が見つかったことを冒頭に紹介する。
319	上記原稿についての感想と情報提供。「真澄が白の最後まで見守ったことが心にしみる。蕪村にも秋田の白を詠んだ句がある。応挙の自鏡絵のこと、石川理紀之助が写した《十曲湖》について話をしたいと思っている」

F				・	・	枝番	通番	(資料形態)	資料名
11	4	1				287			(雑誌、書写原稿)「みちびき」第16号(昭和35年2月)
12	1	1				288			(伝記原稿…10行野紙110枚・武志自筆)武志自伝原稿1(未定稿、未整理とあり)生いたち・小学校のこ ろ
12	1	2				289			(伝記原稿13枚・武志自筆)武志自伝原稿2「鈴木和子さんへー生いたちー」(一小学校のころーを要約)
12	2	1	①			290			(メモ書き1枚、書写原稿)大原富枝「宛という女」(昭和35年2月『群像』に発表)を読んで
12	2	1	②			291			(メモ書き9枚)大原富枝「宛という女」を読んで、内田チズ子の文章の抜き書き 他
12	2	2				292			(▲書簡21枚…武志自筆、書写原稿)内田武志「和歌山のチズ子さんへ」、昭和37年5月18日付
12	2	3	①			293			(△用紙8枚表裏、書写原稿)加藤ヨウ「宛という女を読んでーヨリ子さんへー」、昭和37年4月9日付
12	2	3	②			294			(書簡、書写原稿)加藤彰真書簡内田ハチ宛(加藤ヨウの死亡通知)、昭和57年4月11日付
12	2	4				295			(原稿19枚、未整理)内田武志「[宛という女]を読む人のために」
12	3	1	①			296			新潮文庫・大原富枝「宛という女」(昭和56年、29刷)
12	3	1	②			297			(新聞切抜)「宛という女」紹介記事(新聞不明、昭和37年3月5日)
12	3	1	③			298			(新聞切抜)「宛という女」紹介記事(新聞不明、昭和37年4月2日)
12	4	1	①			299			(書簡)福岡多恵(平凡社)書簡内田ハチ宛、昭和57年2月18日付【F19-6-1-①に書写原稿】
12	4	1	②			300			(書簡)福岡多恵ハガキ・内田ハチ宛、昭和56年12月4日付
12	4	1	③			301			(書簡)酒井春郎ハガキ、昭和38年12月11日消印【F19-6-1-③に書写原稿】
12	4	2	①			302			(書簡)平凡社太陽編集部菅原慶子書簡、昭和38年6月19日付
12	4	2	②			303			(書簡)平凡社からの原稿料現金書留、「星の言葉」(支払日:昭和38年5月16日)
12	4	3	①			304			(雑誌)「出羽路」第21号(昭和38年12月10日発行)、内田武志「菅江真澄と四つの地誌」掲載
12	4	3	②			305			(メモ書き)地誌関係の5種(祭魚洞文庫用紙)
12	4	3	③			306			(新聞切抜)佐藤久治「秋田風土記を読む」(秋田魁新報夕刊、昭和47年9月20日)
12	4	4	①			307			(書簡)水野清一ハガキ、昭和38年12月3日付
12	4	4	②			308			(書簡)水野清一書簡、昭和38年12月31日付、「石」の鑑定
13	1	1	①			309			(書簡)磯貝勇ハガキ、昭和39年6月29日付
13	1	1	②			310			(書簡)磯貝勇書簡、昭和39年7月9日付
13	1	2				311			(書簡)斎藤忠(考古学、東大教授)書簡、昭和39年10月8日付
13	1	3	①			312			(書簡)後藤捷一(近畿民俗学会、染織書誌学)書簡、昭和39年11月17日付
13	1	3	②			313			(書簡)後藤捷一ハガキ、昭和39年11月25日消印
13	1	4				314			(書簡)民間伝承編集部沢沢敬三先生追悼号執筆依頼(印刷物)、昭和39年8月7日付
13	2	1	①			315			(書簡)桜田勝徳(常民文化研究所)ハガキ、昭和40年11月15日付
13	2	1	②			316			(用紙)昭和40年年譜資料、東洋文庫本第1巻発刊までの通り取り(内田・内田ハチ・福岡多恵)
13	3	1	①			317			(コピー)内田武志「菅江真澄の〔百白之図〕」(「出羽路」30号、昭和41年7月15日)
13	3	1	②			318			(別刷)内田武志「菅江真澄の〔百白之図〕」(「出羽路」30号、昭和41年7月15日)2冊
13	3	1	③			319			(書簡、封筒なし)奈良環之助書簡、昭和41年3月17日付

通番	備考(「」内は文面の要約)
256	「書簡手記(S氏)は全編掲載はできない。身体障害者の手記の中から普遍的な部分を抜粋するのはどうか。内田武志からの提案(内田武志の歴史を中心に、社会的弱者との出会いなどをまとめる)を受け入れるが、到達点として身体障害者とのふれあい、そこに至る精神の遍歴を書いていただきたい。原稿400字詰350枚]
257	「別便で『春のだいち その後』を返送する。内田さんの人間記録、あらかじめのテーマが決まったらお知らせいただきたい。そこで検討したい]
258	記載は昭和32年1月～2月上旬、危篤状態だった時の病状記。日ごとの病状、施薬、食事などを書く。お見舞い及び見舞金。〔『みちびき』第11号「ごあいさつ」【編集室だより】に、前年から武志の胃腸の具合が悪く重症に陥っていたとある。]
259	望月優子著「生きて愛して演技して」(人間の記録双書)(昭和32年8月26日)、和田梅子著「靴みがき」(人間の記録双書)・竹内てるよ著「母―この最後なるもの」(実業・日本社)(掲載年月日不明)、(掲載年月日不明)
260	望月優子は映画女優、のち社会党参議院議員。
261	内田ハチ「盲教育に捧ぐ」【ひろい道】「私どもの研究」【編集室だより】、内田武志「閉ざされた窓」…点字を知ろうとしない教師。
262	〔『みちびき』に対する所感、『みちびき』第11号について。世の識者の間に静かな反省を呼び起こし、上すべりなく進んでいる。東京であったならお祭り騒ぎのすべりの議論になり、こうはならなかったであろう。『みちびき』の中には苦悩に満ちたものもあるが、とにかく前進しているように感じる〕
263	ハチ上京の問合せへの返事。〔『みちびき』の活動で多くの人の関心を引き起こすことは大事だが、経済的背景も必要。そう思って人間の記録双書を紹介したが、ジャーナリズムに押しつぶされそうになっているのではないかと心配している〕
264	ハチ上京における面会希望への返事。〔身体障害者に対する社会的関心が高まってきており、武志の半生は障害者の励ましになる〕
265	〔「人間双書」のどれもが卑屈ではない自由な魂によって書かれており、人びとに力を与えて感動を起こさせている。悪い環境を少しずつ改変し、あるいは脱出した後で、初めて自由に語り、客観的描写ができる。ハチが言う「私と兄は少しも卑屈ではなかった」とすることこそ、重要なポイントである〕
266	「原稿の第二部を拝受した。病氣療養中の鈴木均に代わり連絡する」
267	
268	プロット3種。罫紙1枚目に「盲人教育への関心が、民俗研究からどうつながっているのか。対象が異なるのみで、方法は同じである。罫紙3枚目に〔1. 幼年、2. 民俗学への開眼業績―①鹿角方言集②静岡方言集③静岡方言誌④日本星屋方言資料⑤私前と菅江真澄⑥菅江真澄未刊文献集の春のだいち、3. 現在〕とある。
269	人間の記録双書28冊、昭和31年9月～35年7月まで刊行。
270	内田ハチ「日本の悪路」【教育研究所が欲しい】「身障者をかこむ人びと」【より子さんのために(うちに迎えて)】「わたくしどもの在り方」【『みちびき』の浸透】「カナタイプをひろめよう」【編集室だより(H)】、内田武志「より子さんのために」【あたりまえのこと】
271	内田ハチ「盲女子のこともど」【盲学校理科のこと】、内田武志「『春のだいち』その後」【編集室だより(U)】。〔『春のだいちその後』をとりかこんで〕に、盲人教育の問題点の指摘、須藤春代が内田兄妹から離れざるを得なかった理由などがある。
272	内田ハチ「盲女子のこともどその二 この編をまとめて」【社会に向かって おわりに】、内田武志「社会に向かって(はじめに)」、コピー…鈴木和子(よりこ)【社会にむかって 手紙】
273	
274	4月4日、4月21日、4月28日武志宛、5月7日ハチ宛、5月16日ハチ宛、6月14日武志宛、6月22日ハチ宛、7月16日、11月8日
275	上記4月4日付書簡の返信文面。【雷聲澄子】アメリカ留学推薦のお礼。
276	上記4月4日付書簡の返信文面。【『みちびき』第8・9合併号の点訳本二冊のうちの前巻を送った】
277	【熊谷鉄太郎の苦闘の人生に感動したが、苦闘がなくとも、すべての盲人や障害者がかもって自由に生きることができよう、私自身にある劣等感や差別感をなくさなくてはいけない】。書写原稿は内田武志。
278	武志の「日本人の身障者観」を読んだ感想
279	A4茶封筒のみだが資料扱いとする。
280	封筒に「トラナイ」のメモ書きがある。渋沢敬三、子息雅英の動向。【神戸盲学校生徒の粘土細工の展覧会を見て、教育の可能性を感じた】。
281	人間の記録双書の出版経緯、鈴木均の近況について。
282	鈴木均の住所について。
283	封筒に「トラナイ」のメモ書きがある。〔内田武志が宮本常一に送った原稿が、人間の記録双書になる原稿の一部かどうかかわからないため、回送してもらえよう手配したい〕。内田武志及びハチの略歴等の問合せ。
284	表に「X」のメモ書きがある。【略歴と原稿を受け取った。これから拝読する】
285	表に「X」のメモ書きがある。【人間の記録双書のプロットができたらお知らせ願いたい】
286	内田ハチによる後年のメモ書き。鈴木均が『春のだいち』を読んで感動して、宮本常一の紹介で内田を訪ねた。しかし、鈴木均の退社で「人間の記録双書」の執筆は立ち消えになった。東洋文庫推薦は、大藤時彦【ただし、F12-4-1-①からは、宮本常一推薦の確認的な意味合いが強い】

F ・ ・ 枝番 通番 (資料形態) 資料名					
10	1	2	②	256	(書簡、書写原稿) 鈴木均書簡、昭和32年9月12日付
10	1	2	③	257	(書簡、書写原稿) 鈴木均書簡、昭和32年12月9日付
10	2	1		258	(ノート) 内田武病状記 (昭和32年1月～3月、大学ノート)
10	2	2	①	259	(新聞切抜) 平凡社人間の記録双書紹介記事など、「日本読書新聞」3種
10	2	2	②	260	(雑誌切抜) 望月優子『生きて愛して演技して』(平凡社人間の記録双書)の紹介記事 (週刊新潮)
10	3	1		261	(雑誌、一部コピー)『みちびき』第11号—盲教育特集— (昭和32年5月)
10	4	1	①	262	(書簡、書写原稿) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和33年1月21日付
10	4	1	②	263	(書簡) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和33年2月25日付
10	4	2	①	264	(書簡、書写原稿) 鈴木均ハガキ内田ハチ宛、昭和33年2月28日付
10	4	2	②	265	(書簡、書写原稿) 鈴木均書簡内田ハチ宛、昭和33年3月19日付
10	4	2	③	266	(書簡、書写原稿) 平凡社人間の記録双書編集部ハガキ、昭和33年2月28日付
10	4	3		267	(メモ書き) ハチのメモ書き7枚両面 (ハチが上京して平凡社鈴木均と電話で話した際のメモ。手帳切抜)
10	4	4		268	(原稿) 人間の記録双書用プロット原稿 (サンケイ原稿用紙1枚、平凡社原稿用紙1枚、罫紙3枚+未来社原稿用紙3枚)
10	4	5		269	(コピー) 人間の記録双書一覧表 (平凡社六十年史・年表より)
10	5	1		270	(雑誌、一部コピー)『みちびき』第12・13合併号 (昭和33年1月)
10	5	2		271	(雑誌)『みちびき』第14号 (昭和33年9月)
11	1	1		272	(雑誌、一部コピー)『みちびき』第15号 (昭和34年5月)
11	2	1		273	(書写原稿) 人間の記録双書 熊谷鉄太郎『薄明の記憶』、400字詰43枚
11	2	2	①	274	(書簡の書写…大学ノート) 熊谷鉄太郎書簡内田武志・ハチ宛
11	2	2	②	275	(▲書簡の書写…用紙) 熊谷鉄太郎宛内田ハチ書簡の点訳のための原稿
11	2	2	③	276	(▲書簡の書写…薄紙) 熊谷鉄太郎宛内田武志書簡の点訳のための原稿 (武志筆)
11	2	3		277	(書写原稿) 加藤ヨウ、熊谷鉄太郎『薄明の記憶』の感想
11	2	4	①	278	(書簡、封筒なし) 伊藤礼子書簡、昭和35年1月4日付
11	2	4	②	279	(封筒のみ) 表に「日本人の障害者観、内田武志、伊藤礼子さんに (昭和34年8月)」とある。
11	2	5		280	(書簡) 宮本常一書簡、昭和32年5月29日付
11	3	1	①	281	(書簡) 福岡多恵 (平凡社) 書簡内田ハチ宛、昭和56年12月18日付
11	3	1	②	282	(書簡) 福岡多恵ハガキ・内田ハチ宛、昭和57年1月6日付
11	3	2	①	283	(書簡) 鈴木均 (平凡社) 書簡、昭和32年10月21日付
11	3	2	②	284	(書簡) 鈴木均ハガキ・武志とハチ宛、昭和32年11月1日付
11	3	2	③	285	(書簡) 鈴木均ハガキ・武志とハチ宛、昭和33年1月21日付
11	3	2	④	286	(メモ書き5枚) 鈴木均関連 (鈴木均は平凡社で「人間の記録双書」担当者)

通番	備考（「」内は文面の要約）
224	表紙に「秋田県立盲学校中学部二年 須藤春代」とある。須藤春代「盲児を持つお母さんに」、内田武志「あとがき 昭和28年3月30日」
225	
226	日本常民文化研究第65、岡書院。B5判二つ折り。「柳田国男先生の言葉」私たちの言葉 秋田銀行頭取、秋田県教育長、奈良環之助」がある。「御申込みは 南秋田郡金足村 奈良環之助」とある。秋田県内向けの出版案内であろう。
227	
228	「未刊文献集10冊分の代金を受け取った」
229	「未刊文献集の出版は喜ばしい。これまでの苦労が実を結んだことになる。秋田県内にも学問に利用する人が多くなることを願っている。預かっていた写真・複写集が4冊あるが、民俗学研究所に預けてもらえないか」
230	上記書簡の返信で、「女子民俗学研究会の人たちで預かることにした」とする。「F9-1-1」に掲載するための短文を柳田国男自身が寄せている。
231	未刊文献集二の贈本に対する礼状。「千歳」の消印。
232	
233	「春のだいち」出版について。「岩崎出版の岩崎氏が秋田に行ったときの話を聞いた。岩崎氏、渋沢敬三と3人で話し合った。全部の詩は掲載できないので、選別を川端康成に頼むことになるだろう（書写原稿に巽聖歌に変更と但し書きあり）。大事なものは須藤春代の詩そのものよりも、盲教育への喚起となることだから、武志かハチが巻頭言を書いた方がよい。東北犬歩当棒録に掲載する写真2枚を借りたい。（巽聖歌による選であることは、内田武志「春代さんのあゆみ」の最後に書かれている。）
234	第3号までは発行所・秋田植生教会盲人伝道会。第4・5号合併号（昭和29年11月1日）から、発行所・内田ハチ方みちびきの会。第1号は昭和28年12月1日、第16号は昭和35年2月。
235	表紙裏に「盲人伝道会会員名簿」。須藤春代…「神の存在を問われて」「詩6編」、渋沢敬三…「仰臥四十年の所産」（抄）、内田ハチ…「編集室だより」、加藤ヨウ…「通信」
236	表紙裏に「盲人伝道会会員名簿」。須藤春代…「第二回盲人伝道会修養会報告」「修養会を終えて」「詩6編」、内田ハチ…「盲伝修養会によせて（座談会司会）」「編集室だより」
237	表紙裏に「みちびきの会規約」。須藤春代…「詩8編」、内田ハチ…「みちびきの会のねがい」「母よ嘆くなかれ」「三浦聖子さんの修学」「編集室だより」、内田武志…「ある日の手紙」（M兄＝宮本常一）
238	
239	
240	
241	「みちびき」の感想を掲載（13名）、「編集室から」内田ハチ、29年度会計報告。「みちびき」の発行所が内田ハチ方みちびきの会に変更されている。第4・5合併号（昭和29年11月1日）から。
242	「みちびき」第6号－「春のだいち」特集号－（昭和30年6月）の後での発行。ジャン・クリストフ点字訳の経過を詳しく説明。「春のだいち」発刊の事情、その反響等を掲載。
243	
244	
245	
246	柏井光蔵（かわいこうぞう）は日本盲人基督教伝道協議会委員長。新教出版社の「福音と世界」昭和30年10月号からの転載。内田兄妹とは、静岡時代に知り合っていた。ジャンクリストフ点訳のことなどを端的に紹介している。
247	内田ハチ…「はじめのこぼし」、須藤春代…「詩6編」、〈春のだいちによせて〉…磯貝勇・宮本常一など、〈感想・通信〉…武藤鉄城・伊藤礼子など、〈寄贈者からの便り〉…円地文字・伊藤整・坪田譲治・新藤兼人など、〈書評から〉…サンデー毎日・日本読書新聞・新女苑
248	内田ハチ…「はじめのこぼし」「第五回全国盲信徒修養会に参加して」「編集室だより」、内田武志…「心をつなぐもの」
249	「家族も点字を覚えることが必要だ」
250	内田ハチ…「はじめのこぼし」「触覚でみる世界」「編集室だより」、熊谷鉄太郎…「盲人の友へ」、柏井光蔵…「ロマン・ローランの Copp」、須藤文四郎（須藤春代の実兄）…「心をつなぐ」
251	内田ハチ…「海をへだてて」「編集後記」、熊谷鉄太郎…「クリスチャン・ヒューマニズムを提唱する」
252	平凡社「人間の記録双書」担当の鈴木均の紹介。「みちびき」に集まる人たちの話をしたところ興味を持った。8月上旬に秋田に行きたいとのこと。宮本常一の連絡先は日本常民文化研究所。内田武志の住所：秋田市保戸野川反11
253	「著書である『日本の子供達』を送った。著作中、貴兄のことについて触れた。特殊児童についてもっと触れたかった」
254	昭和56年2月14日電話での回想。「須藤春代の『春のだいち』に感動していたが、内田兄妹の生きざまにも心動いた。点字が盲人の自己表現手段として用いられた成果として『春のだいち』があり、内田兄妹が盲人を社会人として生きるの途にまで生成させようと努力していることを知った」
255	人間の記録双書に内田武志を取り上げる意義を述べ、是非協力してほしいとしている。封筒表書き（ハチによる）には、「鈴木氏」「みちびき」の書き込みの下に、「全文掲載のこと」とある。これは、書写をしている部分に限ることを意味する。

F				・	・	・	枝番	通番	(資料形態)	資料名
8	4	3		224	(冊子) 須藤春代詩集『めぐみ』(A5判2段組、活字本) 2冊(書き入れ本1冊あり)					
8	4	4		225	(書写原稿) 渋沢敬三、北海道から秋田への経路(昭和28年、「犬歩当棒録」より)、昭和28年8月20日～31日の行程					
9	1	1		226	(パンフレット、書写原稿) 菅江真澄未刊文献集第1集の出版案内、「柳田国男先生の言葉」は【F9-1-3-①と②、及びF18-1-1-④と⑤を使用】					
9	1	2	①	227	(書写原稿) 内田武志「あとがき」(「菅江真澄未刊文献集二」)					
9	1	2	②	228	(書簡) 桜田勝徳(常民文化研究所) ハガキ、昭和30年1月27日付					
9	1	3	①	229	(書簡なし、書写原稿) 柳田国男書簡内田ハチ宛、昭和29年2月16日付【F18-1-1-④に実物有】【冒頭部分をF9-1-1に使用】					
9	1	3	②	230	(書簡なし、書写原稿) 柳田国男書簡内田ハチ宛、昭和29年2月20日付(速達)【F18-1-1-⑤に実物有】【F9-1-1の主要部分…柳田による】					
9	1	3	③	231	(書簡なし、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和29年12月6日付【F18-1-1-⑦に実物有】					
9	2	1		232	(雑誌切抜) 広報あきた、昭和29年11月15日発行・秋田市文化章受章記事「超人的兄妹の努力」(記事の一部見えず)					
9	2	2		233	(書簡、書写原稿) 宮本常一書簡内田ハチ宛、昭和29年6月12日付					
9	3	1		234	(書写原稿) 『みちびき』第1号～第16号の発行年月日のメモ書き					
9	3	2	①	235	(雑誌) 『みちびき』第2号(昭和29年2月1日)					
9	3	2	②	236	(雑誌) 『みちびき』第3号—盲人伝道会修養会特集号—(昭和29年5月10日)					
9	3	2	③	237	(雑誌) 『みちびき』第4・5号(昭和29年11月1日)					
9	3	2	④	238	(チラシ) 春のだいち申込み案内(『みちびき』第4・5号に挟み込まれていた)					
9	3	3		239	(チラシ) 『みちびきの会』規約(事務所：内田ハチ方)、秋田榎山教会盲人伝道会規約、加入申込書(内田ハチ、副会長、「みちびきの会」委員長)、謄写版					
9	3	4	①	240	(冊子) 秋田榎山教会盲人伝道会通信No1(昭和29年7月25日)、会員及び後援会会員名簿					
9	3	4	②	241	(冊子) みちびきの会通信No2(昭和29年12月25日)					
9	3	4	③	242	(冊子) みちびきの会通信No3(昭和30年7月10日)、みちびきの会秋田部会開催通知					
9	4	1	①	243	(コピー) 渋沢敬三『東北犬歩当棒録』『菅江真澄』など					
9	4	1	②	244	(用紙) 上記本贈呈票					
9	4	1	③	245	(コピー) 渋沢敬三「春代さんの心眼をひらいた内田君」(「春のだいち」寄稿文)					
9	4	2		246	(書写原稿) 柏井光蔵「ロマン・ローランのコップ～「ジャン・クリストフ」の点訳完成をめぐって」15枚【みちびき第8・9号掲載】					
9	4	3	①	247	(雑誌) 『みちびき』第6号—「春のだいち」特集号—(昭和30年6月、この号のみA5判)					
9	4	3	②	248	(雑誌) 『みちびき』第7号(昭和30年10月)					
9	4	3	③	249	(コピー) 内田武志「心をつなぐもの」(『みちびき』第7号)					
9	5	1	①	250	(雑誌) 『みちびき』第8・9号合併号(昭和31年2月)					
9	5	1	②	251	(雑誌) 『みちびき』第10号(昭和31年10月)					
10	1	1	①	252	(書簡、一部書写原稿) 宮本常一書簡、昭和32年7月23日付					
10	1	1	②	253	(書簡、書写原稿) 宮本常一ハガキ、昭和32年8月8日付【F19-2-1-②にも書写原稿あり】					
10	1	1	③	254	(メモ書き) 鈴木均(平凡社人間の記録双書担当)、秋田来訪時(昭和32年8月上旬)の回想					
10	1	2	①	255	(書簡、一部書写原稿) 宮本常一書簡、昭和32年9月16日付					

通番	備考（「」内は文面の要約）
192	「内田君はどうしたろうと気にしていた。焼け残ったために世の中に役立つことをしたい。もう外部との文通は怠ることにした」。宛先住所：鹿角郡毛馬内町高橋正三氏方「内田武志君」
193	
194	「20日午後2時、青森の文化講座への途中に立ち寄る。竹皮草履にリュックサックのいでたち。21日、奈良環之助や豊沢武ら秋田の民俗学愛好者20数人が秋田銀行講堂で話を聞いた。内田武志宅（秋田市亀ノ町東土手町）を訪ねた。24日まで滞在の予定」
195	「青森にも資料があるようだから、ハチが青森に行く機会があったら青森県立図書館の吉岡館長に問い合わせるとよい」
196	昭和21年8月22日に吉田三郎を訪ねた。昭和9年9月7日に吉田宅を渋沢敬三らが訪ねたことに触れる。
197	昭和21年8月22日、23日の行程が詳しく書かれている。ニコボツ=ニコニコ没落。渋沢敬三は、昭和21年4月にレッドパージを受けた。「鶴岡駅で先生を迎えた。…私は大曲で先生に別れ、そこから南への旅をつづけた」
198	渋沢敬三による昭和21年8月18日～30日の行程。泊まりは、新潟、松ヶ岡、秋田、天王、秋田、角館、秋田、浅虫…。
199	渋沢敬三による昭和21年10月5日～16日、近畿・岡山・広島行程。西宮に内田ハチが訪ねて行った。
200	「〔ひなのふし〕には「菅江真澄は、父貞房主の学の友たり…」とする貞臣の識語があり、「伊頭園茶話」の真澄遊覧記の目録にも「ひなのふし 高階にあり」とあるから石井忠行も披見したものであろう。真崎勇助による明治31年の著書目録では欠本となっている。胡桃沢勲内が発見し、柳田国男校注で出版された」
201	鉛筆書きとペン書きがあり、重複する。
202	
203	昭和45年発行の目録は、昭和3年9月の「文献目録」を再整理したもの。書き込みあり。
204	薄紙1枚。昭和25年6月まで。
205	「星座というギリシャ神話を想起するかもしれないが、日本にも星座を見る習俗があり、方言があった。大彗星の出現とともに、東京に預けておいた原稿が出版されることになった。」「民俗学研究者」として紹介。
206	
207	
208	「北極星、北斗七星、金星、三つ星、昴星、流星、その他の星、俗信、俚語、俚諺」について。数項目に鉛筆による書き込みもあるも、左端が切れている。
209	
210	「この度「松前と菅江真澄」をまとめた動機は、未刊であった《かたぬ袋》、それに《えぞのでぶり続》などの新資料が発見されたからであるが、地域ごとに真澄の行跡を整理してみようと思ったからである」
211	「秋田県立図書館で、今日11月23日午前10時から民俗学講演会が開かれる」
212	200字ほどのコラム。「県立図書館での講演の後、下北手村の文化祭りに陳列されている長てぬぐいを村の女子に被らせてみて、「美しい勤勞の装いだ」と言った」
213	秋田県内では、秋田（泊）・大曲・角館（泊）（武藤鉄城、富木友治など）・大曲・秋田（泊）に行った。
214	祭魚洞文庫用紙（朱枠）1枚。裏に、栗盛家に宛てた宮本常一を紹介する書簡草稿があるが、消去線が引かれている（昭和22年であろう）。
215	全集図絵番号 [172] [173] に相当。
216	「歌句に星座を詠ったものは少ないが、山口誓子の例がある。寒星は冬の星座を指すが、汎称である点が物足りない。瀬戸内海のある島では、旧暦正月のころ、双子座を「餅食い星」「雑煮星」と呼ぶ。また「荒星」もある。犬伏座であろう。同じ切抜に、奈良環之助「乳虎と總庵」あり。
217	奥羽郷土史談会は盛岡市に事務局。会長金子定一。表紙裏に会則・役員名簿がある。昭和25年1月創刊。藤田謙述「南部紫根染（上）」。藤原三代遺体調査報告会に於ける鈴木氏の講演の要約がある（首級は忠衛か泰衡か）。表紙を入れて16頁。内田武志の文章は、（二）～（四）の出だしに当たる部分のみで短い。
218	雪の胆沢辺、かすむ駒形を天明7年としている。寛政年間までの南部領（下北を含む）の旅を著作ごとに紹介する。
219	錦木、十曲湖、上津野の花などを紹介する。
220	筆のまにまに第五巻などの随筆から、「あまちこ・ゆきのやしろ・由伎の宮桜・あしな沢のぼさち・浪うち坂・ほそけやく」を原文で紹介する。「筆のしがらみ」「陸奥国毛布郡一事」に触れて結語。
221	「菅江真澄については、秋田叢書の刊行はあったが、未だ刊行されないものもある。新資料の発見や栗盛家での書写などがあり、未刊資料の原稿がすでにできあがっている。一日も早く公刊されて内田武志の労苦が報われることを望んでいる」
222	
223	発行は、秋田権山教会盲人伝道会。

F					枝番	通番	(資料形態)	資料名
7	1	4	②	192	(書写原稿)	柳田国男ハガキ、昭和21年1月7日付 [F1-3-2-③に実物]		
7	1	4	③	193	(チラシ)	菅江真澄研究会の趣旨 (贈写版、B4判表裏印刷)		
7	1	5	①	194	(コピー)	新聞記事「真澄の足跡訪ねて渋沢さん秋田市へ」、秋田魁新報昭和21年8月22日		
7	1	5	②	195	(書簡なし、書写原稿)	渋沢敬三書簡、昭和21年9月3日付		
7	1	5	③	196	(書写原稿)	吉田三郎「渋沢敬三先生と私」(「渋沢敬三」上、310頁)		
7	1	5	④	197	(書写原稿)	宮本常一「渋沢先生のページ・ニコボツ時代」(「渋沢敬三」下、299頁)		
7	1	5	⑤	198	(書写原稿)	「第三部 旅譜と片影」昭和21年8月(「大歩当棒録」、昭和36年)		
7	1	5	⑥	199	(書写原稿)	「第三部 旅譜と片影」昭和21年10月(「大歩当棒録」466頁、昭和36年)		
7	2	1		200	(新聞切抜)	内田武志「ひなのてぶり(一)」角館新報・昭和22年1月1日、「(二)」同年1月10日		
7	2	2		201	(用紙)	寄贈者名簿、祭魚洞文庫用紙4枚		
7	2	3		202	(用紙)	大館市立栗盛記念図書館から内田ハチ宛請求書及び領収書、大館本コピーに関して4通(封書3通)、昭和54年と昭和55年		
7	2	4		203	(冊子)	「真崎文庫目録」昭和45年12月		
7	3	1		204	(履歴書)	内田ハチ履歴書(職歴)【※非公開】		
7	3	2	①	205	(新聞切抜)	内田武志「星座の瞑想」(秋田魁新報、昭和23年12月13日)		
7	3	2	②	206	(メモ書き)	内田武志、星に関する感想(上記新聞記事の元原稿のようだがだいぶ異なる)		
7	3	2	③	207	(新聞切抜)	「今年の大空異変」(秋田魁新報、新聞号数から昭和25年正月か?)		
7	3	3		208	(調査票)	「星に関する方言の調査」の回答、静岡県小笠郡土方町落合・野々山さん		
7	4	1		209	(コピー)	内田武志「まえがき」(「松前と菅江真澄」、昭和23年、発行は昭和24年4月)		
7	4	2		210	(雑誌切抜)	内田武志「松前と菅江真澄」(「草園」、昭和24年2月号)		
7	4	3	①	211	(新聞切抜)	「民俗学が結ぶ愛情 内田氏訪う渋沢元蔵相 星屋方集出版の日」(秋田魁新報、昭和24年11月23日・写真付)		
7	4	3	②	212	(新聞切抜)	渋沢敬三の秋田での動向(秋田魁新報夕刊「見たり聞いたり」、昭和24年11月25日)		
7	4	3	③	213	(書写原稿)	渋沢敬三、北海道から秋田への経路(昭和24年、「大歩当棒録」より)、昭和24年11月12日～24日の行程		
7	4	3	④	214	(書写原稿…内田武志による)	『東遊雑記』アイヌの項目		
7	4	3	⑤	215	(写真2枚)	《えぞのてぶり続》図絵(封筒入り)		
8	1	1		216	(新聞切抜)	内田武志「餅食い星」(秋田魁新報、昭和25年1月1日)		
8	1	2		217	(掲載雑誌)	『奥羽史談』第4号(昭和25年10月15日)、内田武志「菅江真澄の南部の旅(一)」収録		
8	2	1	①	218	(掲載雑誌)	『奥羽史談』第2巻1号(昭和26年2月10日)、内田武志「菅江真澄の南部の旅(二)」収録		
8	2	1	②	219	(掲載雑誌)	『奥羽史談』第2巻2号(昭和26年5月10日)、内田武志「菅江真澄の南部の旅(三)」収録		
8	3	1		220	(掲載雑誌)	『奥羽史談』第3巻1号(昭和26年4月20日)、内田武志「菅江真澄の南部の旅(四)」収録		
8	3	2		221	(掲載雑誌)	秋田県立秋田図書館館報「ともしび」復刊第2号(昭和27年3月)、渋沢敬三「菅江真澄と内田武志君」収録		
8	4	1		222	(書写原稿)	内田武志「あとがき」(「菅江真澄未刊文献集一」、昭和28年12月30日)		
8	4	2		223	(雑誌)	「みちびき」第1号(昭和28年12月)、内田ハチ「編集室だより」、須藤春代「みちびかれて」「詩章」など		

通番	備考（「」内は文面の要約）
160	「静岡県方言誌」第二輯童幼語篇送本への返礼。
161	内田武志のアチック入所の経緯（昭和11年8月）、三田への引越し、「静岡県方言集」「方言分布図」のこと。この頃すでに、内田武志は歩けなくなっていた。
162	「知里真志保、崔応錫が東大卒業。崔は東大医局（「武自身の年譜」に出てくる）、知里は北海道庁嘱託に」
163	「洪沢敬三の『魚名集覧』がまだ続いている。内田（ハチ）等が東書文庫で教科書から魚名を収集している。『静岡県方言誌』第三輯にかかっている」
164	「洪沢敬三『魚名集覧』の関係で、木島・内田（ハチ）がメダカ方言カード約八千枚の整理完了」
165	「王子の東書文庫で教科書700冊閲覧。カード整理を木島・内田（ハチ）両氏がおこなっている。『目高考』から採録したカードはいよいよ原稿浄書に着手した」
166	「編集室では内田女史（ハチ）統監の下に魚名索引製作に着手。…採録魚名数は約一万三千と推定」
167	静岡市大火お見舞いの返事。「鷹匠町は罹災を免れた」
168	「静岡県方言誌」第三輯民具篇送本への返礼
169	「洪沢敬三の勧めで東大病院に入院し、少量の輸血によって血液を凝固させる治療法があることを知った。静岡県方言誌第三輯が刊行されたが、歩行は不可能になり、危篤に陥った。洪沢敬三らが見舞いに来ると、異常に興奮して死期を脱した」
170	最終部分で、記述の大部分が上記資料と被る。
171	関敬吾「羽衣考」に「天人女房話と七夕のいわれの複合」などと内田武志の書き込みがある。日本民族学会は8年間で解散すると「編輯後記」にある。
172	「犬飼七夕譚」に朱線がある。
173	内田武志による写し（用紙裏も）。朝鮮新義州府栄町吉野商店用紙。「『俳句研究』（昭和十年七月号）俳諧歳時記を民俗的に解釈して見ようとした企ての一つ。此外二三篇で挫折した。／沖繩でも村によっては、たなばたと云ふ語が洗骨（せんこつ）を意味する。此日に死者を洗ったからだ。／『俳句研究』昭和十一年七月に柳田先生が「七夕」の事をお書きになった」とメモ書きがある。
174	
175	父修三の容態を気遣う、「泰然として而して繊細に御世話相成る様」。《奥の手ぶり》「やらくさ」の絵葉書。
176	昭和19年12月7日発生。災害史として重要。蒲原有明（隼雄）の住居は、静岡市鷹匠町2-3。「大丈夫だが、地域によって被害が異なる。地震当日の夜分に奴さんから当地郊外にお土産があり、市民は緊張している。そちらも随分危険のように思う」
177	「秋田市に疎開のことを聞いた。家は空襲で焼けた。防空壕で、しかも腰から下が水につかって猛炎を防ぎ、辛うじて助かった。宛先住所：秋田市植山愛宕下16伊藤氏方。蒲原の立退先が書かれている。
178	出向命令は東京都、辞令は秋田県。封書は出向命令が入っていたもので（大きさから）、昭和20年10月15日消印、秋田県立女子医学専門学校内内田ハチ宛。
179	沿革より、「昭和14年休館。昭和21年4月1日、故立山第四郎翁嗣子廉吉氏より、私立立山文庫蔵書10,745冊が毛馬内町（町長伊藤良三氏）に寄贈され「立山文庫継承毛馬内町立図書館」設立」。
180	「伊藤為憲の生誕200年に当たる。文政10年、郷里の狭布と「錦木縁起」が奇縁となって「鹿角縁起」を書いて生家へ送った。私は深澤多市の要請で解説し、「秋田叢書」第8巻に収めた。伊藤良三は、為憲の長兄慶里の玄孫である。伊藤良三の略歴と著書。黒沢禮斎について。
181	「鹿角学最後の長老で、「鹿角方言考」を著した。3月24日に東京で101歳で亡くなった」
182	「立山文庫は大正2年、立山第四郎夫妻が銀婚式を迎えた記念事業として、旧毛馬内町に創設した」
183	
184	年譜風にまとめている。
185	「立山文庫創立70周年記念事業の一環として、創立者である立山第四郎の長男廉吉の遺稿集「郷土植物方言考」が刊行された」
186	
187	
188	祭典文庫用紙（朱枠）
189	表紙、目次、真澄関係前半
190	「はしがき、真澄翁と秋田、真澄翁の業績、真澄翁と北海道、菅江真澄翁の北海道紀行の価値。《えぞのでぶり》を寛政4年だろうとしている（10頁）。
191	

F		・	・	枝番	通番	(資料形態)	資料名
5	3	2	①	160	(書簡、書写原稿)	蒲原有明書簡 (蒲原隼雄)、昭和12年3月6日付	
5	3	2	②	161	(伝記原稿…用紙4枚)	内田ハチ「アチックあのごろ」(草稿)【日本常民生活資料叢書月報23、渋沢敬三(上)掲載】	
5	3	2	③	162	(書写原稿)	アチックマンスリー第22号「築立つ鳳雛!」(昭和12年5月)	
5	4	1	①	163	(書写原稿)	アチックマンスリー第35号「DIARYなど」(昭和13年5月6日合併号)	
5	4	1	②	164	(書写原稿)	アチックマンスリー第36号「各部報告」(昭和13年7月)	
5	4	1	③	165	(書写原稿)	アチックマンスリー第37号「各部報告、魚名編集室」(昭和13年8月特輯号)	
5	5	1		166	(書写原稿)	アチックマンスリー第43号「MEMO欄—魚名集覧編集室」(昭和14年4月)	
5	6	1		167	(書簡、書写原稿)	蒲原有明ハガキ、昭和15年1月25日付	
5	7	1	①	168	(書簡、書写原稿)	蒲原有明書簡、昭和16年12月26日付、小為替を入れたため書留にしている	
5	7	1	②	169	(伝記原稿…原稿1枚・用紙4枚)	内田ハチ「アチックあのごろ」(草稿)【F5-3-2-②の続き】	
5	8	1		170	(伝記原稿…書きかけ原稿1枚)	内田ハチ「アチックあのごろ」【F5-3-2-②、F5-7-1-②の続き、昭和17年 年譜資料に入る】	
6	1	1		171	(雑誌)	「民族学研究」第8巻第4号(昭和17年12月号だが実際は昭和18年3月発行)、関敬吾「羽衣考」 掲載	
6	1	2		172	(雑誌切抜)	柳田国男「大飼七夕譚」「山郷風物誌」「木曾民謡集」「新野の盆踊(一部)」「(信州随筆) —山村 書院、昭和11年—)	
6	1	3	①	173	(書写用紙)	折口信夫「たなばた供養」(短歌文学全集釈詠空篇—昭和12月1月出版—より)	
6	1	3	②	174	(書写用紙)	折口信夫のタナバタに関する考えの写し	
6	2	1	①	175	(書簡、書写原稿)	渋沢敬三八ガキ内田ハチ宛、昭和19年4月12日付	
6	2	1	②	176	(書簡、書写原稿)	蒲原有明ハガキ、昭和19年12月11日付…昭和東南海地震お見舞いへの返信	
6	3	1	①	177	(書簡、書写原稿)	蒲原有明ハガキ、昭和20年6月26日付	
6	3	1	②	178	(辞令等)	内田ハチ、都立葛飾高等女学校から秋田女子医専へ出向命令(昭和20年9月25日付)、辞令(昭 和20年9月30日付)	
6	4	1		179	(冊子)	「創設70年記念誌 立山文庫」(昭和57年12月25日発行)	
6	4	2	①	180	(新聞切抜)	高橋克三「毛馬内の三先輩 為憲、良三、履斎について」(秋田魁新報、昭和42年)	
6	4	2	②	181	(新聞切抜)	高橋克三「秋田の人物 百寿翁 大里武八郎」(秋田魁新報、昭和47年5月27日)	
6	4	2	③	182	(新聞切抜)	「立山文庫創設70年 記念誌を発刊」(秋田魁新報、昭和58年1月6日)	
6	4	2	④	183	(書簡)	秋田魁新報地方部・内田ハチ宛、昭和58年1月8日付、『創設70年記念誌 立山文庫』寄贈	
6	4	2	⑤	184	(書簡)	高橋正志ハガキ内田ハチ宛、昭和58年1月10日付、立山文庫の設立と経緯について	
6	4	2	⑥	185	(新聞切抜)	「立山文庫創設70年記念事業の一環 翁の長男の遺稿集を発刊」(秋田魁新報、昭和58年1月13日)	
6	4	2	⑦	186	(書簡)	内田ハチ宛鹿角市立立山文庫継承十和田図書館、昭和58年2月5日付、伊藤良三関係コピー請求書	
7	1	1	①	187	(地図)	松前上陸関係地図(薄用紙、二十万分の一地図の写し)	
7	1	1	②	188	(原稿19枚…武志自筆)	松前上陸関係—未來社「菅江真澄の旅と日記」原稿—(517～535の番号あり)	
7	1	2		189	(写真3枚)	松風夷談	
7	1	3		190	(冊子)	「香蘭」第5号(北海道大学秋田北盟寮香蘭会、昭和12年)、高倉新一郎「菅江真澄翁について」	
7	1	4	①	191	(雑誌切抜)	内田武志「海と星」(「漁村」昭和21年12月)	

通番	備考（「」内は文面の要約）
129	「静岡地方ではたいてい屋敷の一隅に地の神様を祀る。簡単に藁で作った祠は、毎年の祭日に作り替える。昨年4月の調査。報告者は主に静岡女子師範学校の生徒」。祠の作り方について6種11形態に分類した上で、静岡県下の報告を地域ごとにまとめる。
130	莢（さや）を叩く7種の道具（形状と概略）と静岡県下の呼び方。
131	「昭和8年3月に青森県女子師範学校生徒及其他2、3の小学校に依頼して方言調査を行った時、鳥に関する方言と共に其説話も記載する様に願っていた。其時に調査紙の裏面に記され報告せられた昔話を次に掲げる」。16の昔話と6の俗信。
132	報告は2つに分かれる。「昭和8年3月に青森女子師範学校の生徒諸氏と、同県下の小学校数校に方言調査紙を配布して、各自郷土の方言を記入してもらった」[次は青森県下北部田名部町小学校の川森則次先生が、其受持の高等一学年生徒56名について方言調査をされたもので、方言の下の数は報告者の人数を示すのである]
133	上記報告の前半部分の続き。
134	「雑誌の形式になって第一号が出された。飯塚氏から何か書くように依頼された。猫柳に関する静岡県下の方言を並べてみる。「静岡県方言集」編集以後に蒐集調査したものであるため、未発表である」
135	「静岡県方言誌」[方言分布図]に言及。「東條操が「あなたのように方言分布図を出版してもらえる人は幸福だ」と言った。東西両方言の接触地静岡県で、自分の唱えた方言区画説が証明されていくのを何よりも喜んでた」
136	「静岡県方言誌」第二輯「方言分布図」に言及。「あのような贅沢な著色記号をした分布図なんか、普通の出版屋なんかでは、容易に出なかつたらうとまだに思っている（前富士県立図書館長）」
137	内田武志がアチックミュージアムに入る。
138	「OPINION 社会衛生調査に関する覚え書 崔応錫」[DIARY ○8月7日 宮本常一氏来館 ○9月6日 内田武志氏来館]
139	アチックミュージアムを初めて訪ねて（アチックマンスリー第6号）、多くの知己を得たこと。磯貝勇が初めて内田武志に会った時の文章（『菅江真澄のふるさと』）を引く。静岡県全域の調査経過とその援助を頼んだ、とある。
140	表裏の別なし。いずれにも参考例と表記上の注意がある。幼な言葉の調査には「次の語を幼児の使用する言葉で記入せよ」とある。上記伝記原稿に、「星座方言調査用紙」に続いて、最後の活版刷りとなる「星に関する方言の調査」を昭和9年に刷ったとある。
141	小屋、籠3種、漁船と網、浜の小屋の6種13枚。袋に「内田武志撮影」とある。
142	着物姿の内田武志、その上に磯貝勇、中央に渋沢敬三、他18人。
143	内田武志がはじめてアチックミュージアムを訪れる。「DIARY 11月7日 内田武志氏来館滞在 11月10日 内田武志氏辞去」とある。【F4-3-2-①】にある磯貝勇の文章に符号する。
144	同上
145	磯貝勇との関係。この時、磯貝勇は愛知県文化財専門委員。
146	アチックミュージアムにおける民具研究は、昭和10年度の足半草履研究からはじまった。内田武志の名は出てこないが、「中略文重要」とのメモ書きがある。
147	「山姥と子僧」「あらんこ ころんこ」。末尾に「註 二話とも昭和五年九月採集、話者、阿部てい、四十九歳」とある。
148	前号の続き番号。「生れ子の運定め」「子供育て」「雉の卵」「ホンデギとマハチブ」「狐と川獺」「悪戯小僧」。「昭和六年六月採集、秋田県鹿角郡尾去沢村、話者栗山てい（五十七歳）」と「以上二話宮川村、昭和五年九月採集、話者阿部てい、四十九歳」と2人の話者を記す。
149	当時の使用例、形態の変化、鼻緒の結び方の違い、足半にまつわる俗信を冒頭に述べる。「アチックミュージアムでまもなく足半草履の全国的蒐集調査を計画している。これは本年一月に県下各農学校に方言調査表を依頼して得た方言の整理である」
150	「昨年の秋県下各小学校に方言調査紙を配布し報告を受けたものの整理である。この二語彙は方言量も多くはなく、空欄のまゝの処も少なくはなかつた。又其の幼虫と云ふのを幼な言葉を思ひ違ひしたのもや、脱殻前の幼虫のを、単に小蟬、小蜻蛉の事として報告されたものなどがあつた。調査用紙に詳細な説明と図でも附せばよかつたと後で思った事である。（一〇・四・一三）」
151	第一輯動植物篇（昭和11年10月30日）、第二輯童話篇（昭和12年2月10日）、第三輯民具篇（昭和16年4月10日）、蒲原有明書簡（昭和11年4月19日付、9月8日付、12月22日付）【実物はF4-1-6】、蒲原有明書簡（昭和12年3月6日付）【実物はF5-3-2-①】、宮本常一（大阪にて）（武志のアチック入り。アチックマンスリー第14号、昭和11年8月30日）。東條操と大田栄太郎が採訪。渋沢敬三の勧めで東大病院に入院。
152	
153	
154	「折口信夫を中心として民俗学会が組織され、雑誌『民俗学』が昭和4年（1929）7月に発刊される。昭和8年12月、第5巻12号で終刊。岡村千枝が編集責任者」
155	
156	「[北越雪譜]の農の記述に刺激を受けた。静岡県方言誌編集のため、昨年一月（昭和10年）に当県下各地方における民についての簡単な調査をした」。14図で説明。
157	
158	第13号昭和11年7月30日、第15号9月15日、第17号11月1日
159	星の方言採集の留意点について冒頭に述べる。「星座は時刻と見える場所によって形が違ふため、時刻や方向などの詳細な注記が必要。星にまつわる俗信、説話などは必ず採録したい」。北極星など、12の星座と星を紹介。

F				枝番	通番	(資料形態)	資料名
4	2	7		129	(コピー)	内田武志「地の神様」(『旅と伝説』第7巻4号、昭和9年4月)	
4	2	8	①	130	(コピー)	内田武志「莢を叩く農具の方言=静岡県=」(『土の香』第11巻1号、昭和9年1月、謄写版)	
4	2	8	②	131	(コピー)	内田武志「鳥に関する昔話=青森県=」(『土の香』第12巻1号、第66号、昭和9年4月、謄写版)	
4	2	8	③	132	(コピー)	内田武志「青森県方言調査報告(其一)」(『土の香』第12巻3号、昭和9年6月、謄写版)	
4	2	8	④	133	(コピー)	内田武志「青森県方言調査報告第2回一幼な言葉一」(『土の香』第12巻5号、第70号、昭和9年7月、謄写版)	
4	2	9		134	(コピー)	内田武志「柳の花芽の方言について」(雑誌『志豆波多』第2号、昭和9年7月1日)	
4	3	1	①	135	(書写原稿)	内田武志の回想(日本常民生活資料叢書14、中部篇(2)、解説1110頁)	
4	3	1	②	136	(書写原稿)	大田栄太郎「静岡県方言誌」分布図に思う(『渋沢敬三』上、330~331頁)	
4	3	1	③	137	(書写原稿)	宮本常一「大阪にて」(アチックマンスリー第14号、昭和11年8月30日)	
4	3	1	④	138	(書写原稿)	アチックマンスリー第16号「DIARY」(昭和11年10月1日)	
4	3	2	①	139	(伝記原稿12枚、[17~28])	内田武志・方言等の調査について(昭和10年のこと)	
4	3	2	②	140	(調査票)	オモテ「星・月に関する俗信・昔話の調査」「幼な言葉の調査」、ウラ「星に関する方言の調査」	
4	3	3		141	(写真13枚)	静岡方言集資料写真・内田武志撮影(実地採集昭和10年2月)	
4	3	4	①	142	(写真1枚)	アチックミュージアム同人集合写真	
4	3	4	②	143	(冊子)	アチックマンスリー第6号(昭和10年12月30日)	
4	3	4	③	144	(書写原稿)	アチックマンスリー第6号「DIARY」から内田武志関係記事抜き出し	
4	3	5		145	(書写用紙)	磯貝勇「菅江真澄のふるさと」序文(昭和45年1月1日)【昭和10年、昭和39年の年譜資料として】	
4	3	6		146	(書写用紙)	宮本馨太郎「渋沢先生の生涯と博物館」(『渋沢敬三先生景仰録』第二部Ⅱ思い出 281頁)	
4	3	7	①	147	(コピー)	内田武志「鹿角郡昔話一秋田県鹿角郡空川村一」(『昔話研究』第2号、昭和10年6月5日)	
4	3	7	②	148	(コピー)	内田武志「鹿角郡昔話(二)」(『昔話研究』第3号、昭和10年7月5日)	
4	3	7	③	149	(コピー)	内田武志「足半草履の方言(静岡県)」(『文字と言語』6、1935年一昭和10一7月方言特輯号、謄写版)	
4	3	7	④	150	(コピー)	内田武志「蟬の幼虫と蜻蛉の幼虫の方言(静岡県)」(『土の香』第16巻2号、昭和10年9月)	
5	1	1		151	(伝記原稿43枚)	「静岡県方言誌」第一輯~第三輯出版の頃について	
5	2	1	①	152	(書写原稿)	「鹿角方言集」内田武志「自序」抜書き(昭和11年9月5日、言語誌叢刊第3期の一冊として、刀江書院)	
5	2	1	②	153	(書写原稿)	「鹿角方言集」東條操「序」	
5	2	1	③	154	(書写原稿)	牧田茂著「柳田国男」中公新書からの抜書き	
5	2	2		155	(書写原稿)	「静岡県方言誌」分布調査第一輯動物篇「序」(昭和11年10月30日、アチックミュージアム彙報第六)	
5	2	3		156	(雑誌切抜、コピー)	内田武志「農の様式と方言」(『旅と伝説』第9巻4号、昭和11年4月)	
5	2	4		157	(コピー)	内田武志「田植時に苗を選び配る役の方言(静岡県)」(『文字と言語』昭和11年11月、謄写版)	
5	2	5		158	(書写原稿)	アチックマンスリー第13号、第15号、第17号(いずれも昭和11年)「MEMO」欄(「静岡県方言誌」発刊と分布図について)	
5	3	1		159	(コピー)	内田武志「星の方言採集」(『方言』第7巻5号、昭和12年6月)	

通番	備考（「」内は文面の要約）
98	渡辺カネに関する問合せへの返信。渡辺カネは常田純の祖母で、十勝に住んだ人。
99	
100	贈呈本への返礼。索引を付けることなどをアドバイスしている。「知里さんから音沙汰がない。高志路を手伝っている」。新潟市立工業高等学校勤務。宛先住所：秋田市保戸野川反11
101	佐渡の絵葉書。「古美術のグループに便乗して佐渡に行ってきた」
102	12日に教会で葬儀をおこなった。大正15年1月10日に鎌倉教会から転入。「鹿角方言集」は寛と武志が編集したとして、今秋出版を予告。「鹿角方言集」は言語誌叢刊の一冊として昭和11年9月に刊行。自序は昭和8年、追記に寛と中村協平について言及する。
103	内田武志が亡くなった兄の方言関係の原稿を出版しようとしたのに対し、原稿を東條操などが見ていないので整理して批評を受けるよう勧める。墓地の地名（『旅と伝説』第6巻9号、昭和8年9月）に対して間違いだと指摘する。書簡の結びは「内田武志君」。
104	いずれも秋田に来ている。①武藤鉄城同行、②吉田三郎宅泊、③菅江真澄墓碑、石川理紀之助旧跡訪問
105	昭和8年9月30日～10月3日・3泊4日、渋沢敬三一行による秋田岩手の旅の案内記。（二）で小木田家軸装二点の最近発見についての言及がある。
106	題に「三、静岡県の方言民俗調査と昔話調査 ①『静岡県方言集』とある。『静岡県方言集』は、昭和9年2月25日、静岡市谷島屋書店内鑑訳叢書刊行会第八輯として刊行。蒲原有明序文を含む。〔復後ハガキによる方言調査では効果が上がらないため、静岡県師範学校の協力を得た。『静岡県方言辞典』の地域分布が大雑把で役立たないため、原本のある師範学校で写したのがきっかけ〕
107	②「『静岡県伝説昔話集』とある。『静岡県伝説昔話集』は昭和9年3月、静岡市谷島屋書店、非売品、静岡県女子師範学校郷土研究会編として刊行。原稿整理を内田武志がおこない、編集者として教諭森田勝の名がある。柳田国男からは、評価とすぐに優れた話者に接触しなかったことへの苦言があった。」
108	『静岡県方言集』贈呈の返礼。「静岡に帰省した折に会いたい。法月氏によるしく」
109	『静岡県伝説昔話集』贈呈の返礼。「うぶな筆致にて方言のままにて報告あるなど却て興味多く候」
110	静岡帰省の際に面会するため、日程を知らせる。
111	「風邪で静養のため、静岡には帰省しなかった。申し訳ない」
112	「面会でできて良かった。本日から柳田国男が京大で約2週間に亘って民間信仰について講義をする予定。静岡での話をした。30日には方言の会が催される予定」
113	静岡県立葵文庫（現：静岡県立中央図書館）。渋沢敬三はこの時、静岡県葵文庫長貞松修蔵から内田武志を紹介された（『歩けぬ探訪者』、『日本星座方言資料』序）。
114	昭和12年貞松修蔵葵文庫初代館長の尽力で活字化された。
115	静岡県立中央図書館所蔵。全5巻別巻1。大槻文沢、宇田川榕庵による江戸時代最大のショメール百科事典翻訳。
116	「東京女子高等師範学校を卒業し、ハチ自身も希望しているので、まだ求人に空きがあったら成城小学校の理科教師候補に入れてほしい」
117	「前二輯のように、方言とその使用地を羅列するだけでなく、簡単な解説と図版説明を付けた。ただ、方言系統別による民具の形状との関係、形状からみた名称と使用地の関係などの観点から整理して説明すべきであった」[具合が悪く、第二輯の刊行後4年もかかってしまった]
118	訪ねてきた内田武志に郷土研究を勧めたこと、武志自身による実地調査に基づくことなどを書く。
119	「静岡方言誌第一輯のいよいよできることを喜びたい。借用していた民間伝承を返却する。民俗の詳細を極めた報告書は頭に入らなくなってきているので、柳田国男から大局的な論文を出してほしい」
120	「鹿角方言集」贈呈の返礼。「原稿を初めて見せてもらったときの驚きが忘れられない。序文で東條操が『静岡県方言集』を推奨しているのも快心である。東京への転居を別家族だと誤解していた。容易に会うことができず寂しく思う」
121	「静岡県方言誌 分布調査第一輯 動植物篇」贈呈の返礼。「寄贈ばかりもいけないので送金をする。次篇も送ってほしい。武志が静岡を離れてから、民俗学に疎くなってしまった。（内田家の引越しの理由は、【F5-1-1】にあり）」
122	「前年の『方言』【F3-2-1】に、三つ星・すばる星・北極星・北斗七星・明星を載せたので、それ以外の小熊座など10の星座の方言。県外の資料の中には野尻抱影収集を拝借したものもある。発行：静岡県郷土研究協会（静岡県県庁教育課内）」
123	昭和8年～同9年4月までに3回に亘って調査紙を配布。主に静岡女子師範学校の生徒が帰省した際に収集したものを整理。既刊書からは採っていない。教師は森田勝であることを冒頭の凡例に明示。
124	「天体星座に関する方言と俗信を蒐集したいと思って努力している。調査は、静岡男女両師範学校、焼津水産学校、各地の中小学校からの協力を得た」。流星の方言と流星の俗信。
125	同上。月、天の河、彗星、白昼の星、雲中の星、星を数へる、其他の俗信。
126	「定まった日にだけ作る餅や団子などで、特に名称を持つものだけを整理した」
127	「田下駄の方言と形態について本年三月頃に調査してみた」。14図。遠州地方では用いず、伊豆地方と富士山麓で用いることを地質から考察している。『旅と伝説』は脱稿日を明示しており、ここでは末尾に（九・四・卅）とある。
128	「一昨年の秋、焼津地方の漁業に人々を調べるために歩き回った時に聞いた昔話である」と聞き取り調査時のようすを冒頭に書く。「焼津水産学校の生徒2人が、郷里の漁村語彙を調べてくれた。→次城県平磯町・福島県小浜町」

F						枝番	通番	(資料形態)	資料名
3	4	5	①	98	(書簡) 常田純(浪岡町) 書簡内田ハチ宛、昭和57年10月21日付				
3	4	5	②	99	(書簡) 常田純書簡内田ハチ宛、昭和57年10月21日消印、「とちかち奇談」・「続とちかち奇談」のコピー入				
3	4	6	①	100	(書簡) 磯貝勇ハガキ、昭和32年6月17日付				
3	4	6	②	101	(書簡) 磯貝勇ハガキ、昭和32年8月4日付				
3	5	1		102	(用紙) 内田寛死亡報(昭和8年8月10日、静岡日本基督教会月報 昭和8年8月20日付)				
3	5	2		103	(書簡、書写原稿) 柳田国男書簡、昭和8年9月5日付				
3	5	3	①	104	(書写原稿) 渋沢敬三『犬歩当棒録』の旅程(①昭和8年9月、②昭和9年9月~10月、③昭和17年7月19日~26日)				
3	5	3	②	105	(新聞コピー) 武藤鉄城(物好庵)「奥羽山脈に橋門を描く(一)~(二十)」(昭和8年11月4日から掲載、秋田魁新報)				
3	6	1		106	(伝記原稿24枚)『静岡県方言集』(昭和9年2月)について				
3	6	2		107	(伝記原稿11枚)『静岡県伝説昔話集』(昭和9年3月)について【上記F3-6-1の続き】				
4	1	1	①	108	(書簡、書写原稿) 新村出(京大大学教授)ハガキ、昭和9年3月2日付				
4	1	1	②	109	(書簡、書写原稿) 新村出ハガキ、昭和9年3月28日付				
4	1	1	③	110	(書簡、書写原稿) 新村出ハガキ、昭和9年4月15日付				
4	1	1	④	111	(書簡、書写原稿) 新村出ハガキ、昭和9年4月20日付				
4	1	1	⑤	112	(書簡、書写原稿) 新村出ハガキ、昭和9年5月22日付				
4	1	2	①	113	(コピー) 渋沢敬三の名のある芳名録(県立図書館名士芳名録昭和9年8月5日)				
4	1	2	②	114	(コピー)『厚生新編』旧版(昭和12年)の巻頭頁、献辞「謹みて 子爵故渋沢栄一氏の霊に捧ぐ」とあり。				
4	1	2	③	115	(パンフレット)『厚生新編』(発行は昭和53年)の出版内見本				
4	1	3		116	(紹介状) 内田ハチに関する柳田国男による仲原善忠への紹介状(柳田国男自筆)				
4	1	4		117	(書写原稿) 内田武志『静岡県方言誌 分布調査第三輯 民具篇』後記(昭和16年4月10日発行)				
4	1	5		118	(原稿12枚) 蒲原有明序文『静岡県方言集』(昭和9年2月発行)				
4	1	6	①	119	(書簡、書写原稿) 蒲原有明書簡(蒲原隼雄)、昭和11年4月19日付、宛先住所:静岡市西草深町73				
4	1	6	②	120	(書簡、書写原稿) 蒲原有明書簡(蒲原隼雄)、昭和11年9月8日付、宛先住所:東京市芝区三田台町一丁目17				
4	1	6	③	121	(書簡、書写原稿) 蒲原有明書簡(蒲原隼雄)、昭和11年12月22日付、宛先住所:東京市杉並区馬橋4ノ491				
4	2	1		122	(別刷、コピー) 内田武志「星座和名小考—静岡県を中心にして—」(『静岡県郷土研究』第三輯、昭和9年7月18日)				
4	2	2		123	(別刷、雑誌切抜) 内田武志『静岡県の幼言葉』(『方言』第4巻8号、昭和9年8月)				
4	2	3	①	124	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「流星の方言と俗信其他(一)」(『旅と伝説』第7巻9号、昭和9年9月)				
4	2	3	②	125	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「流星の方言と俗信其他(二)」(『旅と伝説』第7巻10号、昭和9年10月)				
4	2	4		126	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「餅と団子の名称(静岡県)」(『旅と伝説』第7巻1号、昭和9年1月)				
4	2	5		127	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「田下駄の方言と形態」(『旅と伝説』第7巻6号、昭和9年6月)				
4	2	6		128	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「海の話と語彙」(『旅と伝説』第7巻2号、昭和9年2月)				

通番	備考（「」内は文面の要約）
66	「大正初年に編纂されて今写本で残っている当静岡県の名町村誌を見ると、墓地に関する事項中に其墓地の置かれてある小学名が記されている」として、安倍郡清沢村誌、同中瀬科村誌、同三和村誌、同大河内村誌、同有度村誌から拾っている。【F3-5-2に柳田国男による批判的な論評有】
67	大子講について、雪国の習俗と比較した上での静岡県内各町村誌からの抜き出し。
68	「初夏の頃、筍が小枝を出し始めた新竹を二節ほど切り、先を小石などで叩いて繊維ばかりにする。それをういて子どもらが遊ぶ。静岡県内では、病のまじないにしたところもある」
69	「国語」静岡県師範学校国語科、静岡吉見書店発行（次項参考のこと）。「日本には星に関する文学や伝説が乏しいが、常民が星に無関心であったわけではない。地元の星の話を集めてみると、説話・異名など興味深いはずだ。北極星と北斗七星の例を挙げる」
70	【F3-3-4-C】の再掲であるが、法月俊郎の勧めで新語彙を加えると序文にある。210語近くを挙げる。「自分が近年静岡市近郊の漁村を歩いてみて、…」とある。発行は、静岡県郷土研究協会（静岡県庁教育課内）。星の方言に関しては、静岡民友新聞と「国語」（静岡県師範学校国語科発行）に掲載したと巻末にある。
71	ジャンケンのかげ声55種と名称（かけ声の種類とは一致しない）を書いている。地域を示している。
72	「新刊雑誌要目」に「方言」第3巻第2号「静岡市近傍漁業語彙」の紹介があり、「採集の内では、高尚な部門である」の寸評がある。
73	土人形、紙人形のそれぞれの方言を挙げる。末尾に（八・二・二四）とある。総目録に書き出しあり。4号「静岡県植物方言」、5号「家畜を呼び寄せる語」、7号「静岡県蠶地獄方言集」、8号「静岡県団栗方言」、10号「静岡県ジャンケン称呼集」、12号「静岡県人形方言集」
74	「新刊雑誌要目」に「土の香」第9巻第2号（4月）「斑魚（メダカ）の方言」の紹介があるが寸評はなし。
75	「新刊雑誌要目」に「土の香」第50巻（5月）「静岡県蛭蛭の方言」の紹介があり、「蛭蛭の汎称がこれ程あるとは予想しなかった。これだけは真似手が出ない」の寸評がある。
76	
77	「新刊雑誌要目」に「土の香」51号（6月）「黒子と鍾の方言」の紹介があるが寸評はなし。
78	「近刊予告」に「秋田県鹿角方言集」、新刊雑誌要目」に「方言」第3巻第8号（8月）「星の和名（静岡県其他）」の紹介あり。寸評に「星の方言を集めて、これだけ成功した人は未だ嘗て無かった」とある。
79	「新刊雑誌要目」に「土の香」第10巻第2号（9月）「摺木と摺鉢の方言（静岡県）」の紹介あり。寸評に「そんなに力瘤を入れる程のものでもない」とある。
80	「方言地理（局部的）」で第2巻に1、第3巻に4、第4巻に2の論考。「方言語彙」で第3巻に2の論考。「土俗」で第1巻に1、第2巻に1の論考。会員に内田武志のほか、有賀喜左衛門、金田一京助、大藤時彦、東條操、折口信夫、磯貝勇らの名がある。秋田県は細谷則理だけ。
81	36種。末尾に「土のいろ」第8巻第5号に発表になりました。佐々木清治氏の丁斑魚名にありますものは、ここでは除きました」とある。
82	
83	「ホクロ」や「カカト」の標準的な呼び方は除くとする。伊豆地方は、両方とも標準的な呼び方とする。
84	
85	「昨年の夏、歩き歩いたものを不十分ではあるが先整理することにした」とある。安倍郡長田村、安倍郡大谷村、志太郡焼津町、3箇所調査を、方向・風・潮の満干・魚群・魚商・雑に関するものに分類。「方言」は春陽堂発行。
86	本誌第2巻第4号掲載の柳田国男「なぶさく」に刺激を受けた。静岡県と青森県の例を挙げるが、青森県の例については、「本年三月休暇に青森女子師範学校生徒諸氏と、小学校数校に方言調査を依頼することが出来た」とする。
87	書簡等を組み合わせた構成表（ハチによる）
88	宵の明星、暁の明星、すばる星、三つ星に関するアイヌ語の問合せ。2枚目だけであるため、下記資料とともに返送されたものか。
89	星に関するアイヌ語調査の戻し、古川辰五郎（アイヌ名を持つ）の住所を教示。
90	
91	
92	279頁に「内田武志氏から金田一京助氏に問ひ合されたアイヌの星名その他を報ぜられた」とある。
93	上記の記述についての間違いを直す意図があったか。
94	「地球が球形であることによる現象として、地球の南北では双方の星が見えなかったり、星座の一部が見えなかったりすることがある」などの部分を引いている。
95	内田武志が金田一京助にアイヌ語の星名（十勝地方）を尋ねたのに対する返書。金田一がわからないアイヌ語について、「誰が誰から聞いたか」を尋ねている。武志はそれを問い質していると感じた（次項の書簡から）。
96	6月6日付書簡に対する返答が内田武志からあったようだ。「誰が誰から聞いたか」を具体的に知りたかったのではなく、「誰がそう教えたか知らないか」という一文であったと述べている。アイヌ語星名を語釈。
97	6月25日付書簡と贈呈本への返礼。「自分自身の入院と療養、家族の入院が続いて返信ができなかった」。星名の資料を送るとの約束。危篤の父を見舞うために車中で書き、切手を貼らずに投函している。

F . . 枝番 通番 (資料形態) 資料名					
3	2	3	③	66	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「墓地の地名」(『旅と伝説』第6巻9号、昭和8年9月)
3	2	3	④	67	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「餅で表戸に「大」と書くこと」(『旅と伝説』第6巻11号、昭和8年11月)
3	2	3	⑤	68	(雑誌切抜、コピー) 内田武志「郷土玩具オカンジャケ異名集」(『旅と伝説』第6巻12号、昭和8年12月)
3	2	4		69	(コピー) 内田武志「星の話」(『国語』郷土研究号、昭和8年7月)
3	2	5		70	(コピー) 内田武志「静岡市近傍漁業語彙」(『静岡県郷土研究』第一輯、昭和8年10月27日)
3	3	1	①	71	(コピー) 内田武志「静岡県ジャンケン称呼集」(『方言と土俗』第3巻第10号、昭和8年2月10日、謄写版)
3	3	1	②	72	(コピー)『方言と土俗』第3巻第11号、昭和8年3月1日、謄写版
3	3	1	③	73	(コピー) 内田武志「静岡県人形方言集」(『方言と土俗』第3巻第12号、昭和8年4月10日、謄写版)、第3巻の総目録あり
3	3	2	①	74	(コピー)『方言と土俗』第4巻第1号
3	3	2	②	75	(コピー) 内田武志「「眩しい」の方言(静岡県)」(『方言と土俗』第4巻第2号、昭和8年6月10日、謄写版)
3	3	2	③	76	(コピー) 内田武志「静岡県人形遊びの方言」(『方言と土俗』第4巻第3号、昭和8年7月10日、謄写版)
3	3	2	④	77	(コピー)『方言と土俗』第4巻第4号、謄写版
3	3	2	⑤	78	(コピー)『方言と土俗』第4巻第5号、謄写版
3	3	2	⑥	79	(コピー)『方言と土俗』第4巻第6号10月号、謄写版
3	3	2	⑦	80	(コピー)『方言と土俗』第4巻第7号11月号、第1巻~第4巻総目録、会員名簿、謄写版
3	3	3	①	81	(コピー) 内田武志「丁斑魚の方言-静岡県-」(『土の香』第9巻2号、昭和8年4月、謄写版)
3	3	3	②	82	(コピー) 内田武志「静岡県蛸蛸の方言」(『土の香』第9巻3号、昭和8年5月、謄写版)
3	3	3	③	83	(コピー) 内田武志「黒子と踵の方言(静岡県)」(『土の香』第9巻4号、昭和8年6月、謄写版)
3	3	3	④	84	(コピー) 内田武志「摺木と摺鉢の方言=静岡県=」(『土の香』第10巻2号、昭和8年9月、謄写版)
3	3	4	①	85	(雑誌切抜) 内田武志「静岡市近傍漁業語彙」(『方言』第3巻2号、昭和8年2月)
3	3	4	②	86	(雑誌切抜) 内田武志「蛇に関する方言」(『方言』第3巻12号、昭和8年12月)
3	4	1	①	87	(メモ書き)「アイヌ星名資料」の構成
3	4	1	②	88	(▲書簡一部、書写原稿) 今井純宛内田武志書簡、昭和8年6月15日付
3	4	1	③	89	(△書簡、書写原稿) 今井純宛渡辺カネ書簡、昭和8年8月15日付 【△は他者宛書簡】
3	4	1	④	90	(書簡なし、書写原稿) 金田一京助ハガキ、昭和8年6月14日付 【F3-4-3-②に実物、書写原稿あり】
3	4	1	⑤	91	(書簡なし、書写原稿) 金田一京助書簡、昭和8年8月16日、見出しだけで内容の書写はなし
3	4	2	①	92	(コピー) 野尻抱影「アイヌの星」(『日本の星』、昭和11年、研究社)の一部
3	4	2	②	93	(メモ書き) 野尻抱影の記述と内田武志の報告等との対比表
3	4	2	③	94	(書写用紙)『プリニウスの博物誌I』より
3	4	3	①	95	(書簡、書写原稿) 金田一京助書簡、昭和8年6月6日付、封筒なし
3	4	3	②	96	(書簡、書写原稿) 金田一京助ハガキ、昭和8年6月14日付
3	4	4		97	(書簡) 知里真志保ハガキ、昭和32年8月10日消印

通番	備考（「」内は文面の要約）
33	
34	
35	武志の原稿「二度目の蒐集二」とあるにある「いつかそめたす」「ヲサメ」の解釈に対する批評で、手厳しい内容。「将来は成るべく読書と考察の方へ心を傾けたまふべく候」で結ぶ。宛先住所：静岡市西草深町73
36	
37	内田武志「年中行事—秋田県鹿角郡宮川村地方」は「資料・報告」としての位置づけ。
38	年中行事を発行月に合わせて掲載。他地方の報告と合わせて掲載された。
39	俗信の116項目を挙げる。
40	「鹿角方言」に対する批評。東條操の評価を伝えて出版した方がいいとする一方で、語彙と方言発音の区別、語彙がいたずらに多い、創作字は感心しない等の批評を交える。
41	長門狭山温泉への療養を勧める。お金の工面にも配慮している。
42	「昔話採集者の為に」（昭和6年4月「旅と伝説 昔話特輯号」）を読んで、昔話採集に今後とも励みたいと思った。鹿角郡地方の昔話りの特徴を述べる。
43	短編の童謡7編を採録。
44	じやくく（お手玉）唄を採録。
45	冒頭に（秋田県鹿角郡宮川村長峰、話者阿部てい四十九歳、以下同）とある。猿と蟹、米ぶぎ・粟ぶぎ、鼠の国、瓜子姫子、歌をうたふ猫の5話。掲載以外に6話の採集があったことが編集附記にある。
46	「子供の言葉」に調査者として参加とある。
47	「オヤカタ」「いとこ」の記述に、秋田県の例示として内田武志採録のものが出てくる。
48	諸外国と異なり、日本の文献に星や星座のことが出てくることは少ないが、人々は星や星座の動きを見ながら、農業や漁業などに励んでいたとする論旨で記述する。
49	
50	
51	稲架を2型式5種に分類して、静岡県内の分布と呼称を示す。
52	お手玉唄を採録。
53	コピーに「東京成城大学 柳田文庫蔵本複写」[S57.7.5 森山泰太郎]とある。
54	「方言と土俗」の編集者・発行者は盛岡市・橋正一、一言社。67種。末尾に「以上は静岡女子師範及男子師範生徒の一部に依頼して調査したものである（十二月七日）」とある。
55	「曼珠沙華、桑の実、椿の実、椿の苔、酢漿草（かたばみ）、鳳仙花、露の臺、莚」
56	「ぢやんけん称呼補遺」もある。
57	蟻地獄方言56種。他に遊び方、地蜘蛛の方言を若干例記載する。
58	19種。
59	コピー冒頭に「雑誌『静岡県郷土研究』1～20（創刊～終刊、昭和8年～昭和17年）の復刻が刊行されたのでその巻頭に序文の気持ちで書いたもの（飯塚記す）」とある。志豆波多会、静岡県郷土研究協会設立時の柳田国男講演、法月俊郎、県立図書館長貞松修蔵についての記述あり。
60	
61	静岡県の「北極星、北斗七星、金星、昴星、三つ星」の呼称と星にまつわる俗信。冒頭に、「一個人では微力で広範囲にはできないため、静岡男子師範、女子師範、焼津水産、豆陽中学校及び各小学校、その他の方々の協力を得た」とある。
62	鹿角と静岡における同様の話の紹介。鹿角（昭和6年6月12日、秋田県鹿角郡尾去沢村 栗山てる氏談）、静岡（加藤わい子氏報）。
63	「民俗学」6月号の桜田勝徳「アテといふ事」（船上で方角や位置を知るための目印）に対する所感。野尻抱影書簡、大言海、雑誌論考などをさまざまに引用して論を述べている。
64	結婚式の日取り決めから始まり、結婚式の当日から四日目におこなわれる手伝い人の慰労までの流れを詳細に記録している。
65	埋葬後墓場に立てるものの型式を13図で説明する。末尾に（昭和八年四月調査）とある。

F					枝番	通番	(資料形態)	資料名
1	4	3	⑤	33				(冊子)「菅江真澄の日記」(昭和23年8月10日発行)
2	1	1		34				(戸籍) 内田修三家戸籍【※非公開】
2	2	1	①	35				(書簡、書写原稿) 柳田国男書簡、昭和5年10月20日付
2	2	1	②	36				(コピー) 静岡県立葵文庫来館記念芳名録・柳田国男部分、昭和5年3月9日
2	2	2	①	37				(コピー)「民俗学」第2巻目次(昭和5年分)
2	2	2	②	38				(コピー) 内田武志「年中行事—秋田県鹿角郡宮川村地方」掲載分、「(民俗学) 昭和5年2月、3月、5月、7月、10月、11月)
2	2	2	③	39				(コピー) 内田武志「秋田県鹿角郡宮川村地方俗信集」、会員名簿(二)「(方言と土俗) 第1巻7号、昭和5年12月10日、謄写版)
2	3	1	①	40				(書簡、書写原稿) 柳田国男書簡、昭和6年8月20日付
2	3	1	②	41				(書簡、書写原稿) 柳田国男書簡、昭和6年12月14日付
2	3	2		42				(▲書簡草稿) 柳田国男宛内田武志書簡草稿、昭和6年4月【▲は内田武志及びハチ発書簡】
2	3	3	①	43				(コピー) 内田武志「秋田県鹿角郡宮川村地方童謡」(「民俗学」第3巻3号、昭和6年3月)
2	3	3	②	44				(コピー) 内田武志「(童謡) 秋田県鹿角郡花輪町・尾去沢・宮川村地方」(「民俗学」第3巻4号、昭和6年4月)
2	3	4		45				(コピー) 内田武志「鹿角郡昔話」(「旅と伝説」第4巻第4号、昭和6年4月)
2	3	5	①	46				(コピー) 内田武志「鹿角の童謡」(「方言と土俗」第2巻第2号、昭和6年6月10日、謄写版)
2	3	5	②	47				(コピー)「親族名の報告」に内田武志が調査者として参加(「方言と土俗」第2巻第7号、昭和6年11月10日、謄写版)
2	4	1	①	48				(コピー) 静岡民友新聞・内田武志「星に関する県下の方言と俗信(1)」昭和7年5月15日【F18-5-5が元原稿】
2	4	1	②	49				(コピー) 静岡民友新聞・内田武志「星に関する県下の方言と俗信(2)」昭和7年5月22日
2	4	1	③	50				(コピー) 静岡民友新聞・内田武志「星に関する県下の方言と俗信(3)」昭和7年5月29日
2	4	2		51				(雑誌切抜) 内田武志「静岡県稲架の方言と様式」(「方言」第2巻第10号、昭和7年10月)
2	4	3		52				(コピー) 内田武志「秋田県鹿角郡花輪町地方童謡」(「民俗学」第4巻第11号、昭和7年11月)
2	4	4		53				(コピー) 内田武志「静岡県片足飛方言」(「土の香」第8巻第1号、昭和7年11月、謄写版)
2	4	5	①	54				(コピー) 内田武志「静岡県飯事方言」(「方言と土俗」第2巻第12号、昭和7年4月10日、謄写版)
2	4	5	②	55				(コピー) 内田武志「静岡県植物方言」(「方言と土俗」第3巻第4号、昭和7年8月10日、謄写版)
2	4	5	③	56				(コピー) 内田武志「家畜を呼び寄せる語(秋田県鹿角郡宮川村)」(「方言と土俗」第3巻第5号、昭和7年9月10日、謄写版)
2	4	5	④	57				(コピー) 内田武志「静岡県蟻地獄方言集」(「方言と土俗」第3巻第7号、昭和7年11月10日、謄写版)
2	4	5	⑤	58				(コピー) 内田武志「静岡県栗栗方言」(「方言と土俗」第3巻第8号、昭和7年12月10日、謄写版)
2	4	6		59				(コピー) 飯塚伝太郎「静岡県の郷土研究史」(昭和57年4月) …「静岡県郷土研究」の寄稿者・内田武志に関する記述あり
3	1	1		60				(メモ書き) 渋沢敬三著『祭魚洞雑録』の抜書き(昭和8年12月30日、郷土研究社・岡村千秋)
3	2	1		61				(別刷、雑誌切抜) 内田武志「星の和名」(「方言」第3巻第8号、昭和8年8月)
3	2	2	①	62				(コピー) 内田武志「猫の尾の毒—毒を感知する鳥から—」(「民俗学」第5巻第5号、昭和8年5月10日)
3	2	2	②	63				(コピー) 内田武志「酒祈星(さかますほし)」(「民俗学」第5巻第10号、昭和8年10月)
3	2	3	①	64				(雑誌切抜、コピー) 内田武志「各地の婚嫁習俗—秋田県鹿角郡宮川村地方」(「旅と伝説」第6巻1号、昭和8年1月)
3	2	3	②	65				(雑誌切抜、コピー) 内田武志「静岡県の墓地覆ひ」(「旅と伝説」第6巻7号、昭和8年7月)

通番	備考（「」内は文面の要約）
1	原稿は〔1～97〕〔98～107〕の2種類。つなぎの欠落部分は、【F12-1-1】を参照のこと。
2	年譜風にまとめている。
3	静岡商業学校の退学から蒲原有明との出会い。民俗学への開眼。
4	石川啄木全集編者の吉田孤羊に送った青写真と同じ。内田武が見出した「石川啄木書簡」が全文写されている。
5	①昔話―鹿角郡昔話、②方言―鹿角郡方言、③内田武志著「鹿角方言集」。書簡引用が多いため、内容としては【F16-2-1】がまとまっている。
6	〔1～16〕洗沢敬三との出会いの経緯。論考引用が多い。〔29～31〕洗沢敬三が「静岡県方言誌」の出版に興味を示す。
7	①アチャック・父の病・空襲・学生動員、②疎開、③柳田国男「菅江真澄」を学ぶ、④立山文庫の図書借用・「秋田叢書」メモ作成・「真澄遊覧記総索引歳時篇」原稿作成、⑤「菅江真澄研究所」「菅江真澄研究会」設立、⑥柳田国男書簡
8	内田武志とサト、高橋ツネ伯母（サトの）、高橋正三・せい・ツネ
9	「内田君はどうしたらうと気にしていた。焼け残ったために世の中に役立つことをしたい。もう外部との文通は怠ることにした」。宛先住所：鹿角郡毛馬内町高橋正三氏方「内田武志君」
10	「毛馬内町長伊藤良三から秋田叢書と同別集を借用した（当時、立山文庫の管理者）」
11	
12	「蒲原有明の動静を心配していたが、著書で鎌倉で元氣であることを知った」
13	昭和21年8月21日、洗沢敬三による内田家訪問前後のこと。妹たちの就職。包紙に「菅江真澄研究会を創立して ①ハチの上京、②洗沢敬三来訪記録（成田彦米書簡）、③真澄遊覧記総索引を諸氏に寄贈、④賛助員の協力、⑤高倉新一郎書簡（松前資料）、⑥「松前と菅江真澄」、⑦柳田書簡」とある。
14	「真澄遊覧記総索引歳時篇」から、洗沢敬三内田家訪問を挟んで、真澄研究に打ち込むまで。県立秋田図書館蔵の「北海道雑稿」、東山文庫「風の落葉二」「同六」から北海道のことを調べたいと思っていたところ、高倉新一郎から書簡【F1-3-4-①】があった。
15	「先日はお元氣なので安心した。青森県内の資料については、青森市図書館の吉岡館長に聞くと良い」
16	「鈴木醇（北海道大学教授）を通じて書簡を受け取った。「松風夷談」と「香蘭」を別便で送る。「松風夷談」は蠣崎敏氏かその祖先が、氏家唯右衛門の手録から引いたものであろう。「爰瀾詩歌合」「えぞのてぶり続」には興味がある。研究会にも是非入会したい」
17	「総索引歳時篇」を送ってほしい。数年来、青森県内の真澄の足跡を調べている。遺墨も数点あり、また、佐藤部所蔵の『外浜奇勝』を入手した。また、真澄翁筆と思われる肖像画を発見したが、印草は類例があるか。（印草は略）」
18	「以前、栗盛教育団の所蔵本は見ることがある。明徳館本を見る機会があったそうだが、手紙が21日に届いたので行けなかった。洗沢氏の講演会は聞きに行きたい。館野越の山崎家（北畠家）は親戚筋にあたるため資料を見せてもらったが、何も残っていないようだ。今後も、青森県内の足跡を訪ねてみたい」
19	「真澄遊覧記全般の抜粋、解題、民俗語彙の案をだそうと考えていたが、出版事情が許さない。そこで、信越、羽羽、南部、津軽、松前と地域ごとに出すことにした。松前を最初にしたのは、未発表の著作がさまざま見つかったためである」
20	「松前と菅江真澄」を受け取った。「かたる袋」と「えぞのてぶり続」に興味深く見た。宛先住所：秋田市東根小屋町秋田師範学校女子部 秋田文化史研究会 内田武志殿
21	包紙に「原稿六 菅江真澄資料を蒐集する ①大館の栗盛家・百十九年墓前祭、②賛助員そのほかの助力、③秋田での反響、柳田国男氏書簡（ハガキ）【F1-4-3-②を指すようだが年代が異なる】とある。昭和22年の春から栗盛教育団での書写作業が始まった。その経緯を書いている。昭和22年、没後119年墓前祭の寄せ書きがある【F1-4-2①～⑤】。
22	「他見を許さなかった栗盛家への贈呈本として、上京したハチに柳田国男が「菅江真澄」を持たせてくれた」
23	3種類あるうちの1種。
24	①～⑤は、昭和22年・没後119年墓前祭の寄せ書き。
25	
26	
27	
28	
29	【F1-4-1-①の包紙にある「秋田での反響」に該当か】昭和22年に秋田女子医学専門学校が廃校になり、ハチは秋田師範学校教諭に採用。下の妹は東北医学専門学校に転校、ハチの授業のない日は、大館に行き、書写作業をする。「秋田の山水」などが野菊叢書から刊行された経緯。昭和23年までのことが内容。
30	宛先住所：秋田市亀ノ町東土手町42 小林三郎氏方 内田武志殿。「総索引歳時篇」は届いたが、手紙は検閲のために遅れた。真澄の2番は貴君の判定が正しいようだが、事前に同意を求めて、余計な弁論をせずに直観に書けば良い。功名心に逸るな」
31	
32	【「秋田の山水」が秋田野菊会から発行された経緯、内容問合せハガキについては、上記①に書かれている】

F				枝番	通番	(資料形態)	資料名
1	1	1		1			(伝記原稿107枚) 本論・その一・教育～小学校のころ～【F12-1-1の清書原稿】
1	1	2		2			(伝記原稿4枚) 本論・その一・教育～移住～、～中等教育・中等教育からの脱落～
1	2	1	①	3			(伝記原稿18枚) 二、民俗学を知る～石川啄木書簡～
1	2	1	②	4			(青写真4枚、写真8枚) 石川啄木書簡青写真、写真(キャビネ判)
1	2	2		5			(伝記原稿66枚) 二、民俗学を知る～蒲原有明先生と柳田国男先生～
1	3	1		6			(伝記原稿19枚) 四、渋沢敬三先生、『静岡県方言誌』【真番号〔17～28〕はF4-3-2-①】
1	3	2	①	7			(書写原稿) 伝記原稿の項目立て…【F1-3-2-④ 五、北への志向】
1	3	2	②	8			(書写原稿) 鹿角転居先住所
1	3	2	③	9			(書簡、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和21年1月7日付
1	3	2	④	10			(伝記原稿8枚) 五、北への志向
1	3	2	⑤	11			(書写原稿)「真澄遊覧記総索引 歳時篇」奥付・目次・あとがき(昭和21年5月15日発行)
1	3	3	①	12			(伝記原稿2枚)「菅江真澄が温暖の地から「北への志向」を志した…」
1	3	3	②	13			(伝記原稿9枚)「『犬歩当棒録』の465ページに～」【F1-3-2-④から続く】【③へと続く】
1	3	3	③	14			(伝記原稿5枚)「先生は「又淋しくなる」身を案じて下さったが、～」【②から続く】
1	3	3	④	15			(書簡、書写原稿) 渋沢敬三書簡、昭和21年9月4日付
1	3	4	①	16			(書簡、書写原稿) 高倉新一郎書簡、昭和21年11月8日付
1	3	4	②	17			(書簡なし、書写原稿) 成田彦栄書簡、昭和21年7月23日付
1	3	4	③	18			(書簡なし、書写原稿) 成田彦栄書簡、昭和21年8月22日付
1	3	4	④	19			(書写原稿)「松前と菅江真澄」まえがき(昭和24年4月1日発行)
1	3	4	⑤	20			(書簡、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和24年5月18日付
1	4	1	①	21			(伝記原稿8枚) 菅江真澄資料を蒐集する、「大館市の栗盛家は～」
1	4	1	②	22			(伝記原稿2枚)「菅江真澄のすべてに取り組もうと～」【①の前段だがつながりが悪い】
1	4	1	③	23			(チラシ、書写原稿) 菅江真澄研究会の趣旨(謄写版、表ウラ1枚に亘る)
1	4	2	①	24			(寄せ書き) 昭和22年墓前祭寄せ書き…栗田茂治、奈良環之助、木野内敬二、小林新、柳原久之助、柳谷直比古、栗林治郎作、岩本秀政、内田武志
1	4	2	②	25			(墨絵) 木野内敬二による絵…「此丘上に真澄の墓あり 昭和二十二年七月」
1	4	2	③	26			(寄せ書き、大型) 栗田茂治、奈良環之助、柳谷直比古、栗林治郎作(広業)、柳原久之助、木野内敬二、小林新
1	4	2	④	27			(墨絵) 奈良環之助による絵、真澄墓碑…「河海を眺めて百十九年 環」、栗田茂治の署名
1	4	2	⑤	28			(墨絵) 奈良環之助による絵、金足小泉での会合…栗田茂治による那珂通博漢詩の写し
1	4	3	①	29			(伝記原稿6枚、チラシ)「世の荒波は、内田ハチの勤務する」、秋田文化史研究会の発定(謄写版)付
1	4	3	②	30			(書簡、書写原稿) 柳田国男ハガキ、昭和21年5月30日付
1	4	3	③	31			(書写原稿)「秋田の山水」・「菅江真澄の日記」奥付(昭和23年7月1日発行)
1	4	3	④	32			(冊子)「秋田の山水」、秋田野菊会由来の新聞記事、内容問い合わせセハガキ、祭魚洞文庫用紙(薄)4枚・(朱)2枚

- F 16 ← 【同上】  
 F 17 ← (9) 昭和51年～56年 年譜資料  
 F 18 ←菅江真澄未刊文献集原稿 他  
 F 19 ←自己確立への道・他(二人の師の終焉とわたくしの覚悟)  
 F 20 ←渋沢敬三追悼・沢田四郎作

## 目録の凡例

- ・通し番号…資料の管理は、通し番号の左に付したF番号以下の数字でおこなうが、わかりやすさを考えて通し番号を付けた。
- ・目録で、例えば「F 1—2—3—④」と表記する場合は、ファイル1—(A 4封筒) 2—(B 5封筒) 3—(枝番) ④を意味する。
- ・備考欄には、資料の内容などのまとめやその一部を記載するなどし、内容を推測できるようにした。これは当該資料を中心にして紹介した企画コーナー展「真澄研究者内田武志の新資料」(令和2年10月17日～12月6日開催)のための覚書である。
- ・資料形態をはじめの( )内に記した。主な分類とその説明を次に示す。
  - 伝記原稿…武志の一人称で書かれているが、ほぼハチによるもの。武志の自筆原稿の場合は、その旨を示した。200字詰原稿での枚数を基本としている。
  - 書写原稿…原稿用紙に書簡などを書き写したものの。
  - 書写用紙…原稿用紙以外の紙に書き写された文章。
    - 書簡…封書とハガキを含めて「書簡」で表し、ハガキの場合のみ「(差出人) ハガキ」とした。なお、宛先を示していないものは内田武志宛である。ハチ宛、武志とハチの両名宛の書簡については、それぞれの宛名を明記した。
  - 書簡なし、書写原稿…書簡の実物はないが、原稿用紙に内容が書き写されたもの。
    - チラシ…一枚の紙に、謄写されたようなもの。
    - 冊子…背表紙の付かない、薄い刊行物。
    - 雑誌…定期刊行物など。
  - コピー…図書館などからの収集や、原稿に書写するなどした複写物。
  - ▲書簡…内田武志及び内田ハチが他者に宛てて出した書簡。ハチが資料収集の一環として、受取人から返してもらった書簡(▲印を付した)。
  - △書簡…他者宛の書簡。資料収集の中で内田ハチが特に入手したり、内田武志に資料として提出されたりした書簡(△印を付した)。
  - 雑誌切抜…内田ハチが資料収集にあたって、該当の頁のみを切り抜いたもの。
  - メモ書き…原稿あるいは用紙に書かれたものであるが、成文とはなっていないもの。
    - 別刷…内田武志の論考だけが印刷されて製本されたもの。
    - 掲載雑誌…内田武志の論考や報告が掲載された雑誌がそのまま保存されているもの。

作成にあたっては、ハチの整理のままで、それをリスト化することに徹した。

上に、「新聞折り込みチラシなどに、その資料の位置づけなどが書かれた用紙がある」としたが、そのメモ書きが何度も書き直されるなどして、何枚もある。今回の目録作成にあたっては、そのメモ書きのうち、資料理解として必要な数枚については、資料として目録に加えたが、その他は資料を挟み込むなどの状態のままで保管し、独立した資料としては登記していない。

今後はそれらのメモ書きを整理しながら、ファイルを組み替えるなどの整理、少なくともファイル内の順番の入れ替えなどが必要になるかもしれない。その意味で「(仮)目録」ではあるのだが、今回は「第1版」の意味を含めて、「第3期内田文庫資料目録」として公表するものである。

(主査兼学芸主事 松山 修)

※第1期内田文庫資料の目録については、冊子にまとめられて菅江真澄資料センタースタディールームの開架図書となっている。また、第2期内田文庫資料の目録については、内部資料として作成済みである。しかし、いずれも内容が推測できる目録にはなっていないため、今後、内容を含めた目録の公表をセンターとして考えていきたい。

## ファイル番号について

資料整理にあたり、内田ハチによるファイル番号に替えて、管理用のファイル番号を付した。その変更は下記の通りである。

整理後のファイル番号 ← (内田ハチによるファイル番号) 見出し

※漢数字を算用数字に統一した。

- F 1 ← (1) 生い立ち 年譜資料
- F 2 ← (2-1) 明治42年～昭和8年 年譜資料
- F 3 ← (2-2) 昭和8年(アイヌの星)その他…静岡県方言集
- F 4 ← (3) 昭和9年～17年 年譜資料
- F 5 ← (4-1) 昭和18年～22年
- F 6 ← 【同上】
- F 7 ← (4-2) 昭和18年～28年 年譜資料 昭和21年～28年
- F 8 ← 【同上】
- F 9 ← (5-1) 昭和29年～33年 年譜資料 31年
- F 10 ← (5-2) 昭和32年～33年
- F 11 ← (6-1) 昭和34年～38年 年譜資料 34年～35年
- F 12 ← (6-2) 昭和36年～38年
- F 13 ← (7) 昭和39年～45年 年譜資料
- F 14 ← 【同上】
- F 15 ← (8) 昭和46年～50年 年譜資料

### 第3期内田文庫資料目録

平成31年（2019）2月、内田由紀子氏から、内田ハチが逝去するまで保管していた資料が当館に寄贈された。当館にとっては、菅江真澄資料センター開設前の平成7年（1995）に内田ハチ・由紀子両氏から寄贈された第1期、それに内田家の関係者から平成22年（2010）に寄贈を受けた第2期に続く資料群となった。そのため、これを第3期内田文庫資料として受納することにした。

平成31年3月に刊行した『真澄研究』第23号では、第1期に寄贈を受けていた資料の中から『武自身の年譜』（武は武志の本名）を活字化した。その冒頭にも書いたが、内田武志が秋田に疎開した前後について明確にしておきたい次第があったため、内田武志自身がまとめた資料（実際は内田ハチによる筆記）に根拠を求める目的で公刊したものである。

第23号の原稿校正をおこなっている時期に第3期となる資料が入ってきたため、『武自身の年譜』と関連が高いばかりではなく、例えば、『武自身の年譜』で○印が付いている資料が第3期に含まれていることなどが予見されたが、第23号にそれらを詳しく報告することはできなかった。

今回、目録として整理することによって、果たして、『武自身の年譜』に符合する実際の資料が、この第3期内田文庫資料に含まれていることがわかった。言ってみれば、『武自身の年譜』と第3期内田文庫資料は対になるものである。

内田ハチは、兄である武志の逝去後から、その伝記をまとめるべく、書簡を整理して原稿用紙に書き写し、また、著書出版時の事情を関係者に問い合わせるなどして、資料の整理をしていた。伝記の一部として書かれた原稿は、武志の一人称を採りながら、ハチがまとめたものである。ただ、それはハチによる創作などではなく、武志自身が幾度となく自身の生い立ちなどをまとめた原稿がそのベースになっている。

第3期内田文庫資料は、16個の紙ファイルケース（B5判）に分かれており、さらに各々の中でいくつかのクリアファイルにまとめられていた。また、新聞折り込みチラシの裏などに、その資料の位置づけなどが書かれた用紙もあった。兄武志の逝去後、ハチ自身が残された人生をかけて整理にあたっていたことがわかる。

今回の資料整理にあたって、資料を受け入れた状態でそのまま保管できればよかったが、資料が必要以上に折られる状態でクリアファイルに押し込まれているものがあるなど、そのままの状態では保管には不向きであった。そのため、改めてA4判のファイルなどに入れ直ししながら、ハチがまとめていた状態をなるべく崩さないようにして番号をつける作業をおこなった。結果として、受け入れ時の16個のファイルケースは、20個に数が増えることになった。

受け入れ時のファイルケースは、13個が年代順（整理後17個）に整理され、最後の3個が項目ごとの整理となっているために、内容が重複しているものもある。また、一応年代順になっているとはいえ、内容によっては複数のファイルの資料が互いに関係しているものもある。年代別に組み替えるなどの必要も感じるが、今回の目録

# 真澄研究 二十五号

令和三年（二〇二一）三月二十四日発行

編集・発行

秋田県立博物館

菅江真澄資料センター

〒〇一〇〇二二四

秋田市金足鳩崎字後山五二